紺碧の空戦録

甲殻類

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紺碧の空戦録

【Ｎコード】
Ｎ８８３５ＢＫ

【作者名】
甲殻類

【あらすじ】
過去に逆行した戦闘機パイロットが、異なる歴史を辿る日本でもう一度太平洋戦争を戦うお話です。

プロローグ

２０１２年５月１２日　瀬戸内海

春の夜釣りは、凪に限る。

黒間以蔵は５月半ばだというのに冷たい風が吹く夜の海にそっと船を漕ぎだした。

ヤマハの船外機が軽快なエンジンを響かせて、小さな彼の漁船を沖へと走らせる。飛沫が顔にかかるが、少しも気にならなかった。

夜の海は酷く凪いでいた。こんな夜はメバルがよく釣れる。

メバルは春告げ魚とも俗称され、春がシーズンだ。ほぼ年中釣れるが、やはり春先が一番よく釣れ、味もこの時期が一番美味だった。

沖のポイントは、小舟でも３０分足らずの場所だった。３０年以上も通いつめている場所だけあって、勘だけでだいたいの位置が分かる。

黒間は釣り場に着くと船外機を止めるとアンカーを下ろし、釣りの準備にかかった。

三日月夜だったが、仕掛けの準備に苦労はしない。慣れていたし、夜目は効くほうだ。齢は古希に至るが、視力には自信があった。完全な闇夜でも、釣り針に糸を結わえることぐらい楽勝だった。あまりにも視力が良すぎて、若い頃には昼間に星が見えたこともある。

何故、それほどまでに視力が優れていたかと言えば、修行の結果という他なかった。

視力を鍛えるために星空を見上げて夜を明かし、動体視力を強化するために駆け抜ける列車に乗った人間の数を数えた。食べ物にもこだわり、生の人参を馬のように貪り食べたこともある。

そんな修練を積んだのは、黒間が嘗て戦闘機のパイロットだったからだ。

今は亡き帝国陸軍航空隊の誇る隼戦闘機のパイロットだった。
目が良くなければ、パイロットは務まらない。特に戦闘機パイロットは。
空中戦は先手必勝だった。先に敵を見つけた方が、勝つ。空戦の大半は奇襲で始まって、奇襲で終わる。格闘戦というのは、奇襲が失敗した後のゴタゴタにすぎない。
極論すればヘタクソがやることだった。
飛行学校で、お前は目が良いから大事にしろと指導教官に言われた。
その教えを愚直に守り通したからあの戦争を生き残ることができたと思っている。
戦争には勝てなかったが、パイロットとしては充実した日々だった。
敗軍の兵ということで、戦後に生活でいろいろ不愉快な思いもしたこともあるが、既にその多くは時の彼方にあった。
思い出という奴だ。歳をとると思い出という奴は何者にも代えがたい価値を持つものとなる。
独居の老人となれば、特にそうだ。
仕事はとっくの昔に引退していた。家内は随分前に病を得て他界している。
軍にいた頃散々飯炊きをやらされたおかげで、自炊には自信があった。収入は少ないが、恩給と年金があるから食うには困らない。
黒間は孤独だったが、退屈とは無縁だった。娯楽には事欠かない時代だ。テレビの時代劇や、ＮＨＫの大相撲だけでも十分だった。
趣味の釣りに精を出す事ができる。
今夜も、今夜で夜釣りだった。
釣り糸を垂れながら、水面に移る月を見ている。
空には三日月がある。
魔法瓶のキャップを空けて、熱燗を口に含んだ。体を温めるために持ってきた酒だが、月見酒も悪くないと思ったのだ。

そんなことをツラツラと考えていた時、変化が起きた。
胸に突き刺すような痛みがある。
のろのろと探るように胸に手をあてる。何もなかった。鼓動がない。
体が傾いで床に静かに倒れた。
酸素を求めて口を開くが、体は呼吸の仕方を忘れたようだった。
意識が直ぐさま失われていく。
そっと忍び寄る死の気配は、どこか懐かしいものだった。
彼方に迎え火を認めたとき、黒間は全人生等しい時間を一瞬の内に追想した。
走馬灯だ。しかし、走馬灯を見たのはこれが初めてというわけではない。
半世紀ほど前にも、似たような経験をしたことがある。
アレは何だったかなと思った時、黒間の意識は跡形もなく消失していた。
そして、気がつくと天井の木目を見上げていた。
しばらくそのまま天井の茶褐色の木目を凝視してから、黒間はそろそろと息を吐いた。そして、思い切りむせた。激痛が走り、意識が一気に覚醒する。
少しでも身を捩ると激痛が走ったが、首を巡らすと真っ白なシーツが目にはいった。意識がはっきりしてくると消毒液の匂いが鼻についた。
ここは病院か？
どうやらそうらしかった。隣のベッドは空だ。大部屋で、黒間が寝ているベッドを含めて６つあった。その全てが空だった。
とても静かで人の気配はない。
それにしても何とも古臭い感じの病室だった。今時珍しい。
建築は、明治か大正か。病院というよりは文化財という雰囲気だった。壁もコンクリートではなく、木造で漆喰で固めてある。天井にぶら下がっているのは蛍光灯ではなく、裸電球だった。

ベッドの中身は、綿やスポンジではなく藁が入っているらしかった。昔の病院のベッドみたいだった。

昨今の医者不足や医療崩壊はかなり酷いと聞いていたが、こんなオンボロな病院まで現役として酷使しなければならないほど医療界隈は逼迫しているのだろうか？

いくらなんでもそんなことはないと思った。

病院ではなく、博物館に迷い込んで展示品の中でうっかり、うたた寝をしてしまったという方が考えた法が正しいような気がした。

しかし、全身に巻かれた包帯や湿布は間違いなく本物の包帯であり、湿布であった。あちこちが火を吹くよう熱をもって不調を訴えている。

これは全身打撲ではないか。黒間はそう思った。

何となく身に覚えがあるのだ。とても昔に、似たような目に遭ったことがある。

確か、１９か、２０の頃の出来事だ。

飛行学校で錬成を終えて、実戦部隊に配置されてから直ぐに事故があった。当時の主力機だった九七式戦闘機の発動機が離陸直後に停止した。その頃には、よくある故障だった。飛行そのものが命がけの時代だった。連絡機は滑走路に戻ろうとして旋回したところで失速。錐揉み状態で墜落した。

機体は大破。黒間は座席から放りだされて２０m先の民家の壁に激突。全身打撲、骨折十数箇所、出血多量。心停止の後、応急処理で復活。そして、また心停止。後方の病院に担ぎ込まれたときは殆ど死体のような有様だったとそうだ。

その時は、２週間も昏睡が続いて、医者も諦めかけたときに唐突に目が醒めた。

初めて走馬灯を目にしたのも、その時だったと思う。

では、これは走馬灯の続きなのか？

だとしたら、何とも妙な感じだった。夢にしては、あまりにも出来過ぎている。

とにかく、喉がとても乾いている。

「おーい、誰かいないのか」

声を張り上げても誰も返事をしなかった。

叫んだせいか、喉の渇きが酷くなった。水場まで歩くしかないらしい。しかし、全身の重い痛みを思うとあまり賢い方法ではないように思われた。

夢の中ぐらい、もう少し都合良く物事が進んでもいいと思った。

空を飛べるとか、逆に向こうから水が溢れるくらい流れてくるとか、それぐらいのサービス精神があってもバチはあたらないのではないか。

黒間の深刻な、或いはどうでもいい思案は直ぐに終わった。誰かが来る気配がしたからだ。

「はーい、どうしましたかー？」

やってきたのは何十年も前に廃れた古めかしい白衣を着た看護婦だった。

しばし、黒間は時代錯誤な格好をした夢の住人に見入った。

なんとも可笑しい面白みを感じたからだ。夢の続きにしては、変わった趣向である。

次は何が出てくるのか期待していた黒間はそのままじっとしていた。しかし、何も起きなかった。起きたことと言えば、

青い顔をした看護婦が、

「先生！すぐに来てください！！３０３号室の患者さんが目を覚ましました！！！」

と、叫んだことぐらいだった。

それから大騒ぎになった。

何人もの医者がやってきて、取っ替え引っ替え黒間の体を調べて回った。着ていた寝間着も剥ぎ取られ、検査室と病室を寝たまま半裸で行き来することになった。

レントゲン、心電図、採血、血圧、尿検査。脳波の検査までやらされた。そんな検査は必要ないと黒間は訴えが、医師には一顧だにされなかった。

ひと通りの検査が終わったころには日が暮れかけていた。窓辺からは夕焼けの街が見える。その街並みはどう見ても昭和初期の日本の風景だった。

映画のセットかと思ったが、確かめることも億劫だった。

ずっと寝かされたままだったのに、なんだかとても疲れた。

「これは何なんだ。いつになったら、目が覚めるんだ?」

それともこれは、夢ではないのか。

黒間は看護婦に貸してもらった手鏡を見た。自分の顔が写っている。皺もシミもなく、血色はかなり悪いが若さに満ちあふれていった。

若き日の自分の顔を見て、黒間はとてつもない頭痛を覚えた。

これが、もし夢でないのだとしたら、何かとてつもないことが起きているに違いなかった。

黒間は既に、ある可能性に気づいていたが、それを認めてしまうにはとてつもない勇気が必要だった。

しかし、人生の多くと同じく、それは向こうから否応なしにやってきた。

目覚めてから3日ほどしたある日の午後だった。
黒間は未だにこの世界に慣れることができていなかった。自分でも寝ているのか起きているのか定かではない状態だった。

「おい、クロ！生き返ったって本当か！見舞いに来てやったぜ！」

勢い良く病室の戸を開け放ち、バカでかい声で叫ぶ男には見覚えがあった。
というよりも、忘れたことなど一度もなかった。
黒間は息を呑んで、その男をまじまじと見た。
自分よりも一回り背が高く、剽軽を絵に描いたような三白眼の若者だった。

「なぁ、三途の川ってどんな感じだった？光る花畑は見たのか？臨死体験したんだろ？教えてくれよ」

べらべらとテレビのお笑い芸人のように喋る男は、黒間が絶句していることに気付いた。

「どうしたんだ？幽霊でも見たような顔してるぜ？」

運の良さには自信があるというのがそいつの口癖だった。
馬鹿馬鹿しい意味不明な自信家だった。
その癖、あの戦争ではつまらない飛行事故で死んでしまったバカな奴。

「斎田・・・斎田三矢なのか」
「おいおい、どうしたんだよ。泣くようなことはないだろ。俺に会えて、そんなに嬉しいか？尻尾振ってワンって鳴いたっていいだぜ？」

斎田はニヤニヤと笑って言った。
全く、生死の境を彷徨っていた親友に対する態度ではなかった。
しかし、それがこの男の常だった。親しくなるほど扱いがぞんざいになる。それでも見舞いに来てくれるあたりが、この男の本音の在り処を示していた。

「ああ、嬉しいな。こんなに嬉しいことはない」

嗚咽と共に、素直な言葉が出てきた。

「そうか、クロ。頭を打ったんだったな。しっかり、治療してもらえよ」
「そんなんじゃない！」

黒間は、自分でも驚くほど大きな声で叫んでいた。

「どうしたんだよ。大声出すなよ。軍医殿が来たらどうするんだ？」
「・・・バカヤロウ」

涙が止めどもなく溢れ、枕を濡らした。

「会いたかった、斎田。また会えるなんて、夢のようだ。ここは天国なのか？」
「クロ、本当に大丈夫か？医者を呼んできてやろうか？」

斎田という男にとっては珍しいことに、神妙な顔をして言った。

「いや、いいんだ。大丈夫だ」

激情の涙と共に意識が、はっきりと来るのが分かった。
もはや認めなければならなかった。
これは夢でもなければ、幻の世界でもない。ここは過去だ。昭和１４年の夏だ。
どういう理屈か、理由かは不明だったが、自分は過去に戻ってきてしまったらしい。そうとしか考えられない状況だった。
もしかしたら、自分が覚えている７０余年に及ぶ人生が、昏睡中に見た夢かもしれなかった。
しかし、アレが全て夢だと片付けるには、あまりにも重すぎる。
戦場の空で過ごした青春。戦場とは別の意味で辛く苦しかった敗戦の混乱に生きた日々。心の底から惚れた女。彼女と共に過ごした日々。幼き日の子供たちの笑顔。夏休みになると帰省する孫たち。
夢幻と片付けるには、あまりにも重すぎる。
そういえば、自分がこんなことになってしまって、子供たちや孫たちはどうなっているのだろう？

「おい、顔が真っ青だぞ。気分でも悪いのか？」
「気分というか、気が変になりそうだ」

黒間は正直に言った。
何言ってやがると斎田は吐き捨て、見舞い品のつもりかバナナをベッド脇の棚に置いた。
この頃は、まだ高級品だったはずだ。一体、どこで手入れてきたのだろう？
斎田という男は不思議な才覚をもっていて、南方戦線のどんなに糧食が不足している戦場であってもどこからともなく甘味を集めてきた。
もしもあの戦争を生き残っていたら、戦後の闇市で嘸かし活躍したことだろうと空想した記憶がある。

「それでも食って元気だせ。小隊長が近いうちに見舞いに来るそうだから、その時までにはその辛気臭い顔をなんとかしろ」
「小隊長が来るのか」
この頃の小隊長とは誰だったか、あまり記憶にない。
「なぁ、小隊長って誰だったかな」
「足利少尉に決まってるだろ。記憶喪失か？」
しかし、それはおかしい。
何故ならば、自分の記憶が正しければ、足利少尉は自分が事故を起こした頃には、支那事変の作戦中に戦死していたからだ。
見舞いに来たのは、新任の新堂准尉だったはずだ。
真面目すぎるところが玉に瑕だが、公平で信頼できる人物だった。技量も抜群だった。
最初は、新堂准尉の3番機、あの大戦前が始まる直前に2機機を任された。
その新堂准尉は昭和17年のフィリピン戦で戦死している。対空砲火が偶然、彼の九七式戦を直撃したからだ。機体は木っ端微塵で、死体も残らなかった。
「・・・なぁ、斎田。変に思わないで欲しいんだが、ここはどこだ？上海の陸軍病院か？」
「上海？何言ってるんだ？記憶をなくしたのか？」
「すまん。とりあえず、何も聞かずに答えてくれないか。重要なことなんだ」
ややあって、斎田は答えた。
「ここは、広島の陸軍病院だが・・・上海ってのはどういうことだ

？」

黒間はありえない答えに目を見開く。

「俺の記憶違い、なのか・・・？」

いや、そんなことはありえない。

あれは昭和１４年の夏。支那事変の最中に起きた飛行機事故だった。原因は、発動機に燃料を供給するパイプの一つが破断してためにおきた発動機の停止だ。

たしか全治２ヶ月だった。入院先は上海の陸軍病院だった。他にも大勢の負傷兵がいたはずだ。病院は狭くて不潔で、こんなところに２ヶ月もいては、別の病気になりそうだった。

最後は、脱走さながらに２週間あまりで退院した記憶がある。おかげで治療が不完全になり右足に軽い障害が残ってしまった。

それがどうして内地の陸軍病院に入院することになっている？

「斎田、新聞をもってきてくれないか」

「別に構わねぇが・・・なんだか、お前。急に老けたように見えるぜ」

実はそうなんだよとは言えなかった。

それから、検査の時間以外は、ベッドの上で現状の確認と把握に費やすことができた。

どうやら医者は黒間の話から頭部強打により、記憶が混乱してい

ると判断しているらしかった。

新聞や書籍を求めると、それが簡単に手に入るものなら、すぐに用意してくれた。記憶の混乱から回復するための治療の一貫と考えているらしい。

黒間にとっては好都合な話なので、敢て記憶の混乱については曖昧な回答をしていた。

記憶はともかく、混乱しているのは本当のことだった。

昏睡していた間の新聞を全て読み終えるとさらに1ヶ月分の新聞のバックナンバーを取り寄せてもらったが、自分の記憶と大きな違いがあって驚かされた。

まず、驚いたのは支那事変が起きていないことだ。

黒間の記憶では、支那事変は昭和12年に始まる。

当時はあまり詳しい事情を知ることはなかったが、戦後のテレビ番組で毎年8月になると繰り返し似たような特集が組まれていたので、事変の成り行きは掴んでいる。

戦争が始まった原因は、複雑な歴史的な経緯によるものだが、直接的な導火線は昭和12年7月7日の蘆溝橋事件だった。北京郊外に駐屯していた日本軍への攻撃と反撃が雪だるま式に膨れ上がり、日中は全面的な武力衝突へと突き進むことになる。

それが泥沼になって諸外国の介入を誘い、太平洋戦争へ続くことになるのだが、新聞を読む限りは日本と中国は戦争状態にはなっていないらしい。

黒間は戦中の日本が報道管制を敷いて不利な情報を隠していたことを戦後に知らされたので、それなりに疑いの目をもって新聞を読んだが、戦争に関する記事は全く見当たらなかった。

辛うじて、軍隊に関係する記事を見つけても、予科練の募集や兵営の暮らしを伝える当たり障りのない内容ばかりだった。

中国に関する報道はあまり多くなかった。蒋介石の国民党と毛沢東の共産党の内戦が続いていて、難民が満州国や上海の租界に押し寄せているという記事はあったが、日本との武力衝突はおきていな

い。

満州国は黒間の記憶どおりに建国されているらしかった。

その証拠に新聞には満蒙開拓団の暮らしを紹介する記事が度々掲載されている。しかし、日産２０万バレルの生産達成を報じる北満州油田というのは、記憶にはない。

新聞には写真付きで、富み栄える帝国の新エネルギーと題して、見開き１ページで満州国の油田開発について報じていた。

この油田の開発には、同盟国ドイツの優れた技術が活用されており、大連の製油場では様々な石油製品が製造され、莫大な外貨を日本にもたらすとしていた。

そして、ヒトラーとムッソリーニを称える記事を肖像写真付きで掲載していた。

ヒトラーの写真なんて新聞に載せて大丈夫かと思ったが、ユダヤ人虐殺が広く知らるようになるのはドイツが敗戦した後のことだった。

黒間は、ヒトラーやムッソリーニを英雄のように書く新聞には嫌悪感しか感じなかった。しかも、その記事を載せているのが、朝日新聞であることに黒間は二重の憤りを覚えた。

そして自分の記憶どおりにドイツとの軍事同盟に向かう日本の未来に果てしない不安を感じた。

どうやら日独防共協定という軍事同盟が既に結ばれてしまった後らしい。

日本の未来を思うと頭痛がしてくるが、いろいろ自分の前世とは違うことが起きていることも分かった。

おそらく、この新聞記事にある北満州油田とは、大慶油田のことだろう。

大慶油田というのは、１９５０年代に中国の黒竜江省で発見された大油田のことだ。

図書館で借りて読んだ歴史小説で読んだことがある。あとがきの中で著者がこの油田がもっと早く見つかっていたら戦前の日本は産

油国になっていたと書いていた。そうすれば、アメリカの石油禁輸で追い詰められることはなくなり、太平洋戦争は起きなかったに違いないとしていた。

では、あの大戦は起きないのか。

そうとは思えなかった。今一度、人生をやり直すことになったこの世界の日本も、ドイツとの同盟に突き進んでいるらしい。

中国との戦争は起きていないが、このままではヒトラーの戦争に巻き込まれてしまいそうだ。

そんなことはまっぴら御免だった。

「俺はどうしたらいいんだ?」

神か、悪魔か、仏か、鬼か、誰がこんなことを仕組んだのかは分からないが、自分が過去に戻ってきた意味は一体何であろうか。

ドイツに行って、全ての元凶を暗殺して来いということだろうか。

しかし、そんなことはとてもできそうにない。独裁者なんだから、きっと屈強なボディーガードを山ほど用意しているだろう。そもそもドイツ語なんて喋れないし、ドイツにどうやったら行けるのかも知らない。そもそもヒトラーがドイツのどこにいるのかも分からなかった。

もう一度、隼を駆って祖国のためにその身を投げ出せというのなら話は分かる。

しかし、暗殺者の真似事なんて務まりそうはなかった。

前世で兵隊として多くの人間を殺めてきたことを否定するつもりはないが、それは兵士として軍命によって行ったもので、好きこのんで人を殺したいと思ったことはない。

そもそも、自分がなんでこんな目に遭っているのだろう?

また、戦争に行かなくてはいけないのだろうか?

戦争が無意味な愚行であることは前の人生で嫌というほど思い知らされている。

あんな苦しい思いをもう一度しなければならないのかと思うと逃げ出したくなかった。

そもそも、黒間が軍隊に入ったのはどうしようもなく景気が悪くて職がなかったからだ。飛行兵になったのは、塹壕を掘るのが嫌で、座ったまま戦争ができる搭乗員というのが楽そう見えたからだ。

実際は、さほど楽な仕事ではなかったわけだが。

「いっそのこと、軍隊を辞めて金儲けでもしてみるか」

前世で敗戦後に覚えた仕事は、自動車の修理だった。

パイロット時代に整備の仕事を手伝っていたことが身を助けた。手先が器用で、機械いじりは小さな頃から得意だったのだ。

戦前、戦後にも自動車はあったし、その修理業は儲かる仕事だった。

この時代の自動車は高級品で、とても壊れやすいものだ。その修理を請け負う自動車整備士はある意味、尊敬される仕事だった。食いっぱぐれる心配もない。

日本三大自動車メーカーの創業者は、戦後にバイクの製造会社を立ち上げるまで、自動車の修理業で身を立てていたことを思えば、自分が彼のようになることも可能かもしれない。

何しろ、これから起きることは全部分かっているのだから、金儲けに徹すれば無敵だ。

自動車整備士なんかにならなくても、株取引でもやっていける。これから成長する会社は分かっているし、その会社の株を買っておけば、株価は絶対に値上がりするからだ。

土地取引でもいい。川崎や千葉の漁村、寒村の土地を買っておけば、あと１０年もすると巨大な石油コンビナートが立つ。その前に土地を買い占めておけば、二束三文の土地が大金に化けるというわけだ。

その金でまた土地を買い占めて、転売を繰り返せば、一生使って

も使い切れないくらいの金になる。
それも悪くない人生だった。
欲のない人生なんて、灰色だと誰かが言った。
なんでこんなことになったのかわからないが、金儲けに勤しんだとして誰がそれを責める？
誰でも過去に戻って人生をやり直せるならと、一度くらいは空想してみたことがあるはずだ。
しかし、それでいいだろうかと迷っている自分がいた。
そんなことをしたら最後、この奇跡はあっさりと失われてしまうのではないか。
端的に表現すれば、罰が当たるのではないかと恐れていた。
想像以上に小心な自分に呆れる思いだったが、こんな奇跡を体験した後なら、少し信心深くなっても不思議ではないだろうと思う。
過去に戻って、もう一度人生をやり直すなど、奇跡以外の何者でもない。
その奇跡の意味に思い巡らすのは、ある意味常識的な反応だろうと思った。
とにかく、何か目標を立てなければ何も始まらなかった。
だが、自分は何を成すべきなのだろうか？

「黒間さん。検温の時間ですよ」

物思いに耽っていたせいか、黒間は看護婦が来たことに気づかなかった。

「ああ、すいません。気が付きませんでした」
「そうですか・・・元気をだしてくださいね。経過は良好って先生も言ってましたから。直ぐによくなって、また飛べるようになりますよ」
「そうだと良いんですけど」

黒間は看護婦の顔を見つめた。

「どうしたんですか？」

「いえ、ちょっとした例え話なんですけど、聞いてもらえませんか？」

若い看護婦は黒間の問いに困惑したらしかった。

しかし、黒間の態度から他意がないことを感じ取ったのか、素直に頷いてくれた。

まだ幼いといってもいいくらいの顔立ちだが、患者である黒間への受け答えは、既に生命を預かる者として一人前のそれだった。

「看護婦さん。もしも、人生をやり直せるとしたらどうしますか？」

「おっしゃることの意味がよく、分かりませんけど・・・」

深い意味はないんですと黒間は付け加えた。

「仮の話です。もしも、自分が８０近い老人だったとして、何かの間違いで若返って人生をやり直せるとしたら、どうしますか？」

「若返って人生をやりなおす、ですか？」

「そうです。人生をやり直すとしたら、です」

看護婦は困ったように額に手を当てた。

「ごめんなさい。やっぱり、よく分かりません。想像もつきません」

「そうですか」

黒間は自分がした質問の馬鹿さ加減に気付いて恥ずかしくなかった。

よく考えてみれば、こんな若者を捕まえて、人生をやり直せるならどうするかと問うなど狂気の沙汰だった。

若い彼女の前には、まだ無限に近い可能性が開けているのだ。やり直す人生などまだどこにもなく、それはこれから築いていくものだった。

「あ、でも、そうですね・・・」

黒間は変な質問をしたことを謝ろうとしたが、その前に看護婦は付け加えるように言った。

「もしも、そんなことがあるのなら、心残りを片付けたいと思うんじゃないでしょうか?」

「心残りですか?」

そんなものが自分にあっただろうか?

少なくとも前世の自分に、人生をやり直したいと思うほどの不平や不満はなかった。

先立った妻のことは残念だったが、彼女と過ごした最後の日々は決して辛く悲しいことばかりではなかった。死は彼女への愛を再確認するチャンスを与えてくれた。

仕事でも、大きな失敗はなかった。逆に大きな成功もなかったけれど、子供達が独立するまではきっちりと働いた。

悔いなどない、はずだ。

「ほら、きっと、いろいろ長生きしている間に諦めてしまったり、ダメになってしまったことってあると思うんですよ。私も本当はお医者さまになりたかったんですけど、勉強が苦手で看護婦になったんです。でも、小さい頃に戻ってやり直せるなら、今度こそはって思うんじゃないですか?」

「・・・そうかもしれません」
「私は、小さいころ体がとても弱かったんです。だから、大人になったら、お医者様になって恩返しがしたいなって思ったんですけどね」

でも学校のテストがいつもさっぱりでしたと、看護婦は笑った。
その笑みに、沈んでいく太陽が重なった。
強烈な夏の西陽が射していた。窓の外には、街並みを紅く染める昭和１４年の夏の太陽がある。
釣られて黒間も笑ったが、その顔からすぐに笑みは退いた。
どうして、こんな簡単なことに気づかなかったのだろうか？

「ああ、なんてこった・・・」
「ちょっと、黒間さん！何するんですか！ベッドに戻ってください！」

全身が不調を訴えていたが、黒間はそれを無視して寝台から立ち上がった。
それだけで目も眩むような痛みが走った。しかし、苦痛は少しも気にならなかった。そんなことよりも確かめなくてはならないことがある。
看護婦の制止を振りきって、窓辺に寄った黒間は、表に広がる風景に心打たれた。

「広島だ。ヒロシマの町だ」

そうだった。自分は広島の陸軍病院にいたのだ。
あの、ヒロシマだ。
自然と涙があふれた。泣くまいと思ったが、止められなかった。
彼方に見える広島城の天守閣。産業奨励館の半球形のドーム。高

層ビルなど一つもない。代わりに和洋折衷建築の商業ビルが低く広がっていた。

記憶の中にしか存在しない昭和初期の街並みだった。

アパートやマンションはなく、小さな平屋ばかりだった。江戸時代から続く屋根瓦の古い町並みや武家屋敷も見える。市内の流れる川には、松並木があった。コンクリートの法面はなく、昔ながらの石を丁寧に積み上げた堤防が見える。煙突からたなびく工場の煙が、違和感なく町の風景に溶けこんでいた。

空が広いなと思った。

当たり前だった。この時代にはまだ、電線や電話線は数えるほどしかなかった。それらが街の空を覆い尽くすのはずっとあとの話だ。

遠くから、豆腐売りのラッパや子供たちの遊ぶ声が風にのって聞こえる。路面電車の走る音や数こそ少ないがトラックや乗用車のエンジン音も聞こえた。

夕焼けの中に人々の生活があった。泣き、笑い、喜び、怒り、嘆き、愛する人間の生活がある。

それまで真空のように静まりかえっていた世界に、色彩が甦るようだった。

「綺麗だ・・・とても綺麗だ」

涙が止まらなかった。

こんな美しいものが、永遠に失われてしまったのだ。なんて罪深いことなのか。

「黒間さん、どうしたんですか・・・？」

鬼気迫る御前の泣き顔に、看護婦は呆然と声をかけた。

黒間は知っている。この広島の陸軍病院は、昭和２０年８月６日に原子爆弾の熱線によって焼きつくされ全滅するのだ。

熱線のみならず、同時の放たれた放射線によって生き残った人々も次々と原爆症で死んでいく。病院に収容されていた患者はもちろん、軍医や看護婦も例外ではない。

このうら若い看護婦も、きっとその中に一人に違いなかった。

黒間は、原爆の惨禍をこの目で見たことがあった。

本土決戦に備えて飛行禁止命令が出されていたので、翔ぶことはなくなっていた。代わりに、死体の収容と被災者の救護の手伝いをした。

支那戦線から、マレー、ニューギニア、フィリピン、そして本土防空に転戦を繰り返し、様々な戦場を見てきた黒間にも、原子爆弾による破壊は理解の限度を超えるものだった。

焼夷弾の都市爆撃とは明らかに次元の違う、徹底した破壊と殺戮だった。

原因が想像もつかない死に様をした死体がうず高く積み上げられ、終戦を経ても死体の焼却は終わらなかった。熱線で焼かれた路面電車には、炭化した人体が残されていた。河原には皮膚が焼きつくされた人々が、水を求めて群がって死んでいた。子供の死体もあったし、明らかに若い女性と分かる死体も見た。

黒間は、死に対する敬虔さを失うほどに死体を沢山見せられた。

瞼の裏で、この目で焼き付けた黙示録の風景が、夕焼けの街に重なった。

その瞬間に凄まじい寒気に襲われて黒間は震えた。

心残りと言えば、心残りだった。

あの時、Ｂ２９が単機で広島に向かっていることは、電探の警戒情報で知っていたのだ。

しかし、偵察機と判断されて、迎撃命令はでなかった。一式戦では、Ｂ２９の迎撃は困難だったし、燃料の備蓄は既に尽きかけていた。

それでも、それがどんなに困難で、無謀なものであっても、あの時、迎撃に出ていれば、原爆投下を阻止できたのではないかと、若

き日に悔やんだのは確かなことだった。
あの時の思いを果たしてみろということか。

「そういうことなら、受けてたってやる」

誰に宛てたかも知れぬ独り言は、黒間の静やかな宣戦布告だった。

ノモンハンの風　前編

１９３９年６月２０日　満州　ハイラル

満州の気候は厳しく、冬の寒さは筆舌に尽くしがたい。
しかし、そうであるがゆえに夏は素晴らしかった。
ハイラル平原は一面の緑に覆われていた。背の低い柔らかな草な水平線の彼方まで続いている。丘や起伏に乏しい地形だが、彼方にはなだらかな山が見える。その山も岩や木々があるわけではなく、平原と同じ下草が茂っていた。
視界の中で、目を引くものは少ない。
牧草を求めて移動する羊と馬に乗った遊牧民が目立つくらいか。
しかし、そうした異国情緒あふれた風景も最近はあまり見かけなくなっていた。
原因は至って簡単で、この時期のハイラルは日本軍航空戦力が結集する一大拠点となっていからだ。
黒間が所属する飛行第１１戦隊は、ノモンハンでの国境紛争に備えてハイラルに進出していた。

「９５・・・９６・・・９７・・・９９・・・１００！」

滑走路脇の草地で、腕立て伏臥腕屈伸を繰り返していた黒間以蔵はポンプアップした体を冷えた大地に投げだした。
体の熱が地面に吸い取られ、気持ちがいい。
周りには同じように休息をとる若者達がいた。いずれも帝国陸軍から航空徽章を与えられた戦闘機パイロット達だった。

「つぎー！うさぎ跳び１００回、往くぞ！」

体はまだ休息を欲していたが、次のトレーニングを始めなければならない。

黒間の声掛けで、他のパイロット達ものろのろと面を上げた。

「ちょっと休憩しないか？」

斎田三矢がその場にいた全員の声なき声を代弁して言った。

「駄目だ。ほら、立て。やるぞ」

地面に倒れたままの斎田を黒間は片手で引き揚げた。

上背は斎田の方があったが、骨格に蓄えた筋力は段違いだった。

二の腕は、人生をもう一度やり直すことになった日から倍近く太くなっていた。

2度目の人生をやり直すことになった日から、3ヶ月あまりが過ぎていた。

傷は完全に治癒し、部隊に復帰した黒間はそこで先輩たちから手荒い歓迎を受けたが、苦もなくそれを乗り切って、何食わぬ顔で日常に復帰した。

もっとも、あの戦争で戦死した人々と顔合わせるのはかなり複雑な気分だったし、忘れかけていた軍隊生活のイロハを思い出すのには、それなりに苦労した。

敬礼がなっていなくて、修正を食らったことも1度や、2度ではない。

陸軍伍長が今の階級だが、歩兵部隊とは異なり伍長というのは陸軍航空隊においては最下層を意味しており、パイロットとしては半人前の存在でしかない。こなすべき雑用は多かったし、先輩連中からのいじめは陰湿で不快なものが多かった。

それでもまた、空を飛べた時には心底から喜悦がこみ上げてきた。

それは前世での地上での暮らしがバカバカしくなるほどの爽快感だった。

喜びのあまり、訓練で少しばかりはしゃぎすぎてしまって面倒事を起こしてしまったのだが、改めて自分の適正というものを再確認すると少し気分が前向きになった。

それを思い出して、黒間は目を細めた。

「こいつ自分の筋肉見て笑ってるよ。あぶねぇ奴だ」

「何か言ったか？」

巫山戯た冗談の償いをさせるために黒間は斎田の頭を掴んだ。

ゆっくりと手のひらに力を込めていく。

「なぁ、俺はリンゴを握り潰せるって言ったら、信じてくれるか？」

「信じる！信じる！」

斎田は慌てて言った。頭蓋骨に加えられる圧力が危険な勢いで増していたからだ。

「ごめん、今のは嘘だった」

「吹いてんじゃねぇよ！！！」

解放された斎田が喚いたが、黒間の次の一言で沈黙した。

「握り潰したのはスイカだった」

ゆっくりと再び力が篭る黒間の手を避けて、斎田は喚いた。

「分かったよ。やればいいんだろ。やれば。歩兵じゃないんだから、別に足腰鍛えなくても平気だろ」

「下半身を鍛えるとGに強くなるんだよ」

黒間は以前にもしたことがある説明を繰り返した。

事実、日々の鍛錬をみっちりとこなしてきた黒間は、高Gをかけた空戦機動において、右に出るものはいなくなっていた。

Gスーツのような補助具のないこの時代において、空戦機動中のブラックアウトを防ぐにはウェイトトレーニングが一番だった。特に大腿の筋力が重要だった。大腿筋を緊張させることで血管を収縮させ、下半身から上半身、特に脳に血液を送りこむのだ。

ブラックアウトを防止する目的でウェイトトレーニングがパイロットに課せられるようになるのは、大推力エンジンを装備したF15やF16が実用化され、高G機動中にパイロットが意識を失って墜落事故が頻発するようになってからだ。

しかし、それ以前であっても、空戦機動にウェイトトレーニングが有用であることは明らかだった。それを部隊内の訓練で黒間はそれを証明し続けた。

特に太腿と首周りの筋力強化が効果的だった。九七式戦闘機は操舵が人力なので腕力も要る。

こうしたウェイトトレーニングは飛行学校では、日課として行われていた。しかし、卒業してしまうと後は殆ど自己管理だった。

熱心な者は課業の合間を見て鍛錬を続けるが、サボる者はどこまでも平気でサボる。実際、パイロットには肥満体形のものが少なくなかった。

前世では、黒間は後者に属していた。多少の筋力をつけるよりも、空戦技術を磨く方を優先した。それが平均的な戦闘機パイロットというものだった。

しかし、今は違った。違わざる得なかったというべきか。

なにしろ病院帰りのヒヨっ子が、飛行時間が1，000時間を超える先輩連中を訓練で次々と撃墜して回ったのだ。再び空を飛べたことで、少しはしゃぎ過ぎてしまった。

そんなことをすれば、大騒ぎになるに決まっていた。迂闊なことをしてしまったものだった。

成りこそ顔のニキビが目立つ若造だったけれど、その中身は太平洋戦争を生き抜いた古兵の中の最古参兵だ。本能のレベルで染み付いた空戦技術は、少しも衰えていなかった。１０００時間ぐらいの相手を捻るなど造作も無い。

ましてや、支那事変もなく実戦を経験してこなかった先輩連中など、話にならなかった。

しかし、そんなことを明らかにするわけにはいかなかった。精神を病んだと思われかねない。鉄格子付きのサナトリムに入院させられるのは嫌だった。

およそ説明のつかない連戦連勝に何か合理的な説明をつけようとするなら、ウェイトトレーニングのせいにするしかなかった。それで、一応騒ぎは収まった。

それからというもの、ウェイトトレーニングが若手のパイロットの間で流行りになった。

「ほんと、こんなことやってて強くなれるのねぇ？」

「なれるさ。信じろ」

黒間は心のなかで、何も知らない親友に詫びた。

やがて、決して短くない苦行の時間が終わり、解散となった。皆がそれぞれの持場へ散っていったが、斎田と黒間はそのまま残った。ここが二人の持ち場だったからだ。

弾薬と燃料を積み込んだ3機の九七式戦闘機が滑走路脇で待機していた。警戒待機中。何かあれば、すぐに迎撃に上がれるようになっていた。

そこへ、二人の上官がやってきた。

「クロ。筋肉体操はもう終わったか？ラジオをつけてくれ」

篠原弘道准尉は、サイダーの瓶を投げてよこした。
ノモンハンの日差しに焼けた面構えは端正だったが、瞳は猛禽類のように鋭かった。

「はい。准尉殿」

黒間は空中で器用に瓶を掴むと草原に置かれたラジオのスイッチを入れた。
支那語の歌謡曲がラジオのスピーカァーが震わせる。

「ありがたくあります」
「いや、いいんだ。水分はしっかりとっておけ。よくも毎日続くもんだ」

黒間は礼を言ってから、サイダーを口に含んだ。
爽やかな炭酸と甘味が火照った体に心地よかった。

「ま、ヘタクソなりに努力するのは大切なことだ」

嫌味とも取れる皮肉げな口調だったが、篠原がそれを口にすると少しも不愉快ではなかった。
何しろ、篠原は既に３０機以上の敵機を撃墜しているエースパイロットだった。しかも、その撃墜記録は、この１ヶ月あまりで稼いだものだ。
初陣では１日で５機の敵機を撃墜している。
こんなことは前代未聞だった。内地の新聞では「東洋のリヒトホーフェン」と題して、特集記事が組まれている。今や、篠原は国民的なヒーローだった。
現代ならば、アメリカの大リーグで活躍する日本人野球選手に近

い存在だ。
その彼が言えば、皮肉さえもどこか深淵な哲学を帯びた言葉に聞こえてくるので不思議だ。
それに、ヘタクソというのもあながち間違いではない。
黒間のスコアは0だった。斎田も同じく0だ。実戦にも既に3度以上参加している。
訓練の成績からすれば、物足りないスコアだった。早くも口が差ないものから、「机上の撃墜王」などというありがたくない称号をもらっていたが、黒間は撃墜数を競うつもりはなかった。
そんなことよりも、2ヶ月後に戦死するこの天才肌の撃墜王をどうやって生還させたらいいのかひたすら考えていた。

「ヘタクソは酷いでありますよぉ！」

斎田はおどけた調子で抗議した。
篠原もそれに応じて、ニヤリと笑った。

「ああ、そうだったな。お前はドヘタクソだったな。死なないように注意しろ」

二人は楽しそうに笑っていた。
笑えないのは黒間一人だけだった。黒間は二人がどうやって死んだか知っていた。
ラジオの歌謡曲が途切れ、支那語のニュース番組が始まった。もちろん内容は理解できない。
篠原が目配せして、黒間が変局を請け負った。周波数のチューニングは、簡単だった。真空管ラジオならともかく、このトランジスタ・ラジオは。
黒間は、ラジオの表面にプリントされた東亜重工の社章を見た。
2年前に人生をもう一度やり直すことになってから、チラチラと

目にしていたロゴマークだった。
東亜重工は、黒間の記憶が正しければ２０年後に実用化されるトランジスタ・ラジオを去年、全世界で１，０００万台売り抜けた超巨大企業連合だった。
トランジスタ・ラジオ以外にも、自動車や航空機、鉄道、工作機械など様々な工業製品やサービスを輸出している。特にバイクや自動車の製造と販売が有名だ。自転車にエンジンをつけたような簡易型バイクが人気商品だった。乗用車では、外資導入でトヨタや日産、三菱がシボレーやフォードをつくるようになってからは、唯一独力で国産車を製造しているメーカーだった。
グループ全体で１００社を超える子会社を抱えている、なんでもつくっている不思議な会社だった。
噂では、その資産は日本の国家予算の１０年分に相当するという噂だった。

「どうした、クロ。故障か？」
「いいえ、大丈夫です」

このロゴマークを見ると、決して自分が孤独ではないと思うことができる。
面識はないが、自分と同じような履歴をもつ人間がこの世には複数存在しているらしい。そうでなければ、こんなものがこの時代に存在するはずがない。
支那事変が起きていないのも、誰かが何か手を打ったのだろう。
ならば、ノモンハンも何とかならないかと思っていた。
なんともならなかったわけだが。

「・・・暇だな。こうも暇では、腕が鈍る」

新たにスピーカァーを震わすジャズ・ピアノを聞き流し、篠原は

言った。

「敵はこないのでしょうか？」

斎田は篠原に尋ねた。このところ、偵察機さえハイラルには飛んでこない。

撃墜王の3番機を任されたのに、撃墜が1機もないことを斎田は不満に思っているらしい。

「さぁな。あっちも戦力の集中に手こずっているのかもしれん」

「では、こっちから乗り込むのはどうでありますか？」

篠原は曖昧に笑って、何も答えなかった。

パイロットの間では、ソビエト空軍を一挙に覆滅するため近々、大規模な奇襲作戦が発動されるという噂が囁かれていた。

黒間はその噂が真実であることを知っていた。

何しろ前の人生で、それに参加したことがあるからだ。

１９３９年６月２７日、陸軍航空隊はソ連軍のタムスク基地を先制奇襲に成功し、大量の敵機を地上撃破する。そして、確保された制空権の元で、地上部隊が攻勢を開始するのだ。

その結果が、散々な失敗な終わったことを黒間は知っている。

１９３９年7月1日、戦力の終結を終えた日本軍は攻勢を開始した。

前月の２７日には、ソビエト軍の擁するこの方面最大の航空基地へ先制攻撃が行われ、大成功を収めて１００機以上の敵機を地上撃破していた。

安全になった空の下、航空偵察の結果をもとに砲兵と戦車と歩兵が連携して、ハルハ河を渡河した。

日本軍の作戦は南北でハルハ河を渡河し、それぞれ戦車1個連隊と歩兵2個連隊を主力とする2つの機械化部隊がハルハ河にそって展開するソビエト軍の背後に南北から回り込み、包囲殲滅することだった。

何の芸もない両翼包囲作戦だが、装甲化された機械化部隊という点が新しかった。

ナチス・ドイツがスペイン内戦で行った新兵器の実験を日本陸軍はノモンハンで行なっていた。

当然、攻撃の先鋒に立つのは戦車だった。

この時の日本軍戦車連隊の主力となったのは、九五式軽戦車だった。さらに、新鋭の九八式中戦車も二個中隊と数が少ないものの初めて実戦投入された。

日ソにとって初めての大規模な戦車戦が勃発し、多くの戦車がノモンハンの草原に鋼鉄の骸を晒した。

そうした中で、第3戦車連隊第4中隊の九八式中戦車が、同僚たちと同じ憂き目に遭っていないのは、中隊長の指揮が適切で慎重だったからだ。

今も、中隊長は稜線の際に、戦車を隠してソビエト軍を偵察している。

彼の手元には、4両の戦車があった。これが第2中隊の戦力の全てだった。

1個中隊の戦車の定数は12両だったが、ソビエト軍の対戦車砲で既に半数が失われていた。さらに、2両が故障して修理のために後方に送られている。

九八式中戦車は、それまで日本製戦車に比べて様々な意味で進歩していたが、ソビエト軍の対戦車砲に対しては、装甲が不足していた。

「先任、アレが見えるか」

中隊長は、先任の曹長にぞんざいな態度で言った。

「ロスケの対戦車砲ですな。１個中隊はいますな」

自分の観察とベテランの下士官の意見が一致したことで、中隊長は大きく頷いた。

中隊長は双眼鏡を構え直し、草原を広く見渡した。

平らな大地に申し訳程度の偽装を施した対戦車砲が見える。

起伏が乏しいノモンハンの平原では、対戦車砲は隠れる場所に苦労した。日ソの両軍の兵士達は対戦車砲は秘匿しなければ威力が半減することを急速に学んでいたが、学習が不十分な部隊も多かった。

「あの陣地を抜くぞ、歩兵を呼べ。戦車はここから砲撃して、隠れている砲をあぶりだす」

本来なら砲兵射撃を浴びせる方が確実なのだが、砲兵はまだハルハ河を渡っていない。

ソビエト軍は背後を取ろうとする日本軍を阻止するために次々と予備隊を投入し、進撃路にいくつも陣地を築いていた。陣地にぶつかるたびに、日本軍の進撃は止まった。

戦車とは敵の弱点をつく機動兵器であり、陣地攻撃には向いていなかった。

１週間あまりで中隊が小隊になるまで損害を受けたことで、日本軍は陣地攻撃で戦車を前面に立てることの愚を悟った。特に対戦車砲は危険で、歩兵か砲兵の支援がない限りは攻撃するべきではなかった。

高速の戦車連隊はともすれば歩兵を置き去りにして単独行動しがちだったが、高い代償を払って歩兵と連携することの大切さを学ん

だ。

結果として、戦車中隊にはトラックに分譲した機動歩兵（自動車化歩兵）中隊が付けられていたので、中隊長が呼んだ歩兵は直ぐにやってきた。

それから歩兵中隊との簡単な打ち合わせになった。

歩兵中隊の指揮官はかなりのベテランで、打ち合わせは直ぐに終わった。また、彼は打ち合わせの中で砲兵の代わりに航空支援を要請してはどうかと提案した。

彼は正直気が進まなかった。砲兵との連携もかなり大変なのだが、航空機との連携はそれよりもさらに難易度が高いからだ。よほど事前に厳密に調整がされない限り、上手くいかない。

しかし、使えそうなものはなんでも使ってみるべきだった。

一応、無線で問い合わせてみると支援要請は受理され、すぐに支援を送ると回答があったが、それがどの程度のものなのか具体的な話はなかった。

やはりあてに出来るものではない。

打ち合わせが終わり、各々がそれぞれの持場に散っていた。中隊長の場合は、戦車の司令塔だった。

中隊長は首を廻らしエンジングリルの上に広げられた日の丸を見た。爆撃機が飛来した時、誤爆されないように上空から識別できるようにするための工夫だった。

支援が来るかどうかも怪しかったが、念のための用心だ。

操縦手がエンジンをかけ、ダイナモから電力が供給されると中隊長は通信機のスイッチを入れた。

「戦車、前へ」

キュポーラから半身をつきだし、咽頭式マイクに片手を添える彼の姿を見た者は、中隊長の落ち着き払った態度に胸打たれた。

エリート意識が高いドイツ軍の戦車将校でも満点を出すに違いな

かった。

九八式中戦車は、マイバッハ水冷12気筒ガソリンエンジンを唸らせ、砲塔をゆっくりと旋回させる。

その姿は、ドイツの4号戦車そのものだった。

防共協定締結後、日本陸軍は大規模な調査団をドイツに派遣し、今後の軍備近代化に向けて様々な情報収集を行っていた。調査団は大量の報告書を書き上げ、その多くに予算が承認され、輸入、ライセンス生産、そして兵器の共同開発が行われることになった。

共同開発といっても、日本が提供する技術は殆どなく、資金提供がメインだった。ドイツはヒトラー政権後に急速に軍備の拡張を行なっており、新兵器の開発が目白押しだった。兵器開発に要する費用は莫大なものであり、ドイツは慢性的な資金不足だった。

独裁国家といえども、総統命令だけで金が湧水のごとく湧き出てくるわけではない。

九八式中戦車は、支援用戦車の4号戦車を国産化したものだった。同時に国産化する予定だった機動戦用の3号戦車は残念ながら未だに完成には程遠く、ドイツ本国でも増加試作型の域を出ていなかった。もちろん、国産化もされていない（最終的に第二次世界大戦勃発により国産化は断念された）。

それに対して支援用として開発された4号戦車は、サスペンション等に保守的な技術を採用していたので既に完成の域にあり、日本にも図面が提供され生産が進んでいた。

九八式中戦車は、4号戦車D型に相当するが、装備の幾つかは国産品が使用されていた。

最大の変更点は主砲で、本国の4号戦車が短砲身の75mm砲を装備していたのに対して、九八式中戦車は、長砲身（44口径）の75mm砲を装備していた。榴弾威力よりも貫通力を重視した高初速砲を装備しているのは、対戦車戦闘に従事する3号戦車が完成しないための苦肉の策だった。

この砲は、同時に採用された九八式八糎野戦高射砲（FLAK3

６）の輸入、ライセンス生産で余剰になった八八式七糎野戦高射砲を転用したもので、駐退機と砲尾を新造品に改めることで無理なく砲塔に収めることができていた。

高初速で高空に砲弾を撃ち上げる高射砲を転用した砲だけあって、５００ｍ以遠からソビエト軍のＢＴ－７や、Ｔ－２６を撃破できた。

廃品利用でこれほどまでに強力な火力を得られたことに驚いた日本陸軍は、短砲身７５ｍｍ砲のライセンス生産を中止し、手持ちの八八式七糎野戦高射砲の全量を戦車砲へ改造することを決定していた。

「第１目標、敵火点。第２目標、機関銃。連続、各個に撃て」

戦場のサビが効いた枯れた声で中隊長が言った。

同時に、砲手が引き金を引く。

中隊長車が撃ち始めると指揮下の各車が続いた。ソビエト軍も対戦車砲で反撃してきた。

しかし、当たらない。稜線から砲塔だけ突き出す九八式中戦車を狙い撃つのは極めて困難だった。しかも、撃つ度に後退して稜線の影に隠れてしまう。

逆に、反撃で位置を暴露した対戦戦車が撃破される始末だった。

そして、戦車が敵の注意を引き付けている間に、歩兵が匍匐で敵陣に接近し、手榴弾の有効射程距離に持ち込んだ。

中隊長はソビエト軍陣地に現れた変化を見逃さなかった。

戦車砲の榴弾の炸裂とは異なる種類の爆発がソビエト軍陣地に起きて、ソビエト軍の機関銃が狂ったように撃ち始めた。歩兵が陣地に取りついた証拠だ。

各車は阿吽の呼吸で、攻撃目標を機関銃に変更し、忽ちこれを沈黙させた。

友軍歩兵は匍匐から、突撃に移り陣地内に突入した。

このまま押しきれるかと思われたが、ソビエト軍の反撃はここか

らだった。

「戦車だ！」

誰かの叫びが、無線電波に乗って中隊長のもとに届いた。

日本軍からしてみるとあまりにも突然な敵戦車の出現だった。

中隊長は冷静に、攻撃目標を戦車に変更するように各車に通知した。

同時に、あの戦車がどこから湧いてでたのか少し考えた。

おそらく、戦車を土中に埋めていたに違いない。

ここ数日の戦闘から、ソビエト軍は隠れる場所のない平原の戦いにおいて、土中に戦車を埋めることで対応していることを中隊長は学んでいた。人力や重機で壕を掘り、砲塔だけで突き出して車体を隠すことで即席の火点としても使える。

対戦車砲の偽装はいい加減だったのは、偵察の目を対戦車砲に引きつけ、戦車から逸らすためだ。

日本軍はその罠に頭から飛び込んだ形だった。

唐突の戦車の出現により、友軍歩兵は明らかに動揺していた。敵戦車が２０台も突然現れたのだから、驚くなという方が無理だ。

攻撃が失敗したのは明らかで、それどころか逆襲で殲滅されかねない。

だが、中隊長はまだ冷静だった。

何故ならば、１台の九八式中戦車は５台のＢＴ戦車に勝るからだ。長砲身の７５ｍｍ砲を装備した九八式中戦車はいかなる距離からでも、ソビエト軍戦車を撃破できる。

事実、攻撃目標変更から数分でＢＴ－７が３台も血祭りに上げられた。砲弾は全て、戦車において最も強固な装甲を施されている前面装甲を抜いている。

だが、日本軍も無傷ではなかった。不運な１台がＢＴ－７の４５ｍｍ砲を受けて撃破される。九八式中戦車の前面装甲は３０ｍｍし

かなく、火力と防御の釣り合いがとれていない。
ソビエト軍はそれを知っているので、全速で距離を詰めてくる。
中隊長は後退したいと思ったが、ここで引いてしまうと敵中に歩兵中隊が取り残されてしまう。
既に歩兵は後退を開始していたが、徒歩の歩兵の後退速度と戦車の後退速度はまるで違う。歩兵の後退を援護するには、もう少し粘る必要があった。
歩兵の後退があとどのくらいで終わるのか、確かなことは分からなかった。
仕方なく、中隊長は司令塔のハッチを開けて上半身を乗り出した。とてつもなく危険な行為だったが、車内にいるよりは遥かに多くの情報が手に入る。
おかげで中隊長は上空に現れた友軍機の存在に気づくことができた。
中隊長は努めて冷静に友軍機が来たことを指揮下の各車に伝えた。しかし、内心では、よく来てくれたと喝采を叫びたい衝動に駆られていた。
中隊長はノモンハンの航空戦があまりうまくいっていないことを知っていた。
緒戦の奇襲で地上撃破されたソビエト空軍は増援と補充を繰り返し、戦力を回復して反撃に転じていると聞いていたのだ。
ソビエト空軍の主力はＩ－１５、１６戦闘機、高速のＳＢ爆撃機だった。
背の低い下草しかないノモンハンの平原では、空からの攻撃には為す術もなく、対戦車戦闘ではほぼ無敵の九八式中戦車も簡単に撃破されてしまう。
７月も半ば過ぎ、戦場が一進一退の膠着状態になってからは、ソビエト軍は大量の航空機を送り込み、航空攻撃による事態打開を図っているらしい。
中隊長が親しくしている陸軍航空隊の戦闘機パイロットは寝る暇

もなく出撃しているとのことだった。

その日も、忙しい一日だった。

前線からの支援要請を受けて、採塩所飛行場（前線飛行場の一つ）を飛び立った九七式戦闘機は、３機だった。

警戒待機中に突然、爆弾を搭載して爆撃を命じられた格好だった。

それぞれが翼下に２５ｋｇ爆弾を４つ吊るしていた。

鈍い反応しか示さなくなった機体を操り、黒間は低空を飛んでいた。

眼下は緑の海だ。

既にハルハ河は超えて、敵地に侵入していた。いつ敵機が来るか分かったものではなかった。

できるだけ早く、さっさと爆弾を投下して身軽になりたい。

戦闘機乗りの本能とも言うべきチリチリとした焦燥に黒間は身を焦がしていたが、手足は極めて冷静に機体を操り、爆弾で重くなった機体を１番機の後方にピタリとつけていた。

落ち着きがないのは３番機で、これを操る斎田の精神の在り処がどこにあるのか示している。

地上に降りた後で、親友が編隊長から浴びる怒声と雷を想像して、黒間は嘆息した。

その時、１番機がバンクして、さらに高度を下げた。油断なく周囲を警戒しつつ、１番機に続いて機体を降下コースに乗せる。

黒間は航空チャートを手元に手繰り寄せ、攻撃目標が近いことを確認する。

「アレか」

高度を落とすと、敵の動きがよく見えた。
編隊を組んだまま高度を１００ｍまで落とす。一番機に続いて、敵の上空をゆるく右旋回した。右側面下方、敵戦車が２０台以上いた。
離陸前に渡された識別表を見て、それがソ連軍のＢＴ戦車であることを確認する。
ソビエト軍の歩兵は頭上に現れた九七式戦に気がついて退避行動に移ったが、戦車は逃げる素振りも見せなかった。
密閉され、騒音に満たされた戦車に乗っている戦車兵は、特に頭上の脅威には鈍感だった。
どのみち逃げようとしたところで、戦車の足では飛行機から逃れられるはずもない。
１番機の篠原が、風防を開け放ちハンドサインで、攻撃法を指示した。
九七式戦にも無線機は搭載されていたが、性能が低く雑音ばかりで殆ど聞き取れなかった。エンジンが作る電磁パルスを拾ってしまって何も聞こえない。その癖、大きく重たいので、殆どの機から取り払われていた。
黒間は機をバンクさせ、了解の意を示し１番機から離れて高度を上げた。
最初に突入したのはもちろん１番機だった。一旦高度を上げたあと、緩い角度で降下しつつソビエト軍戦車の車列に爆弾を見舞った。
ソビエト軍戦車は政治的な、或いは技術的な限界から日本やドイツのような送受信可能な無線機を装備しておらず、戦車が散開して進撃することができなかった。キューポラやペリスコープもなかったり、不十分なので一度、戦闘状態になりハッチを閉じてしまうと周りを把握する術が殆どない。
その為、小隊長戦車の後をアヒルのようにぞろぞろと進むので的は大きかった。

爆弾は吸い込まれるように敵戦車の車列の中央で炸裂した。

４発の２５ｋｇ爆弾のもたらす破壊はさほどのものではなかったが、至近弾を受けた戦車がひっくり返し、爆圧と破片をまんべんなく浴びた前後の戦車が動かなくなった。

次は、自分の番だ。

上空に警戒のために斎田の3番機を残し、黒間は九七式戦を降下させた。

前世のニューギニア戦線で散々に繰り返した緩急降下爆撃の手順そのものだった。スロットルを引き、エンジンの出力を絞りつつ、降下で機速が上がり過ぎないようにする。

機速が高いと引き起こしが間に合わなくなったり、引き起こしの際に空中分解することになる。そのため、引き起こしも急角度ではしない。

地平線と機体主翼の前縁を見比べ、降下角度の当たりをつける。降下角度は３０度程度だ。急降下爆撃は６０度で行うので半分程度だった。

望遠鏡照準器の中央から、一つ下を狙って銃把を握った。

４つの２５ｋｇ爆弾が直線的な放物線を描いて、やがて地平線と交差した。

２５ｋｇ爆弾の炸薬量では派手な爆発は起きない。重爆の使う２５０ｋｇ爆弾とは違う。それでも爆撃を浴びた戦車は無事では済まなかった。

投弾後、黒間は操縦桿を引いて機首を引き起こす。対気速度は時速３００ｋｍ程度だ。浅く引き起こしつつ右旋回し、自分の戦果を確認する。

戦車が2台ほどひっくり返っていた。他に巻き添えを食らった戦車2、3台が動かなくなった。

黒間は愁眉を開く。思った通りに上手くやれたからだ。

降下で得た速度を高度に変換しつつ、１番機を探した。

その時、黒間は雲の多い空に九七式戦とは別種の機影を認めた。

3機だ。複葉機だった。Ｉ－１５だ。まだ遠いが、一直線にこちらに向かっている。

見つかった。そう思うと背筋に鳥肌がたった。

「マズイな」

3番機の斎田が降下していくところだった。敵機にはまだ気づいていない。このままでは低空で一方的な奇襲を食らう。

黒間はスロットルを押しこみ、エンジンの尻を叩いて速度と高度を稼ぎつつ、1番機を探した。

無線機がないことが歯がゆい。

1番機は見つからなかった。どこに行ったのか。仕方なく、敵機の前を横切る形で緩い大旋回した。爆撃中の斎田を援護しなければならない。

酷く目立つ黒間の機動に3機のＩ－１５は釣られた。

黒間は3機一纏めに追撃してくる敵機を確認して、機銃の有効射程距離まであと猶予があと何秒あるか図った。

そして、敵機の後方に1番機の姿を認めた。

意図したものではないが、黒間が敵を囮になり、1番機がその背後を襲った形だ。

黒間は意図的に操縦桿を中立に戻し、直線飛行をした。

この状況では自殺行為以外の単語が見つからない行為だったが、後方につけた敵機の機動を単純化するという効果があった。

そして、基本的に九七式戦は複葉機のＩ－１５よりも高速だった。エンジンのパワーで容易く引き離すことができる。直線飛行でも逃げられる。

機銃の有効射程距離に入るまで、まだ２０秒程度の猶予があった。

それだけの時間があれば、1番機には十分だった。

八九式固定機関銃が火を吹き、1機のＩ－１５が火を吹いて錐揉みして落ちていく。

やっと後方の1番機に気がついたＩ－１５は編隊を解いた。その時には、既に黒間は機体をインメルマンターンさせていた。

上下逆さになった世界の中で、1番機が敵機を追うのが見えた。もう1機はどうしたらいいのか分からないという調子だった。

「さっさと逃げればいいんだよ」

黒間は独り言ちて、未熟な敵機に狙いを定めて機体を降下させた。機速があっという間に時速４００ｋｍを超える。

望遠鏡照準器の中で、敵のパイロットの表情が見える程度まで近づき、撃った。

７．７ｍｍ弾の火線がＩ－１５に吸い込まれ、パイロットを直撃するのが見えた。

表現に困る手応えを感じて、黒間は眉を潜める。

パイロットを失った敵機は、横転しつつ弓なりに落ちていった。初撃墜だった。

しかし、前世の経験からすれば初体験というわけにはいかない。そう思うと興奮はあまり感じなかった。老人のような醒めた気持ちで、黒間は新たに刻んだスコアを受け入れた。

素早く意識を切り替えた黒間は、斎田の3番機を探した。

これは直ぐに見つかった。下後方から上昇してくるのが見えた。

黒間はバンクして、編隊を組みやすように機を横べりさせた。同時に新らたな敵機の出現を警戒して注意の網を張り巡らせる。その網にひっかかった機があった。

一瞬、緊張した。しかし直ぐに友軍機と知れた。1番機だ。

1番機と編隊を組み直すと篠原が風防を開き、拳を突き出して親指と人差し指を突き出した。2機撃墜だった。追いかけていたＩ－１５を撃墜したらしい。

返戻に似た仕草で、人差し指を突き出した。1機撃墜という意味だった。

篠原は軽い敬礼を送ってきた。祝福のつもりらしい。
黒間も似たような軽い敬礼を返し、ぎこちなくはにかんだ。

ノモンハンの風　中編

１９３９年８月１０日　ハルビン　陸軍飛行場

ハルビン郊外に作られた陸軍飛行場は、陸軍航空隊飛行第１１戦隊のホームベースだった。

ここを発ってから１ヶ月足らずであったが、それでも黒間以蔵は懐かしさが込み上がる気がした。

空気の匂いもどことなく、前線のハイラルと違う気がする。

匂いに関しては、飛行場を取り巻く大豆やコウリャン畑に使われている下肥や養豚所の臭気が大半だったが、それさえも今は懐かしい。

果てしなく続く草原というある種の異世界から、人間の世界に戻ってきたような気さえした。

「どうだ、篠原准尉殿は起きそうか？」

「いや、無理だな。起きやしない。抱えていくしかねぇよ」

斎田三矢は眠そうな目を擦って言った。

前線のハイラルから戻ってきた九七式輸送機の座席では、二人の上司である篠原弘道准尉が眠りこけていた。

落ち窪んだ眼窩は頬を抓っても、額を叩いても固く閉じられていて全く開かない。頬は痩せこけ、顎の骨が浮いているように見えた。顔色は青を通り越して、土気色に近い。

正しく、過労死寸前の顔をしていた。

連日の出撃で溜まった疲労が、前線から離れた途端、緊張の糸を切ったらしい。

黒間も疲労していないわけではなかったが、篠原よりはまだマシだった。毎日積み上げてきた鍛錬の賜物と言えた。

「悪いが、早く降りてくれないか。あんたらが最後だ」

輸送機の操縦手が迷惑そうな顔で振り返った。

「すいません。すぐに出ます」

「そうしてくれ、こっちはけが人を毎日何往復もして運んでるんだ」

ぶっきらぼうに言う操縦手の顔色も決して明るい色ではなかった。連日の戦闘で負傷する兵士を後送する仕事が楽なものでないことは容易に察することができる。

「なんだよ、あいつ」

「言うなって」

二人で篠原の脇を抱えて、機を降りると慌ただしく輸送機は離陸していった。

忙しいという言葉には嘘偽りはないようだった。

「これからどうする？」

斎田は途方に暮れたように言った。

広大な滑走路にポツンと残されると途方に暮れたような気分になる。

しかも、空は崩れかけていて雨が降りそうだ。ハルビンは乾燥した内陸の街だが、８月に纏まった雨が降る。そのおかげで街が砂漠になることはない。

「別にどうもしない。准尉を隊舎の医務室に寝かせて、俺達で新しい戦闘機を受領する。それだけだ」

前線から離れたのはその為だった。

そういう理由でもなければ篠原は決して前線から離れようとしない。或いは、そうした理由でもつけて過労の准尉を休ませようとする戦隊長の心遣いなのかもしれなかった。

ソビエト空軍は、日増しに数を増している。

戦闘は互角だったが、パイロットの数が足りない日本軍は連日の出撃で疲労が蓄積していた。疲労のせいでつまらないミスから歴戦のパイロットが散っていく。

そうして空いた穴を別のパイロットが肉体の限界まで働くことで埋めていた。

つまり、悪循環ということだった。

2度目の人生でも、帝国陸軍は同じ過ちを繰り返そうとしていた。

この先の展開を思うと黒間の気分は沈んだが、斎田はいつもの調子だった。

「それで、俺達の機はどこにあるんだよ?」

「・・・さぁ?」

黒間は肩竦めて答えた。

俺達の機は幸いにも直ぐに見つかった。

隊舎に篠原を運ぶ最中に、出会った飛行場大隊の一人が場所を指示してくれたのだ。

相原大尉に顔を通せばいいとのことだった。

その頃には、既に雨は本降りになっていて、二人は隊の番傘を差して滑走路脇の格納庫に向かった。

「失礼します。相原大尉殿はこちらですか？」

真新しい九七式戦に白いつなぎを着た整備兵が数名取り付いていた。

その中の一人が顔を上げて言った。

「お前は？」

「自分は、黒間以蔵伍長であります。戦闘機の受領に参りました」

黒間が敬礼すると相原もいい加減に答礼した。

筋骨たくましい体に禿げ上がった頭とチョビ髭の小さな顔が乗っていた。笑っているわけでもないのに、微笑でいるように見える。

整備兵というよりも、うどん屋の気のいい店主といった雰囲気だ。

「整備の相原だ。飛行機を取りに来るのは3人って聞いていたが？」

「一人は、急病にて隊舎で臥せております」

黒間は顔色一つ変えずに嘘をついた。

兵隊は要領が悪くてはつとまらない。

「悪いのか？明日、飛べるのか？」

「軍医殿の見立てでは、大丈夫だそうです」

そうか、それならいいんだがと、ニコリと笑った相原は言った。

行動の一つ一つが厳しいが、表情との落差が激しい男だった。

「これが受領機でありますか？」

「そうだ。九七式戦闘機改だ。エンジンと武装を換装して、防弾板を追加してある」

相原が機に寄って、エンジンカウリングに手を触れた。

「エンジンは、東亜重工のＨＦ－１１８に載せ替えてある」

「ＨＦ－１１８？」

「なんでそんな名前つけたのか知らん。あそこの製品は横文字が多くて困る。製品は滅多に故障しない、いいものをつくるんだがね」

相原は毛のない頭を掻いて言った。

その間に、黒間は機体に近寄って自分の新しい愛機を見上げた。

エンジンのカウリングが今までの機よりも一回りは太く、大きくなっていた。ただし、奥行きはそれほど変わっていない。

「単段１１気筒エンジン。１，０００馬力だ。ショート・ボア、ショート・ストローク。ＤＯＨＣバブルヘッド、フル・トランジスタ式ディストリビューター、低圧燃料噴射ポンプ。過給器は遠心式フルカン流体継手。世界一の速く回るエンジンだ。４，０００回転まできっちり回せ」

腰に手を当てて、どうだと相原は笑ったが黒間には何が凄いのかは分からなかった。

黒間は、機を一回りして、他に変化がないか確認した。

よく見ると機体側面から丸みが減って、いくらか直線的になっていた。機首方向に視線を移すとカウリングと機体の間にずらりとパイプが並んでいる。

「このカウリングの脇についているのは？」

「それは推力排気管だ。エンジンと機体の段差で生じる乱れた空気

を層を吹き飛ばす効果がある。それ以外にも、速度が少し向上する」

相原の解説にはよどみがなかった。

「どれくらいでますか？」

「高度５，０００ｍで２７０ｋｔは出る」

今までの九七式戦よりもかなり速力が上がっていた。前世で乗っていた初期型の隼並の速度が出るということだった。

黒間はやや興奮気味に尋ねた。

「武装は？」

「九八式固定機関銃が４丁。機首が２丁なのは今までどおりだが、ガンポッドで２丁追加してある。見てみたいか？」

黒間が頷くと相原は主翼下面の張り出しカバーを外して、機関銃を見せてくれた。

黒々としたガンオイルも真新しい鋼鉄を削りだしたような無骨な機関銃だった。銃身に、穴の空いた空冷ジャケットがかぶさっている。

全体的に、今まで使っていた機関銃よりも固く締まって見えた。

「ドイツのＭＧ１７をライセンス生産した奴だ。今まで使ってた８９式なんて目じゃない」

「なんだかわからないけど、すげぇ！」

斎田が口を挟んだ。

新しい玩具を与えたれた子供同然だった。

「空中線があるようですが、無線機も新型ですか？」

興奮していたのは、黒間も同じだった。しかし、もう少し黒間は冷静だった。

「ああ、積んでるよ。今までのガラクタとは違って、ちゃんと使える奴を。トランジスタ式だから、真空管式なんかよりも綺麗に聞こえる」

「そりゃ、いいですね」

黒間は会心の笑みを浮かべた。

空中電話機が使えないのが前々から不満だったからだ。

急場に味方同士で連絡が取り合えないのは非常に不便だった。敵機を見つけても、それを隣にいる味方に伝えられずに先手をとられることが多かった。ハンドサインでもある程度伝わるが、戦闘中にそれは不可能だった。以心伝心の連携も、よほど気の合う者同士でないと難しい。

武装や速力の向上より、そちらの改良の方が重要だと黒間は思った。

前世でも、本土防空戦で乗った疾風は空中電話機の性能がよく、編隊空戦が格段に楽だった。

「操縦席に乗ってみろ。他にもいろいろ新装備がある」

「俺が乗る！俺が乗る！」

斎田が操縦席に飛び乗った。

黒間も主翼に乗って真新しい操縦席を見回した。

計器盤の配置に若干変化があった。それ以外に目に付くのは、操縦席前の射撃照準器だった。望遠鏡照準器が撤去され、代わりに光像式照準器が装備されていた。

ドイツのレビ照準器だと相原が補足してくれた。前世の隼にも途

中から装備されていた奴だ。
望遠鏡式の照準器は視界が狭くなるので、光像式照準器の装備はありがたかった。

「座席の後ろにあるのが防弾板だ。５０口径でも、１００m以遠で耐えられる。ロスケの３０口径なら、１００m以内で直撃しても平気だ」

斎田がまじまじと防弾板を見て、厚さを確かめるように指でつまんでいた。
白いペンキが乱雑に塗られている。鋼板が人の上半身のように切り抜かれていたが、どうも処理が雑な感じだった。

「１糎はありそうだな」
「正確には、１．３糎だ。それから、防弾板が邪魔だからって、絶対に防弾板は外すなよ。エンジンが重くなってるから、マスバランスを取るためにわざわざクソ重い防弾板を追加してあるんだ。外すとバランスが崩れてひっくり返るぞ」

黒間は最近になってＩ－１６が防弾板を追加してなかなか落ちなくなっていたことを知っていた。
防弾板を追加したせいで、元から鈍いＩ－１６がさらに鈍くなっていたので格闘戦に持ち込めば簡単に後ろをとれたが、格闘戦に応じずに一撃離脱を徹底するので九七式戦は苦戦していた。
黒間は前世のニューギニア戦線の空戦を思い出した。
隼は格闘戦では無敵だったが、一撃離脱に徹するＰ－４０には苦戦した。Ｐ－４７やＰ－５１も基本は一撃離脱戦法を使った。もちろん、いつでも一撃離脱ができるわけではない。爆撃機の護衛に来るときは格闘戦になったが、不利になると急降下で振り切るか、高高度に逃げられた。そうなると隼では手も足もでない。

対抗するには、こちらも同じ戦法を採るしかないが、隼にはできない相談だった。速度と高高度性能が段違いだ。
それに近いこと事が、ノモンハンでも起きていた。
しかし、この九七式戦改があれば、Ｉ－１６相手に優位に戦えるだろう。

「気に入ったか？」

黒間は深い笑みを浮かべて頷いた。

「よし、じゃあ、こいつが取説だから、読んでおくように」
「これは？」

渡された冊子を黒間はまじまじと見た。
「萌え分かり九七式戦改」と題して、背中に羽が生えた瞳が異様に大きいミニスカート姿の童女が表紙の中で微笑んでいた。
ページをめくると機関砲を抱きしめた水着姿の少女が開脚して秘所を晒し、しどけない様子で、「兄君さまぁ・・・機関砲のメンテナンスの後はぁ、不凍オイルを塗ってくださいまし」と呟き、潤んだ瞳を黒間に向けている。
あまりにも衝撃的な内容に、黒間は絶句した。

「俺に聞くなよ。俺が書いたわけじゃない」

先手をとるように相原は言った。
格納庫の脇には、本棚がだった。似たような表紙の本がずらりと並んでいる。よく見ると格納庫の端で、円座を組んで整備士達が例の本を熱心な様子で鑑賞していた。

「俺、ちょっと便所に行ってくるわ」

「止めろ！」

黒間は斎田から「萌え分かり九七式戦改」をひったくり、叫んだ。

「普通の奴はありませんか？」

「あるにはあるんだが、読むか？」

相原はため息をついて、分厚い冊子を黒間に手渡した。

黒間は冊子を開いて、1分ほどで挫折を覚えた。ページの大部分が細かな文書と図解で埋まっており、難解な表現を多用しているので見ているだけで眠くなりそうだ。

「まぁ、発想は悪くないし、わかりやすくて便利なんだが。なにも、こんな艶本まがいな奴にしなくてもな」

前世にこんなものは存在しなかったはずだ。

黒間は例の本をひっくり返すと、裏に陸軍航空隊航空本部長承認と印字されていた。

「大丈夫か、帝国陸軍航空隊？」

黒間は頭痛がしてきた。

翌朝、起床ラッパの音で目を覚まし、黒間と斎田は隊舎の食堂で朝食を摂った。

食堂は戦隊の全員が一度に入れるほど広かったが、ほとんどが空席だった。戦隊のパイロットは皆、前線に移動している。

昨日、顔を合わせた相原大尉は、別のテーブルで整備士達と固まって食事をしていた。何となく声がかけづらく、二人でもそもそと朝食をとっていると篠原大尉が起きてきた。

「昨日はすまなかった。二人で大丈夫だったか？」

什器を置くなり篠原は詫びた。

表情は険しいが、顔色は血の気が戻ったように見えた。

「はい。大丈夫です。新型機の受領は済ませておきました。受領書も提出済みです。」

「そうか。ありがとう。よくやった」

麦飯をかきこみながら斎田は言った。

「いやぁ、それほどでもありませんよ」

「てめぇには言ってねぇよ」

篠原から肘鉄を喰らって、斎田はむせ返った。

しかし、どれほどむせてもご飯粒一つ落とさないのは、如何にもこの男らしかった。

「飯食ったら、すぐ飛ぶぞ。新しい機を3日でものにする」

「午前中はガソリンの手配が間に合わないため、飛べないとのことです」

篠原は怪訝な顔をした。

「こんな後方の大きな基地で、ガスが足りないってことはないだろう？」

「海軍さんが降りるそうです」
「ガスが足りなくなるくらいか？」

この時、３人は知るよしもなかったけれど、日ソ両軍は冬営前の攻勢準備に余年がなかった。

満州の冬は早く、厳しい。このため冬季戦は全くの問題にならなかった。

６、７月の戦闘で日ソ両軍は、この戦いの勝敗を決するのが作戦の巧緻ではなく、砲と戦車と航空機の数であることを見ぬいていた。

日本陸軍は７５ｍｍ以上の口径をもつ火砲２５０門をかき集め、砲火力の集中運用のために第１砲兵師団を編成し、前線への配置を終えていた。さらに戦車戦力も６個連隊、２５０両を揃えていた。大半は軽戦車だったが、新鋭の九八式中戦車が内地から緊急輸送され４０両も用意された。

これらの兵力が消費する莫大な燃料、砲弾を運ぶために必要な兵站組織が整備され、大量のトラックがピストン輸送で最寄りの鉄道駅から前線に軍需物資を運んだ。関東軍の弾薬庫はすっかり空になった。

砲と戦車はそろったが、航空戦力は搭乗員の確保が不可能だった。機材そのものは緊急生産で新型機が続々と前線に届いていたが、パイロットはそうもいかない。

その為、陸軍は海軍に航空部隊の応援を要請するに至っていた。陸軍に貸しを作り、納税者へ存在をアピールするため、内地から海軍航空隊が前線に向けて移動を開始していたが、３人はその渋滞に巻き込まれた形だった。

ノモンハンの投入された海軍航空隊の作戦機は、およそ６００機。帝国海軍保有する航空戦力のおよそ半数だった。これには空母用の艦上機も含まれている。

もちろん、黒間の記憶にはこうした海軍航空隊の参戦はない。

「海軍航空隊が来るってことは、陸戦隊も来たりするのかな」
「さぁな？来るんじゃないか？」

黒間の呟き、斎田がどうでもいい調子で答えた。
朝食の後、無聊を託つ3人は例の取説を手に、格納庫の日陰で時間を潰していた。
黒間は例の取説を読み飛ばし、このようなものが前世はなかったこと改めて思い返した。格納庫に鎮座する新型機も同じだ。あんな戦闘機は存在しなかった。しかも、装備の一部にはこの時代には絶対にありえないものを使っている。
やはり自分以外の何者かが、歴史の修正を試みているとしか思えなかった。それも、軍内部のかなり高位にある人物だ。
そうした人物の働きかけがなければ、巨大な組織である海軍が動くはずがなかった。
特に陸軍が海軍に応援を要請するなど、悪い冗談としか思えない。帝国陸海軍の相克は、前世においても同じ日本人としてどうかと思うほど酷いものだった。
黒間は不安なのは、もしも、そうした人物がいたとして、彼は自分と同じようにあの戦争を回避しようと努力してくれるのだろうか？という点だった。
もしもそうでなければ、とてつもなく彼は危険な人物と言えた。
あの戦争は無残な惨敗に終わった。それは悲しいことだが、前世の記憶を使って歴史を改ざんし、故意に戦争を起こして勝利しようと言うのはどう考えても本末転倒としか思えない。
旧軍の軍人に、そうした危険な物の考えた方をする人間が、一人もいないとはとても思えなかった。自分の手前勝手な都合で戦争を起こそうとする人間は必ずいるはずだ。
あの戦争の末期に軍部がしでかした馬鹿げた作戦、神風作戦などを思い返すと黒間は自国の高級将校のやることには、どうにも信用がおけなかった。

一億総玉砕と煽った挙句、その結末は原子の焼け野原だ。東条英機が戦後に、自殺に失敗して絞首刑に処されたときは、暗澹たる気分になったものだった。彼が起草した戦陣訓は何度も暗唱させられたが、そこには捕虜の辱めを受けずと書いてあった。米軍のＭＰに逮捕されるのは、敵の捕虜になることとどう違うのか全く分からなかった。

黒間は原爆を落とした米軍を心の底から憎悪していたが、同じくらい自国の指導者を嫌悪していた。

戦後に、日本軍が復活しなかったのはそれなりに理由があってのことなのだ。

「お、海軍さんがおいでなすったみたいだぜ」

斎田の明るい物言いに、黒間は暗い思索の淵から顔を上げた。

唸るようなプロペラ音が聞こえる。

「そのようだ。クロ、何機いるか数えてみろ。訓練だ」

目視で敵機の数を正確に測る能力は極めて重要だった。

特に戦場では敵の数は実際より多く見えるものだ。それで判断を誤り、悪手を打って自滅することがしばしばあった。

「中型の双発機が４機。戦闘機らしい小型機が４３、４機はいます」

「まぁ、そんなところだな。なるほど、ガスが足りなくなるはずだ」

中型の双発機はおそらく九六式陸上攻撃機だ。前世のマレー沖海戦でプリンス・オブ・ウェールズとレパルスを撃沈した奴だ。

前世では、南方作戦の最中に何度か実物を見たことがある。今世で見るのはこれが初めてだった。魚雷型の胴体で、如何にも快速という感じだった。

双発機は燃料に余裕があるのか、基地の上空で旋回を始めた。先に小型機が降りてくる。

するすると降りてきて3点着陸を決めたのは、解放風防の九七式戦闘機に似た固定脚機だ。

九六式艦上戦闘機に違いなかった。主翼が丸みを帯びた楕円翼で、直線的な九七式戦とはだいぶ印象が異なる。こちらも前世は何度かお目にかかったことがある。乗る機会はなかったが、支那事変や南方作戦で肩を並べて戦ったことがある。

どことなく、海辺の空を飛ぶカモメに似ている。黒間はそう思った。

綺麗な飛行機だった。しかし、綺麗すぎて戦闘機という感じには見えない。

「海軍さんは、アレでチチハルまでいくつもりかねぇ？」

篠原が呆れたように言った。

綺麗なのには理由があった。陸軍機では当たり前の迷彩塗装が一切なされていない。真っ白な機体に、紅や青をふんだんに配色していた。

あんなもので前線に出たら、集中攻撃を喰らいかねない。

実戦経験がない軍隊とはこんなものかと黒間は思った。前世では、海軍機はあんなド派手な塗装はしていなかったはずだ。

「おい、お前ら。見てないで手伝え。どうせ暇だろ」

相原大尉が呼んでいた。

降りてきた海軍機に、給油車やドラム缶を積んだトラックが群がり大わらわで給油が始まった。

動力ポンプ付きの給油車があれば簡単だったが、数が足りないので人力ポンプを使ってドラム缶から直接に燃料を補給しなければな

らなかった。
不調の機体は離陸までに可能な限りの修理が施される。
その間に、海軍のパイロット達は休憩をとっていた。
黒間達の仕事は彼らに握り飯と麦茶を配ることだった。

「お疲れさまです。昼食です。どうぞ」
「あぁ、すいませんね」

黒間が握り飯を差し出すととそのパイロットは軽く頭を下げて包みを受け取った。

「お、梅と昆布の握り飯か、いいですねぇ」

そして、顔をあげた時、黒間は息を呑んだ。

「どうかしたのかい？」
「い、いや、あ、貴方は」

不思議そうな顔をして見上げる年重の海軍のパイロットには見覚えがあった。
意志の強そうな太い眉を片方だけあげて黒間を見上げる彼は、間違いなく坂井三郎だった。伝説の零戦エースパイロットの坂井三郎の若き日の姿だった。

「お、大空のサムライ・・・」
「はいぃ？」

ガチガチに緊張した黒間は、慌てて頭を振った。
彼が世界で最も名の知られた零戦エースパイロットになるのは、戦後になってからだ。

「大空のサムライって、ひょっとして私が？」
「い、いやぁ、何となく風格があるなぁって」
黒間はなんとも間抜けた言い訳に絶望しかけたが、坂井は恥ずかしそうに笑うばかりだった。
「そんな、おだてても何もでませんよ？まぁ、ちょっと他よりも歳を食ってるから、そう見えるかもしれませんね」
「そ、そうですか」
未来のエースパイロットの思ったよりも腰の低い、剽軽な口ぶりに黒間は意外なものを感じた。もっと闘志あふれる荒武者ような姿を想像していたからだ。
黒間は前世で読んだ彼の著作を思い出した。
確か、幼き日に海軍の飛行艇にあこがれて海軍に入り、戦艦の砲手から年齢制限ギリギリで苦労して転科して海軍航空隊の戦闘機パイロットになったはずだ。
所属する組織は違えど、黒間は同じ戦闘機パイロットとして坂井を尊敬していた。
彼の著作に触れた時に感じたのは爽快なまでに明るさだった。戦いが過酷さを増していくなかでも、ハツラツとした雰囲気で戦場に赴く彼の勇姿を行間に思い浮かべた。硫黄島上空でＦ６Ｆの大軍に囲まれ、絶体絶命の窮地に陥っても少しも怯まないその精神力に感動した。
戦いが劣勢になるにつれて、気難しく厭世的になっていった自分とは大違いだった。
「ところで、あそこの格納庫にあるのは、陸さんの戦闘機じゃないですか？」

「えぇ、九七式戦の新型です」

へぇ、と坂井は呟き、興味深げに九七式戦改を見つめた。

そうなると、

「見せてもらってもいいですか？」

と尋ねられるのは、必然だった。

黒間は口を滑らせたことに気付いたが、隠すこともないかと思い直した。友軍のパイロットに見せたぐらいで懲罰にはなるまい。

何よりも、未来のエースパイロットに何か少しでも役に立てることがあれば、それは幸いなことだ。

黒間自身も、玩具を見せびらかす子供のような喜びがこみ上げてくることを禁じ得なかった。

「じゃあ、少しだけ」

「ありがたい。よし、みんな行こうぜ！」

坂井が声を張り上げると、他のパイロット達が一斉に腰を上げた。

どうやら、黒間と坂井の会話に耳を澄ませていたらしい。黒間は冷や汗を流して過ちに気付いたが、今更ダメとは言えなかった。

首筋に視線を感じると篠原准尉がすごい形相で睨んでいた。

篠原は無言のまま、親指で首を掻き切る仕草をすると顎を「行ってこい」と突き出した。見せてやってもいいが、お前は後で殺すと言っていた。

黒間は半笑いで敬礼した。

それから、黒間は海軍のパイロット達に新しい乗機の特徴を紹介した。相原大尉や、例の取説の受け売りだったが、新型機の紹介に一々大きな反響があった。

後のことを考えると憂鬱だったが、彼らの驚愕は単純に心地よい

ものだった。

「いいなぁ、陸さんは新しい飛行機に乗れて」

坂井がぼやいた。

黒間は曖昧に頷いた。彼らがもうすぐこの戦闘機を時代遅れにしてしまう零式艦上戦闘機を授かることを知っていたが、それを言うわけにもいかなかった。

まだこの時点では、それは存在しない。

「まぁ、飛んでみないことには何とも言えませんよ」

「飛ぶって、あんたパイロットなのか？」

黒間は首かしげた。

そして、自分の格好を見て納得した。整備士が着るツナギ服だったからだ。午前中に受領機を触っていたときに借りたものだった。

「ええ、まぁ、一応」

「じゃあ、戦場帰りだったりするのか？」

黒間は頷くと、海軍パイロット達の目つきが一斉に変わった。

「戦闘機乗りか？何機落とした？」

「確実なのは、４機かな。Ｉ－１５が２機。Ｉ－１６が１機。ＳＢ爆撃機の共同撃墜が１機」

撃破なら、５、６機があると答えると歓声があがった。

「どうして、それを先に言わないんだ！空戦の話を聞かせてくれ！」

「いや、別に大したことじゃない。４機ぐらいザラだよ。うちの編

隊長は５０機以上落としている」
「ほんとかよ！！！」
坂井が叫んだ。
「それって、東洋のリヒトホーフェンの篠原准尉じゃないか？」
「ああ、そうだっけ。あそこに立っているのが、本人だよ」
黒間が指し示すと、海軍のパイロット達が一斉に走り去っていた。
もみくちゃの質問攻めにされる篠原を見て、黒間はそそくさと逃げ出した。どうせ後で何か言われるに違いなかったが。
しかし、それは自分の責任ではないように思えた。

ノモンハンの風　後編

１９３９年８月２０日　ハルハ河

同年５月から３ヶ月に渡って小休止を挟みながら続くノモンハン事変は、この日に境に一気にクライマックスへと向かっていた。

先手をとったのは、ソビエト軍である。

ハルハ河の朝もやを切り裂いて、ソビエト軍の砲兵が攻勢に先立って猛烈な準備砲撃を開始した。

ソビエト軍総司令官ゲオルギー・ジューコフ大将が攻勢開始までに集めた兵力は、総兵力５５，０００人。機甲３個旅団（装甲車３８５両）、戦車２個旅団（戦車４９８両）、砲・迫撃砲５４２門だった。砲火力の集中は凄まじく、攻勢開始の初日だけで１５，０００発の砲弾を日本軍陣地に降らせた。

この攻勢に際してソビエト軍が用意した砲弾は１８，０００ｔに及ぶ。すなわち１８キロトンである。これは初期型原爆の破壊力とほぼ同等だった。

もちろん、これだけの砲弾が日本軍の頭上に一度に降り注いだわけではないが、鉄の暴風に晒された日本軍は心身ともに打ちのめされることになった。

ただし、日本側の兵力増強のチキンレースには負けておらず、総兵力は７０，０００人を数え、戦車２５０両、砲・迫撃砲３５３門を集めていた。

ソ連軍が仕掛けてくる物量作戦に、真っ向から対抗する構えだった。

歩兵の数では日本軍が勝り、砲と戦車ではソビエト軍に分がある。これはこれまでのノモンハンの戦いと同じだった。

日ソ双方がこれを支える兵站組織を有し、莫大な数のトラックと

タンクローリーを後方に走らせていた。ただし、ソビエト軍側は最寄りの鉄道駅から７５０ｋｍ以上も離れた場所を戦場にしていたのに対して、日本軍は最寄りの駅から２００ｋｍ程度しかないので、相対的に日本軍の方が補給の負担は軽いと言えた。

ソビエト軍の作戦は戦線正面に砲火力と歩兵戦力を集中し、日本軍の主力を拘束しつつ、南北から機械化部隊を渡河させ、日本軍を包囲殲滅することだった。

基本構想は７月に日本軍が実施した両翼包囲作戦と同じだった。包囲を担当する両翼が機械化部隊であることも同じだ。しかし、投入された兵力が段違いだった。

その為、ソビエト軍は作戦にかなり楽観的な見通しを抱いていたとされる。

それが大甘だったことをソビエト軍は攻勢開始すぐに思い知らされることになった。

「操縦手、停車しろ」

突撃の先頭を任されたソビエト軍戦車部隊の一つを預かったとある中隊長が叫んだ。

中隊長車が停まったので、部下の戦車も次々と停車した。中隊の隊列は各小隊ごとに数珠つなぎに伸びており、お世辞にも理想的な進撃隊形とは言えなかった。

何故こんなことになっているかと言えば、ソビエト軍戦車にはコマンダーキューポラがないからだ。一度、突撃が始まりハッチを閉じてしまうと周りで何が起きているかわからなくなる。外部を偵察する手段がないので、前の車両の後ろをついていくのが精一杯だった。例えるならば、板金鎧を着た重装騎兵に近い。真っ直ぐにしか勧めないし、急な方向転換ができない。できなくもないが、それをしてしまうと途端に戦力として無力化されてしまう。小回りとは騎兵に必要な突撃衝力とは相反するものだからだ。

この点が、コマンダーキューポラを装備する４号戦車Ｄ型を国産化した九八式中戦車の優位点であり、双方向通信可能な高性能な無線機と相まって、チームワークにより多数のソビエト軍戦車を討取る原動力になるのだが、今は視点をソビエト軍戦車部隊に戻そう。

中隊長の手元には１２両のＢＴ－７戦車があった。

ＢＴ－７は装甲や火力よりも速力を重視した快速戦車であり、スピードを要求される機動戦の先鋒に用いるには打って付けの戦車だった。

彼の中隊は砲兵の支援を受け、歩兵と共に渡河した直後には満州国軍の歩兵部隊を蹴散らし、戦線の突破に成功していた。部隊はそのまま南東に進出し、日本軍の後方を蹂躙することを求められていた。

グズグズしていると日本軍が緒戦の衝撃から立ち直ってしまうので、作戦成功の鍵はスピードだった。そのことは事前のブリーフィングでクドいほど念押しされている。

それにも係わらず中隊長が戦車を止めたのは、これみよがしに設置された針金製の障害物を見つけたからだ。

簡単に踏み潰してしまうことができるが、こうしたものが存在するということはその周辺に日本軍の歩兵が潜んでいることを示している。

戦車が止まった時点で、戦車に鈴なりになっていた歩兵が戦車が飛び降りて散開している。草むらに潜んでいる歩兵を始末するのは彼らの仕事だ。

しかし、潜んでいたのは歩兵だけではなかった。

音もなく唐突に、先頭にいたＢＴ－７の砲塔正面装甲に穴が空いた。

次いで車内に突入した砲弾が、コンマ数秒後に遅動信管を作動させて炸薬を車内で爆発させ、高速で飛散した破片が砲塔内部の即応砲弾の薬莢を貫いて内部の炸薬を誘爆させる。結果、密閉された空間である車内で爆圧が高まり、逃げ場を求めた末に砲塔が天高く舞

い上がった。衝撃波とスプリンターが放射状に広がり、戦車の周りにいた歩兵を一纏めになぎ倒す。

びっくり箱のように吹き飛ぶ戦車の砲塔を見て、中隊長は腰を抜かした。

その為、轟音に混ざって響く甲高い砲声を聞き逃してしまった。無理のない話だったかもしれない。高初速砲特有のその響きは、２ｋｍ先に音源があったのだから。

中隊長がそんな具合だったから、ソビエト軍戦車部隊は混乱し、士気が下がった。

逆に、先頭の戦車を初弾で仕留めたことで、日本軍対戦車砲部隊の士気を大いに上がった。

日本軍の対戦砲部隊とは、日本軍高射砲第１０連隊から抽出された高射砲中隊だった。九八式８糎野戦高射砲（ＦＬＡＫ１８のライセンス生産版）を４門持っていた。

この場に展開したのはその内の２門で、平原を見下ろす高地に急ごしらえの陣地を設けて戦線を突破したソビエト軍戦車部隊を待ち構えていたのだ。

日本がライセンス生産するＦＬＡＫ１８はスペイン内戦でも、ＢＴ－７を相手に対戦車戦闘で活躍していたので、今起きた一連の出来事はその焼き直しだった。

それ故に、ソビエト軍の対応もまた定まったパターンがある。

初弾で１台を撃破し、ソビエト軍が次の行動に移る前に３台のＢＴ戦車が血祭りにされたが、それ以降は命中がなかった。

高速のＢＴ－７が全速でジグザク走行していたからだ。高初速の８８ｍｍ高射砲は目標が静止していれば、２ｋｍ先からでも命中弾を出すが、動いている目標には当たらない。この時点で、ソビエト軍は自分たちが大口径のカノン砲に狙撃されていることに気付いていた。対処法は高速で肉薄して、ＢＴ－７の主砲である４５ｍｍ砲の有効射程距離に持ち込むことだった。

しかし、日本軍部隊は冷静だった。

まるで予期していたかのように一旦、砲撃を停止して、その時を待った。

やがて、高速で走行していたＢＴ－７が動きを止める。履帯に針金が絡まって、動けなくなったのだ。

こうした対戦者障害物は、７月の日本軍の攻勢でソビエト軍が使った手だった。日本軍戦車部隊は履帯に針金が絡まって動けなくなったところ、対戦車砲で次々に撃破された。日本軍はソビエト軍の８月攻勢に際して、それをそっくりそのままコピーしてお返ししたのだった。

そして、装甲貧弱な軽戦車が８８ｍｍ高射砲の前で静止するということは速やかな自殺に他ならない。

結局、ソビエト軍先鋒部隊は戦車を全てを失って後退を余儀なくされた。

彼らが後退して体制を整え、砲兵を支援を受けて再度進撃した時には、８８ｍｍ高射砲はとっくの昔に陣地転換し、影も形もなかった。

数門の８８ｍｍ高射砲が１０倍近い戦車を遠距離から一方的に撃破し、素早い陣地転換で敵の砲兵射撃から逃れるというのが、日本軍の常套手段だった。

歩兵部隊も、九四式３７ｍｍ速射砲と豊富に供給される対戦車地雷でソビエト軍の戦車を迎え撃った。

ソビエト軍は７月の日本軍歩兵との戦いで、ガソリンエンジン装備のＢＴ－７が歩兵の火炎瓶攻撃で容易に炎上することに気付いており、ディーゼルエンジンに載せ替えるという手間暇をかけていたが、８月の日本軍はそうした簡易な装備ではなく、本格的な対戦車地雷を多数投入し、歩兵の肉薄攻撃の攻撃力を強化していた。

そして、戦線北部で高射砲と歩兵が時間を稼いでいる間に、再配置を終えた戦車６個連隊による反転攻勢が戦線南部で始まった。

ソビエト軍の狙いが両翼包囲であることは既に明らかになっており、そうであるが故に片翼のどちらかを潰せば、攻勢は頓挫するは

ずだった。
反撃に向かう戦車部隊を支援するため砲兵が一斉に砲門を開き、チチハル飛行場から数百機の戦爆連合が飛び立った。

黒間以蔵は、緊密な編隊を組んで進撃する数百機の戦爆連合の編隊を見ていた。

「壮観だな」

思わず漏れたのは、感嘆の呟きだった。
これほどまでに大量の戦闘機と爆撃機が集まったのは、7月のタムスク空襲の時だけだ。その時も、これほどの数ではなかった。
黒間は編隊の中央に位置する九七式重爆撃機と肩を並べて飛ぶ九六式陸上攻撃機を見た。陸攻は魚雷型の胴体に吊るせるだけの爆弾を吊るしている。
そうした機体が２００機以上も集まり、編隊を組んで飛ぶ光景は見る者の目を奪うものがあった。
黒間は陸軍の重爆に目をやり、太ましい胴体とそこから突き出す対空機銃を前から順番に見ていった。
銃座のプレキシグラスが太陽を反射している。機銃手を手に緊張した顔で周囲を監視していた。少しでも不審な行動をしたら、即座に撃たれそうだ。爆撃機周辺の空気はとても熱い。

今から、そんなに緊張していたらもたないぜ?

そんな風に声をかけてやりたかったが、そういうわけにもいかない。

声をかけたところで、届くはずもなかった。風防は閉めていたが、エンジン音とペラの回る音が機内にも浸透していた。

数百機のレシプロ機が轟々と、青いばかりで何もない空間に単調な音の波を放っているのだ。

陸攻の周りには、雁行編隊の九六式艦上戦闘機が飛んでいた。こちらも数知れないほど飛んでいる。

真っ白な機体に乱雑な調子で塗料を吹きかけ、仮の迷彩塗装をしてあった。

しかし、あまり効果はなさそうだった。特に、今日のように真っ青な天気の日には。

雲量は0。快晴。目が痛くなるほど真っ青な青空だ。

夏のノモンハンの空だった。

外界は一面の緑だ。高度3，０００ｍで進撃する戦爆連合を隠すものなど何一つない。

海のようにも見える草原に、眩く陽光を反射するものがあった。ハルハ河だ。さざ波が光を反射して、輝いて見える。

その流れを辿って行くとボイル湖にたどり着く。そのほとりにタムスクの市街と飛行場群があった。

黒間はコクピットを見回して、異常がないことを確認した。Ｒｅｖｉ２ｂ光像式照準器のスイッチを入れ、作動を確認する。手袋を締め直し、操縦桿を握りなした。

前世の記憶が確かなら、そろそろ来る頃だった。

その時、１機の九六式艦上戦闘機が増速して編隊から飛び出した。機体をバンクさせ、風防の無いコクピットから手を伸ばして、何かを訴えている。

黒間にはそれが何だか直ぐに分かった。編隊長の篠原准尉もそれに気がついた。

「無線封鎖解除。２時方向に敵機だ」

抜けるような青空の中に、ゴマ粒をぶちまけたかのような黒い粒が見えた。
敵の戦闘機だ。もの凄い数だった。こちらも数百機単位だ。味方と同じぐらいいる。

「さぁ、おいでなすった」

斎田が弾むような声で言った。
黒間は一度だけ息を飲み、酸素マスクの冷たい酸素を吸った。

「黒間、斎田。一番槍をつける！ついて来い！」

編隊長の篠原が増速し、密集編隊を離れる。
それを合図に、一斉に敵味方の戦闘機が散開して空戦が始まった。
黒間は、篠原機の後方上空に機をつけて援護可能位置を保持した。
斎田が反対側にいる。生き残りたければ、とにかく篠原機から離れないことだった。
しかし、黒間は篠原機についていくことに多少の疑問を覚えないわけではなかった。
篠原は敵編隊のど真ん中を抜こうとしていた。
一見しただけで敵機は前後左右に散らばった１００機以上はいる。
前世のニューギニアや本土防空戦でも、こんな大編隊を相手に正面から突撃したりはしなかった。普通は編隊同士の連携で切り崩し、優位な位置を得るための機動をする。
黒間は一瞬だけで、直属の上司の顔を思い浮かべ、真性の天才の考えることは凡人には理解不能であることを確信した。
篠原機が発砲する。正面反航戦。４丁の９８式固定機関銃を火を吹いた。敵も撃ち返す。曳光弾が交錯し、機がすれ違う。
相対速度は時速１，０００ｋｍ近い。
それでも篠原機の銃撃でエンジンを撃ちぬかれたＩ－１６が凄ま

じい速度で墜落していくのが見えた。
敵の矢衾を掻い潜った3機は、インメルマン・ターンで敵機の後方上空につける。
敵編隊を一望にできる視点を手に入れて、黒間は笑みを強くした。

「選り取り見取り！」

篠原機は上昇で失った高度を降下で、速度に変換する。黒間と斎田がその後に続いた。
九七式戦改はスロットルを全開にして、４５度の角度で降下する。プロペラピッチのセレクターを切り替える。高ピッチから低ピッチへ。九七式戦改の可変ピッチ機構はスロットルを連動した自動式だが、急降下時の操作は手動で行う必要がある。
スロットル全開にするとプロペラピッチが自動的に高ピッチになってしまうからだ。高ピッチのプロペラはブレーキそのものだ。自動化が常に正解とは限らない。
九七式戦改は動力降下。
篠原機はＩ－１６の編隊に狙いをつけた。黒間は敵の二番機を狙った。
照準器のクロスヘアにＩ－１６に大写しになる。黒間は銃把を握り、弾丸を送り込んだ。九八式固定機関銃が作動する。シャワーのように弾丸が敵機を包むのが見える。
八九式固定機関銃とは段違いの射撃速度だった。火力が倍どころか、３倍にも増えたように思える。
全身を撃ちぬかれたＩ－１６がバランスを失って落ちていく。３機編隊はそのまま降下しつつ、増速して次の目標に向かう。
今度は、上昇攻撃だ。
戦闘機の死角は背後ではなく、下方にある。どんなに視界の優れたコクピットの戦闘機であろうと真下は見えない。
動力降下で得た速度を使って、３機は急上昇。

下から上の戦場を見た。そして無防備な敵を見つけ出し、そこに向かって下から忍び寄る。

再び照準器のクロスヘアに敵を捉えた。上昇しつつ銃撃する。弾丸が敵を捉えた。真下から撃たれた敵機は、右急旋回した。

それで敵機は速度を失った。機体を捻り、後方上空に付けて、もう一度狙って撃った。

Ｉ－１６のエンジンから煙が吹き出す。それで十分だった。

黒間は篠原機を探し、再び機を援護可能な位置に寄せた。しかし、斎田機が見つからない。

「斎田。どこだ。応答しろ！」

黒間は冷や汗が噴き出すのを覚えた。

「６時方向。援護してくれ！後ろにつかれた！」

「ドジめ！」

篠原が短く罵り、九七式戦改を右急旋回させた。黒間が後に続く。

Ｉ－１６の追尾を受ける斎田機が見えた。２機に追われている。だが、それ以外にもソ連軍機の追撃を受ける友軍機は山ほどいた。逆も同じぐらいいる。どちらが優勢なのか、まるで分からない。

斎田機は旋回を繰り返し、Ｉ－１６の追尾を振り切ろうとしている。あわよくば、そのまま敵の後方につけようという腹だ。

しかし、それは無理だ。敵機は２機だった。１機の後ろをとっても、そのまた後ろから撃たれる。

篠原機は敵機に向けて牽制の銃撃を送った。撃たれたＩ－１６は斎田機の追尾を断念し、上昇。篠原機はその追撃。敵の二番機がバレルロールして、篠原機の後方に占位しようとしている。

黒間の獲物はその二番機だ。

「斎田、ケツを守ってくれ！」
「分かった！」

本当に援護位置に斎田機が移動したのか一瞥して黒間は敵機を見た。

綺麗なバレルロールだった。飛行姿勢に乱れがない。腕の立つパイロットだと思った。滑らかな軌跡で速度を殺すことなく篠原機の後ろにつけようとしている。

黒間は敵の意図を妨害することから始めた。牽制の銃撃を送り、敵機を篠原機から引き剥がす。

弾丸は虚空に消えたが、敵機は篠原機の後方から離れた。そのまま、右急旋回してくる。

敵機が目と鼻の先を掠めた。撃てる間合いではない。

そのまま切り返してくる。旋回を繰り返すシザース戦だ。敵機の狙いは黒間に移っていた。黒間は殺気を感じ、そのままシザース戦に応じる。

基本的に、水平旋回を多用するシザース戦は旋回性能の勝る九七式戦改が優位だった。そういう意味では、敵のパイロットは腕がいいが、経験が足りてない。

数順のうちに敵機の後方につけた。タイミングを見て、機を捻りって敵機の上に被る。そのまま狙いをつける。

射撃前に、後方を確認して銃把を握った。

黒間は機首機関砲の発砲炎に目を細めた。細いが高速の火線が敵機に向かう。４丁の機関銃が敵機を穴だらけにした。それでも、火を噴かない。頑丈な飛行機だ。しかし、敵機はバランスを崩して落ちていった。パイロットが死んだらしい。

射撃速度が速く、一度に大量の弾丸を浴びせられる九八式固定機関銃の４丁装備は九七式戦改には理想的な武装だ。

装弾数が多く、弾切れの心配もない。２０秒以上連続で射撃が続けられるほどだった。ただし、主翼のガンポッドのせいか、若干旋

回性能が落ちた気がする。
黒間はスロットルを開き、緩降下しつつ失った機速を回復する。
シザース戦の間に、戦闘の形勢はさらに混沌としたものとなっていた。敵にも味方にも秩序や統制が見られない。闘志を剥き出しにして、目の前の敵を追いかけている。
そうした混乱の最中に、一番機の姿が消えていた。

「隊長はどこへ行った!?」
「分からない!」

黒間が怒鳴り、斎田が怒鳴り返す。
酷い乱戦だった。地上を見やると墜落した数十機の飛行機が炎上して、黒煙を上げている。
まるで八幡製鉄所のようだ。一体どれだけの機が落ちたのか検討もつかない。敵も味方もちりじりになってドッグファイトに興じている。
黒間は焼けるような焦燥を覚える。
はっきりした記憶ではないが、前世での篠原の命日がそろそろ近いはずだったからだ。

「隊長を探すぞ」
「後方に敵機!」

その時、右後方上空にＩ－１６が見えた。
高偏差にも係わらず、機銃弾をばらまきながら突進してくる。
危なかった。斎田の警告がなければ不意打ちを食らっていた。
黒間はフットバーを蹴り飛ばし、体当たりするかのように機首を敵機に向けて弾丸を回避。敵機は追撃してこなかった。そのまま下方に抜けていく。一撃離脱戦法だ。乱戦の最中にこれをやられるとよほど警戒していない限り、不意打ちを食らう。

内心の焦りが汗をなって滝のように頬を伝った。
黒間は意味もない旋回を繰り返し、目をむいて篠原機を探したがどこにもその姿は見当たらない。

「篠原准尉殿、応答してください。篠原准尉殿！」

空中電話機での呼びかけも虚しかった。
見れば、爆撃を終えた重爆と陸攻が大きく旋回し、帰投しようとしている。
これ以上の長居は無意味だった。
単座の九七式戦改では、深い追いすると機位を失って帰れなくなる恐れさえある。地上の飛行はランドマークがあるので洋上航法よりは遥かに容易だが、それは比較の話であって機位を失って未帰還になる事故は少なくない。
爆撃機の離脱が契機となり、戦闘は急速に収束に向かっていった。
だが、黒間の戦闘はまだ終わっていない。
必ず篠原を生きて連れて帰ると決めていたからだ。

「斎田。お前は編隊に合流して、隊長がいないか確認しろ。俺はもう少し残って探してみる」
「無理するなよ！」

黒間は、斎田機が帰投する編隊に合流したのを見届け、高度を落とした。
高空に篠原機は見当たらなかった。低空にいるか、不時着している可能性があった。最悪、撃墜されている可能性もあったが、その場合でも落下傘降下しているかもしれない。
高度を下げ、風防を開け放つと冷たい外気が吹き込んできた。
そこで黒間はやっとコクピットの中が、蒸し焼きに近い状態だったことに気がつく。

戦場になった空は草原の上にある。
低空に降りると緑の海に、点々と炎上する飛行機の残骸が見えた。飛行兵達の煙の墓標だ。
黒間は鎮痛な気分でそれを見回した。ソビエト軍機の残骸が多かったが、友軍機の残骸も同じぐらいあるように見えた。特に、重爆や陸攻の残骸は大きく目立った。
その一つ一つを観察し、落下傘の白布がないか血眼になって探したが、篠原准尉はどこにも見当たらなかった。
黒間は深い後悔に襲われた。シザース戦に巻き込まれ、篠原を見失ったことは致命的な失策だった。あの時必要だったのは、篠原の援護だけで敵機を撃墜する必要などなかったのだ。
あの無茶な飛び方を好む天才肌の撃墜王から、決して目を離してはいけないことを知っていたはずなのに、何故それが忘れてしまったのか。
迂闊だったとしか思えない。
だが、迂闊といえば単機で敵地上空を彷徨くほど迂闊なことはなかった。
気がついた時には、３０機以上のＩ－１６が上空から被さっていた。
前世でもこんな絶対絶命な状況に陥ったことはない。
風防を閉じて、エンジンを一杯に吹かしても、黒間は寒気しか感じなかった。死ぬのかと自問し、死ぬかもしれないと思った。
だが、考えるより先に体が動いた。
黒間は機を超低空まで降下させた。もともと高度はさほどない。降下での加速は期待できなかった。しかし、超低空に降りたことで攻撃の難易度が大きく上がる。
地面を這うように飛べば、上空からの一撃離脱は不可能になるからだ。
ソビエト空軍のパイロットは、平均的な練度を思えば、超低空を飛ぶ戦闘機に正確な射撃を浴びせるのはかなり困難なはずだった。

敵機は代わる代わる降下してきた。
黒間はタイミングを読んで、機を滑らせる。敵機は射撃を補正してくるが、射撃時間は短かった。あまり長く撃ち続けると引き起こしができず地面とキスをする羽目になる。
射撃に失敗して敵機が離脱する僅かな時間を使って、黒間は機を直線飛行に戻し、再加速させる。
じりじりと速度があがり、包囲網が円から楕円に変わって行く。九七式戦改をＩ－１６は追尾できなくなりつつあった。エンジンを換装した九七式戦は、水平飛行で２７０ｋｔは出せる。エンジンの加速だけで、Ｉ－１６を振り切ることが可能だった。
黒間は真っ暗闇に薄っすらとした希望を差し込むのを感じた。
同時に敵機はとてつもない焦りを覚えたらしい。１機ずつではなく、一度に６機も降下してきた。
今度は黒間がとてつもない焦りを覚える番だった。Ｉ－１６の機銃は４丁だ。６機同時に火を吹けば、２４丁で弾幕を張ることができる。
機を滑らせるだけではとても逃げ切れない。
やむなく黒間は機を左急旋回させた。折角貯めこんだ速度が急速に失われる。しかし、突然の急旋回にＩ－１６は追尾できなかった。弾幕の殆どが外れた。しかし、数百発の７．６２ｍｍ弾で作られたの矢衾だ。全て回避するのは不可能だった。操縦席裏の防弾板にも２、３発当たった。座席のシートを通して鈍い打撃が背筋を走った。
改良前の九七式戦なら、パイロットはこれで即死だった。しかし、１．３糎の防弾鋼板が弾丸を受け止め、弾き返した。
その身で防弾板の有効性を立証することになった黒間だが、危機はまだ去っていなかった。
再び、敵機が降下してくる。今度も６機だ。
しかもかなり編隊の間隔を開けている。どちらに黒間が旋回しても、確実に弾幕で絡め取ることができるようにする配置だ。

もう旋回しても逃げられない。

一か八か、上昇して敵編隊を突っ切るか・・・

黒間は自棄になりかけている自分を見つけた。

そんなことをしても上昇で速度を失ったところを、滅多打ちにされるだけだった。

打つ手がない。

絶体絶命の窮地だった。

前世では随分と長生きしたものだが、今世は何とも短くあっけない幕切れになりそうだった。

もしも、今ここで死んだらどうなるのだろうか？黒間は疑問に思った。

またあの広島の病院に逆戻りさせられると思えなかったし、そんなことは願い下げだった。死ぬのは、１回だけで十分だ。

だが、黒間の恐れた最後の瞬間は結局やってこなかった。

上空にかぶさっていた敵編隊が散る。上空から１機の味方機が機銃を連射しつつ急降下してきた。

降下で得た速度で、再び上昇し、優位から一撃離脱を繰り返す。

３０機はいる敵機の包囲網に対して、たった１機で突撃を繰り返す味方機には見覚えがあった。

「隊長！」

篠原准尉だった。見間違えるはずもない。

黒間は思い切って、機を上昇させた。後方から降下する６機は追尾するが、上昇力は軽量で発動機の出力が勝る九七式戦改に分がある。

追跡してくる敵機に目掛け、一番機が降下してくる。敵機は慌てて散開した。

その隙に、黒間は包囲網を突破する。
再び、敵機は追尾してきたが、上空から急降下する篠原機が追い払った。
完全に敵機を振り切ったことを確認し、黒間は編隊を組み直した。

「隊長、ありがとうございました！」

黒間は無線で呼びかけたが返事がない。
見ると風防を開け放った篠原が、右手で電話機の形を造り、それを小さく振っていた。
無線機の故障らしい。この時代には、しばしばあることだった。
篠原は不敵に笑って、右手を二回結んで開き、さらに指を二本立ててから親指を下に向けた。

「１２機も・・・」

笑うしかないスコアだった。姿が見ない間に、随分と派手に暴れていたらしい。
一度の空戦で１２機の敵機を撃墜したのは古今東西、例のないことだった。

東洋のリヒトホーフェンが新しい伝説を作り上げたこの日、地上でも新たな伝説が作られていた。
ノモンハン大戦車戦と呼ばれる一大会戦だった。
日ソの彼我合わせて５００両に及ぶ戦車が平原で激突した大規模戦車戦は、両軍の主力が軽戦車だったこともあり、後年の独ソ戦車戦のような派手さには欠けるもの第一次世界大戦以来初めての近代

的な戦車を使った大規模戦闘になった。
日本軍の主力は九五式軽戦車であり、ソビエト軍の主力はＢＴ－７だった。
お互いが自身の戦車砲に耐えることができない貧弱な装甲しかなく、被弾しても砲弾が貫通して爆発せず、そのまま戦闘を続ける珍事が頻発したが火力に決定的な差はなかった。
日本軍はこの戦いにおいて、７月攻勢で威力は発揮した九八式中戦車を４０両投入して、これを決戦兵器と位置づけて運用した。
九八式中戦車はその期待を違えず、戦勢を左右する決定的な役割を果たした。長砲身の７５ｍｍ砲は遠距離からソビエト軍戦車を大量に撃破し、全く寄せ付けない活躍を見せた。
最終的に、日本軍は３個戦車連隊が壊滅するという損害を被ったもののソビエト軍の撃退に成功した。
ソビエト軍の意図した両翼包囲作戦は南部で崩壊し、北部で突出した部隊が日本軍の逆包囲を受ける危険な状況に陥った。
そこから先の戦いはソビエト軍にとって過酷な撤退行であり、日本軍にとっては敵の背中を撃つ追撃戦になるはずだったが、日本軍は追撃をしなかった。
何故ならば、独ソ不可侵条約が締結され、日本はノモンハンで火遊びをしている場合ではなくなってしまったからだ。

ノモンハンの風　後編（後書き）

年末ですので、１ヶ月ほど更新が止まります。悪しからずご承知おきください。

航空軍

１９３９年１０月３日　ハルビン

ノモンハンの夏は終わり、冬がやってきた。
黒間は滑走路に積もった一面の雪を見てため息をした。
吐息が白く烟る。
黒間は格納庫の寒暖計を見て、諦めの苦笑いを浮かべた。零下１２度だった。
それでも、まだマシな方だ。
厳寒の満州は１２月には零下２０度まで気温が下がり、何もかもが凍結する。市内を流れるスンガリ川さえも例外ではなく、凍結した川でスケートに興じるのが地元の子供たちの遊びだった。
ちなみにスンガリ川は大型船舶も航行可能な国際河川で、アムール川の支流の一つだ。日本の河川とは桁違いの大陸河川だが、凍るときは凍る。
ハルビン郊外に位置する飛行第１１戦隊の格納庫からでも、雪景色になったハルビン市街は見えた。
空は鉛色だった。
ハルビンは清朝が対外貿易の拠点として定め、その後ロシア人が建設した石とレンガの街だった。日本のどの街とも似ていないヨーロッパ風の街だ。
それが雪化粧を纏うとちょっとした絵になる風景になる。
すっかり葉を落とし、裸になった木々の向うに見えるロシア正教の教会は、異国情緒に満ちていた。
前世でもハルビンには来たことはあったが、仕事が忙しく観光などしている暇はなかった。仕事がないときでも、興味よりも治安に

不安があったので市街に繰り出すことはあまりなかった。
損をしたな。黒間はそう思った。
国費で海外に来ているのだから、あまり遊び呆けるわけにはいかないが、もう少し多くのものを見聞きしてもよかったのではないかと思う。

「おい、クロ公。ぼーっとしてないで、手伝え」

整備兵の相原大尉が言った。
格納庫には飛行を終えたばかりの九七式戦改があり、着膨れした整備士達がオイルを抜く作業を行なっていた。
何故、オイルを抜くのかと言えば、エンジンが温かい内にオイルを抜かないとオイルパイプの中で凍結し、エンジンが破損する恐れがあるからだ。
オイルを入れるのは飛行前だけで、入れるオイルも十分に予熱したものを入れる。エンジンそのものもオイル缶を加工して作った七輪の様な小型ストーブをぶら下げておいて、事前に温めておかなければならない。
冬の飛行作業というのは、恐ろしく手間暇がかかるものなのだ。

「何か珍しいものでもあったのか?」

相原は片眉を上げて尋ねた。
この男は、左右非対称の顔をつくることが多い。

「冬の街が綺麗だなって、絵になると思いませんか?」
「お前は絵かきにでもなるつもりか?」

相原が呆れたように言うと整備士達から失笑がこぼれた。

「別にそんなんじゃ・・・外国に来たんだからもうちょっと異国の街を見ておけばよかったなと思って」
「そうか。なら、作業が終わったら外出許可でももらって、好きなだけ見てくればいいさ」

相原は空のオイル缶を差し出した。
それを受けとって、黒間は浅く頷いた。

「もうすぐ、目が回るほど忙しくなるからな」
「え・・？」

相原は聞いていないのか？という顔をして言った。

「近い内に補充のパイロットが来るそうだ。やっと、な。随分と減っちまったからな」
「そうですか」

黒間は格納庫を見回した。
真新しい九七式戦改が並んでいる。しかし、その殆どが飛行作業に使われていない。
乗るべきパイロットがいないからだ。
飛行第１１戦隊は、空中勤務者は５７名だったが、ノモンハンから生きて帰ったのはその半分だった。戦死しなくても、負傷して空中勤務から外されたパイロットも多い。
部隊としては壊滅状態だった。
飛行機だけは次から次へと送り込まれてきたが、パイロットの補充がなかった。
ひょっとしたら、部隊を解散してどこかに合流するのかもしれないという噂が流れたほどだった。

「クロ、クロはいないか？」

振り返ると同じ中隊の根津三雄伍長が手を振っていた。

三角巾で右手を吊っている。

７．９２ｍｍの一発が彼の右腕に風穴を空けたのだ。幸いにも、腕は切断せずに済んだし、骨折も治癒しつつあったが、一時は絶望的だった。

「どうしたんだ？」

「篠原准尉殿が呼んでる。何かしたのか？」

黒間は首を傾げた。これといって思い当たる節はない。

「黒間伍長、出頭しました」

「入れ」

ドアを軽くノックすると中から応答があった。声の調子で、譴責のために呼ばれたわけではないことを即座に確認すると黒間は、思い切ってドアを開ける。

中隊事務室では書類の山の中で、篠原准尉が青い顔をしていた。

ノモンハンで戦闘疲労したときも、こんな深刻な顔はしていなかったと思う。

准士官室には斎田三矢もいた。いつもの小隊の面々が揃っている。

「お呼びとのことですが」

「ああ、別に固くならなくてもいいぞ。楽にしろ。譴責とか、そん

なんじゃない」

では、何か？

疑問に思っていると篠原が拳を突き出した。

「手を出せ」

黒間がおずおずと手を差し出すと、手のひらに固い小さな感触があった。

曹長の階級章だった。

「今日からそいつをつけて勤務しろ。昔、俺が使ってた奴をやるよ。撃墜王の階級章だ。貴重品だぜ？」

「いいんですか、自分はまだ」

「いいんだ。お前には、それだけの実力がある。中隊長も、戦隊長も了解済だ。」

黒間は暫しして、斎田と顔を見合わせた。

自然と笑みが溢れる。

「ついでに、斎田。お前も今日から軍曹だ。階級章は自分で何とかするか、誰からからもらえ」

「えぇッ！、自分だけ扱いが悪くありませんか！」

「冗談だ。お前の分もちゃんとある」

机の引き出しから、少し古ぼけた軍曹の階級章が出てきた。

「やりぃ！」

「調子に乗るな！」

口調は厳しかったが、顔は屈託なく笑っていた。
東洋のリヒトホーフェンも、黒間と斎田にとっては、気のいい兄貴分だった。

「ま、他の連中も、生き残った奴は全員特進だ。一応、勝ったことになってるからな。あの大戦は」

大戦とは、ノモンハンの戦争のことだ。
停戦条約が結ばれたから、既に1ヶ月が経っている。第二次世界大戦が始まってからも、およそ1ヶ月だった。
1ヶ月と言えば、気の長い人間であっても、話に一区切りがつく時間だ。
ノモンハンの祝勝パーティーもあったし、部隊での合同葬もとっくの昔に終わっている。
第二次世界大戦は、黒間の記憶どおりに始まり、ポーランドは3週間あまりであっけなく降伏した。
この頃の日本の世論といえば、ドイツの裏切りと東欧の大国だったポーランドがドイツとソ連に分割され、地図上から消されたことに恐怖していた。
ソビエトを西から牽制していたドイツが当のソビエトと手を組んだのだから、ソビエトは今や全軍で満州に侵攻することができるのだ。
日本政府は動員令を発し、内地で編成された新設の師団が続々と満州防衛のために配置されていた。ハルビンにも、軍用列車がひっきりなしに訪れ、多くの部隊が満ソ国境へ向かって行った。
新聞紙上には、ポーランドの次はバルト三国やフィンランド、満州にソ連が攻めこむのではないかという予測が並べられていた。
黒間が覚えているかぎり、ソ連が攻めて来るのは第二次世界大戦も終わりに差し掛かったころだった。
しかし、現実に満州に駐屯している黒間にとって、ソ連の圧力と

いうのは決して無視できないリアルな現実だった。
仮に今ソビエト軍が攻めてきたら、かなり酷いことになると思う。
それが一兵卒としてノモンハンを戦った黒間の正直な本音だ。
しかし、世間はもっぱらソ連が攻めて来ても無敵の国軍に撃退されるであろうと楽観しているので恐ろしかった。ノモンハンで勝った無敵国軍に任せておけば大丈夫ということだった。
新聞では、ノモンハンの戦争は日本が勝ったと報道している。これは前世でも同じだった。違うのは、実際の戦闘が最後まで五分五分で終わったことだ。前世のような酷い負け戦にはならなかった。
負けてはないが、勝ててもいない。それが黒間なりの分析だった。
それでも、前世に比べれば幾らかマシだ。
途中から海軍航空隊が参戦したおかげで、空中戦において敵に数で圧倒されるようなことはなかった。補給も潤沢にあって、飛行機の数が足りなくなるということはなかった。
先に足りなくなったのは、パイロットの数だ。
生き残ったパイロットは貴重品で、新しい階級章をばら撒くことぐらい大したことではないという判断なのだろう。
そこまで考えて、黒間は准尉の襟から階級章が消えていることに気付いた。

「あのー、ひょっとして准尉殿は・・・」
「こいつが目に入らぬか！」

電撃の速さで篠原がかざしたものは、中尉の階級章だった。
どうやら、黒間が気づくまで待っていたらしい。

「ご昇進おめでとうございます」
「まぁな。当然だな、当然の結果だ」

腕を組み、ほくそ笑む篠原は満更でもない調子だった。

しかし、笑みは長くは続かなかった。
笑みを引っ込めて真面目な顔をつくる。それもかなり深刻な面持ちで。

「今度、中隊長を拝命することになった」
「おめでとうございます」
「ありがとよ。でも、正直なところ気が重い」

篠原は机の上の書類の山に視線を落とした。
確かに、気が重い数だった。
准尉というのは帝国陸軍では最下級の将校だった。実際の階級は下士官に属するが、軍袴は尉官のものを使う。多くの場合は、古参の下士官がなるものだが、航空隊の場合はデスクワークとはあまり縁のない階級だった。
しかし、中隊長となれば話は変わる。

「そうすると、中隊長はどうなるんですか？ひょっとして、戦隊長ってことに？」
「いや、中隊長は転出だ。内地に戻る。他の中隊長やら、尉官、准尉は内地に戻って、新設の教育隊に配置換えになるそうだ」
「教育隊？」
「そうだ。戦隊の生き残りのうち、半分は内地に戻る。補充は、内地の教育隊から、繰り上げ卒業でトウシロがやってくるそうだ。そいつらの飛行時間を平均したら、３０時間しかねぇ」

意味分かるな？と篠原は黒間の瞳を覗きこむ。
分かってしまったので、黒間は恐怖におののいた。
ノモンハンでパイロットの半分を失った１１戦隊のさらに半分を引き抜いて、その補充に新米未満を充てようというのだ。

「無茶苦茶なことしますね。上も」

もしも、今、もう一度ソ連が攻めてきたら、戦隊はちょっと小当りしたぐらいで壊滅するだろう。

いや、そもそも戦う前から壊滅するのではないかとさえ思った。

まともに離着陸ができるかどうかさえ怪しい。

「そうだな。どうして、そんなことをすると思う?」

篠原は謎掛けするように問うた。

黒間は自分の持てる知識を動員して考えた。ノモンハンの戦いは、陸軍航空隊にとって大きなターニングポイントになった戦いだったはずだ。

この戦いから多くの戦訓を掴んだ陸軍航空隊は、海軍航空隊に先駆けて重戦闘機の開発を行い、様々な組織改革に取り込んだ。

「うーん、平均年齢を下げるためッスか?」

「てめぇには聞いてねぇよ!」

篠原は斎田を蹴っ飛ばした。

自分も迂闊なことを言えば、そうなりそうだった。

「パイロット養成の裾野を広げるためでしょうか。ノモンハンでは、飛行機よりも先にパイロットが足りなくなりました。一時的に、前線部隊の練度が低下することになっても、今から教育隊を増設すれば、2年後には纏まった数の新人が卒業してきます」

篠原は黒間の目を見据えて鼻を鳴らした。

「兵隊の割には、よく頭が回るじゃないか?将校になったらどうだ

？」

「自分がですか？」

「そうだ。お前なら、あと2年もすれば少尉候補生になれるかもしれんぞ？俺みたいな特進じゃないから、上手くやればベタ金だって夢じゃないぜ？」

ベタ金というのは、少将以上の階級を意味する。

「冗談キツイですよ」

「真面目な話だ。ノモンハンを思い出せ。ソビエト軍の数を暴力を思いだせ。連中が、本気で満州に攻めてきたらあんなもんじゃすまないぞ。対抗するには、こっちも数を揃えなきゃならん。つまり、人手はいくらあっても足りないし、腕の立つパイロットはどんどん出世するチャンスがあるってことだ」

戦隊長の受け売りだけどな、と篠原は付け加えた。

「黒間、今日から小隊長だ。斎田は分隊長だ。しっかりやれ」

「あの、分隊長って？」

斎田が首を捻った。

陸軍航空隊では、3機で1個小隊であり、小隊が戦力の最小単位だった。分隊は存在しない。

「制度改正だ。これからは4機で1個小隊になる。つまり2機で1個分隊だ」

黒間は前世の大戦半ばから導入された組み戦法を思い出した。

2機一組でロッテ、4機一組でシュヴァルムと言い、ドイツ空軍が考案した4機編隊空戦術だった。日本ではこれを組み戦法、ロッ

テ戦法と呼んでいた。

支那事変、太平洋戦争初期には3機編隊（ケッテ）で戦っていた陸軍航空隊も、途中からドイツ空軍の真似をして4機編隊が基本になった。

4機編隊、2機一組の特性は、連携が容易なことだ。3機編隊のケッテは、3番機に技量未熟なものが配置されることが多く、乱戦になると3番機が孤立して撃墜されることが多かった。

もちろん、3機が確実に連携することができれば2機編隊よりも効果的なのは言うまでもないが、空中戦という瞬間的な判断の連続する場合はこれがかなり難しい。

これから未熟なパイロットが大量に入ってくるならば、3機編隊よりもマンツーマンの対応ができる2機編隊の方が有利だった。僚機に何かあっても、直ぐに援護できるし、僚機が2機よりも1機である方が指揮官機も注意がしやすい。

しかし、こうした戦法が導入されたのは、昭和18年ごろの話だった。今は昭和14年だ。4年以上も、早く新戦術が導入されることになる。

やはり、黒間の知らないところで歴史改変は着々と進んでいるらしかった。

そこまで考えを巡らしたあたりで、黒間はあることに気付いた。

「中隊長。疑問があります」

「なんだ、言ってみろ」

「4機編隊が3つで1個中隊としても、幹部の数がどう考えても足りません」

今までは、3機編隊が4つで1個中隊だった。これからは、4機編隊で3つで1個中隊になる。

少尉か、曹長が3人いれば、最低限の指揮官が揃うが、今の飛行戦隊には全員を2階級特進させても、指揮官クラスの絶対数が足りない。

戦隊全体で、3個中隊があるから最低でも、少尉か曹長が9人は必要だった。

「補充はあるそうだ」

眉間を揉みながら篠原は言った。

「どこから?」

そんなものがないから、教育隊から訓練未了の新米を繰り上げ卒業させたり、生き残ったパイロットを特進させるのではないのか?

「海軍からだ」

黒間は絶句した。そんなことがあるわけない。

「陸軍航空隊は、海軍航空隊と合併することになるらしい」

それは、つまり・・・

「日本空軍が近日中に、発足する」

申請した外出許可はあっさりと降りた。

黒間は拍子抜けする思いで隊門をくぐったが、後から思えばド素人の新米がやってくる前に最後の休暇を楽しんでこいという篠原の気遣いであることが分かった。

彼らがやってきたら、それこそ昼も夜もなく戦隊は猛訓練に突入する。
いつソ連と再戦することになるかもしれない状況では、一日も早く彼らを使える一人前のパイロットになってもらわなくてはならない。
その為に必要な訓練のメニューを斎田と相談しながら練る毎日だったが、息抜きの必要性を思い出すにはあまり時間はかからなかった。

「おい、ボッサとすんなよ。行こうぜ」
「ああ、そうだな」

斎田も黒間も陸軍お仕着せの防寒衣だった。
飛行場大隊から借りた軽トラック（東亜重工製）のエンジンは一発でかかった。クラッチの操作もスムーズで、アクセルを踏むと軽快に走りだした。しかも、エアコン（暖房のみ）までついている。
どうして戦前の日本にこんな軽トラックが存在するのだろうか。
まぁ、飛行機の牽引や弾薬の運搬には重宝しているので、文句はないのだが。
４ＷＤなので冬の雪道でも安心である。

「お前、車の運転なんかできたのか？」

そう言われると、免許など持っていないことに気付いた。
免許はあるにはあるが、それは前世の話だ。とったのは戦後になってからで、最初は業務用のトラックを運転するために会社の金でとらせてもらった。
最近（前世）は会社の金ではなく自費でとるのが当たり前らしいが。

「まぁ、一応な。飛行場大隊の奴から教えてもらった」
「免許は？」
「その内取るつもりだ」

戦前にも運転免許はあったはずだが、なければ即座に道路交通法違反で逮捕されるのだろうか。

そもそも、前線の道路交通法はどんなものだったのかも知らない。ただひとつ確かなことは、バレなければどうということではないということだった。

ハルビンの市街地は、基地から３０分ほどだった。

何食わぬ顔で日本人の交通巡査に駐車場を尋ね、ハルビン駅前の公営パーキングに軽トラックを停めるとそこから歩きだった。

黒間としては、戦前のハルビンに公営駐車場があることが意外だったが、市街の中心部はそれなりに交通量があり、車が走っていた。車と同じぐらい馬車も多いが、荷車を引くのは馬車よりもトラクターの方が多かった。

目立つのはフォードソンのトラクターで、空からでも大量のトラクターが満州の広大な農地を耕しているのを何度か見ていた。

黒間が知る限り、トラクターやらコンバインが活躍するようになるのは戦後も随分経ってからで、この頃の農業の主力は馬や牛だったはずだ。

自分が知っていると戦前の世界とは少しずつことなる部分を見つけては、この世が一体どこに向かっているのか首を傾げる。

少なくとも、悪い方向ではないと信じたいのだが。

伊藤博文が暗殺されたことで日本史の名を残した駅から、キタイスカヤ中央大街は直ぐだった。

今でこそ満州国の一都市だが、ハルビンは元々ロシア人が築いた街だった。満州国建国まではソビエトが運行していた東清鉄道の交差点として発展した歴史がある。

駅前のロータリーは全て石畳で敷き詰められていた。今は、その

上に雪が積もっている。気温は相変わらず零下１５度を下回っていたが、駅前の賑わいは失われていない。
すれ違う人々は多国籍で、多くは満人だったがロシア人も同じぐらい多かった。
上背のあるロシア人が赤ら顔で大声で話しながら歩いてきた時は、黒間も斎田も黙って道を開けた。

「今のロシア人だよな」

しばらくしてから斎田はぼそぼそと言った。

「日本人には見えんだろ」
「ああ、もちろんだ。不思議な気分だよ。俺達、先月までロシア人と戦争していたんだよな？」

斎田が何を言いたいのかは分かったが、黒間はなんて答えたいいのか分からなかった。

「良いロシア人もいれば、悪いロシア人もいるってことじゃないか？」
「じゃあ、俺達はきっと悪い日本人だな」

そうかもしれないと黒間は思った。
爆弾や機関銃で大量のロシア人を殺害しているからだ。もちろん、相手も殺す気でかかってくるので、お互い様ではあるのだが。
その時、一人のロシア人とすれ違った。女性だった。年齢は分からない。しかし、黒間は自分と同じぐらいではないかと検討つけた。
毛皮のウシャーンカから覗くは横顔はびっくりするほど整っていて、青い目と併せて西洋人形のように見えた。真っ赤な口紅がとてもよく似合っていて、凍えるほど寒い日によく映えていた。

「おい、今の女。どう思う?悪いロシア人か?」
立ち止まって、二人して振り返ってから黒間は言った。
「バカ言うな」
斎田がぼそっと答えた。
女の後ろ姿はすぐに雑踏に紛れて見えなくなった。
「おい、アレを見てみろよ」
斎田はもう興味がなくなったのか、駅前広場の人集りに足を向けていた。
落ち着きのない奴だった。
「なんだよ?」
「戦車だぜ」
黒間はウンザリしてため息をついた。
そんなもの仕事でもないのに見たいとは思わなかった。
しかし、平和なハルビン市民達は赤く染まったロシア人の作った軍隊の仕事道具にいたく興味関心があるらしい。
駅前の広場で見世物にされているソビエト製戦車を見ようと、人集りができていた。
「そんなの見て楽しいか?」
「別に楽しかねぇが、人が集まってのを見るのは結構楽しいぜ」
そんなもんかねと黒間は呟く。

ハルビン駅前の広場に陳列された兵器は何れもノモンハンでの戦闘でソビエト軍が撤退する際に、遺棄されたものばかりだった。

こうした戦利品をひと目がつくところで開陳するのは、昔からどの国でもやっていることだ。

展示品の側には、小銃を抱いた日本人の兵士が立っている。戦車や大砲は見るだけで触ることができず、ロープで仕切りが作られていた。

こういうものに興味引かれるのは、どの国でも子供と相場が決まっているらしく見物人の大半が子供連れだった。それも満人や日本人ばかりで、ロシア人は殆ど無視して通りすぎていく。

確かに、彼らにとっては微妙な感情の襞がある代物だ。

できれば黒間もロシア人を見習ってさっさと通りすぎてしまいたかったが、斎田は楽しそうに見物しているので止めるのも野暮な感じだった。

「寒いですね」

その内、展示品の警備をしている兵士が黒間に気付いて声をかけてきた。

私服ならともかく、今来ているのは陸軍のお仕着せだった。町中ではとてもよく目立つ。

こんな氷点下の寒空の下で立ち話など、ゴメンだったが逃げることもできない。

「ご苦労様です」

と当り障りのない返事をして、黒間は敬礼した。

「交代だったりしませんか？」

「残念だが、交代はまだ先らしいな」

警備兵は残念そうに肩を竦めて笑った。

「こいつらはノモンハンの戦利品か？」

「らしいですよ。ほんとかどうかは知りませんがね」

黒間は巨大なソビエト製の装甲戦闘車両を見上げた。

大砲が５つもついている。中央の砲塔がもっとも巨大で、砲塔の周囲に鉢巻きのようなアンテナがついていた。車高があり、高さは黒間の２倍以上あった。全長は１０ｍはあるだろうか。そこらの一軒家よりもよほど大きい。

まるで戦艦のようだ。陸上戦艦といったところか、動く悪魔の城といった感じだ。

帝国陸軍がその優秀性を喧伝する九八式中戦車など、これに比べたら豆腐屋小町のようなものだ。

「ソビエトって国は、よほど景気がいいんだな。戦車の中までに百貨店を作るんだから」

「聞いた話じゃ、こいつは失敗作って話ですよ。でかすぎて動けなくなったところを捕まって降伏したらしいですから」

「あっちの大砲が２つある奴もか？」

砲塔が５つもある戦車のとなりには、それよりも幾分控え目だが砲塔が２つある戦車があった。

控えめといっても、日本の戦車よりも遥かに大きかった。こっちも全長は１０ｍ近くある。

砲塔が５つある方が悪魔の城なら、こちらは悪魔の砦といった感じだ。しかし、悪魔の城よりも主砲は大きく、装甲の材質が違うのかのっぺりとしている。

「そうらしいですよ。ここまでひっぱって来るのに、戦車5台で牽引したそうですから」
「そりゃ、ひどい話だな」

それではとても実用性があるとは思えない。

「もう一台、あっちにもそういう戦車が展示してあったんですけど、午前中に憲兵が来て持ってちゃったんですよね。カッコよかったのに」
「憲兵？」

そこで警備兵は秘密めかして耳に口を寄せてきた。
こいつはかなりのおしゃべり好きだと黒間は直感した。

「あっちの展示品の真ん中、微妙に間が空いてるでしょ？朝まで、一台戦車が展示してあったんですよ。でも、昼前に憲兵がやって来て書類の間違いだとか言って、慌てて回収にきたんですよ。牽引用の戦車5台もつれて」
「そりゃ妙な話だな」
「なんでも、軍の研究所に送る予定だったロスケの最新鋭戦車が間違って、展示されていたらしいですよ。うちの小隊長が言うには、ケーブイだとか、カーヴェーだとか、なんとかいう戦車らしいです」

ここに展示してある木偶の坊なんかより、よほど強そうに見えましたと、警備兵は付け加えた。

「そうかい。じゃあ、あんたはその木偶の坊のお守りに戻ってくれ」
「はぁ・・・もうウンザリだよ。何でこんなことに」

暗い顔で警備兵は零下12度の寒空に立ち尽くす。

「兵士よ。問うことなかれ」

黒間はぼっそと答えた。

街に出ると決めた時から、決めていたことが2つあった。

一つは肉を食べること。もう一つは、酒を飲むこと。

この2つだった。この2つの条件を同時に満たす店が、キタイスカヤ中央大街には無数にあった。

キリル文字で書かれた看板が左右に並ぶ大通りをぶらつきながら、目当ての店を二人で探した。できれば、あまり日本人がいない店がよかった。

せっかく外国に来たのだから、異国の食べ物と酒を飲んでみたいと思った。

「まるで銀座みたいだぜ」

斎田が物珍しげに言った。

確かに、日本の大都会でもこんな雰囲気の繁華街はない。

「銀座に行ったことがあるのかよ?」

「そういえば、ねぇな」

黒間にはある。ただし、前世の話だ。地元の老人会主催の東京見物ではとバスに乗って、見て回ったことがある。

ただし、８０年代半ばの銀座と現世のキタイスカヤ中央大街はまるで似ていなかった。

通りの左右に建つビルの高さは８０年代の銀座の圧勝だが、街の雰囲気は現世のキタイスカヤには遠くおよばなかった。

キタイスカヤの石とレンガで作られたビルディングは柱の一本一本から、窓枠の一つ一つに至るまで細かな装飾が施され、建物全体が絶妙な曲線で作られたモダン様式だった。

「東洋のパリって呼ばれてらしいぜ、この辺りは」

聞きかじった知識を黒間は披露した。

「パリに行ったことがあるのかよ？」

「そういえば、ねぇな・・・あの店にしないか」

大通りから一本路地に入った店が、控え目な木製の看板で自己主張していた。

漆喰の白と暗褐色の木材のコントラストが瀟洒で、窓からこぼれるオレンジ色の灯りが落ち着いた雰囲気を醸していた。

ひょっとしたら、カフェーかもしれなかったがその時は、茶の一杯でも注文すれば済むことだった。

分厚く細かい彫刻を施されたドアを開けると香辛料の混ざった暖気が頬を撫でた。

店内は木材を多用したつくりで、テーブルクロスも明るい配色のカフェテリアのような作りだった。しかし、カフェーと呼ぶには少し暗かった。ロシア式の食堂なのかもしれなかった。

店内にいたのは、全員ロシア人で日本人の二人が入ってくると一瞬だけで視線が集まった。

しかし、敵意があるわけでもなく、直ぐに視線が逸れた。

「Здравствуйте」

奥から長身の若いロシア人のウェイターがやってきて、空いている席に案内してくれた。
もちろん、なんと言っているのかは分からない。
少しぐらいロシア語を勉強しておくべきだったかと思ったが、そんな暇があるはずもなかった。

「おい、何って言ってるんだ?」

明らかに挙動不審者の体で斎田が言った。

「たぶん、いらっしゃいませとか、そんなところだろ」
「注文はどうやったらいいんだ?ロシア語なんて、わかんねぇよ」

もちろん、黒間もロシア語は分からない。
一応、渡されたメニューも見たが、写真などついておらず、メニューを見ても何の料理なのか全く分からなかった。
しかし、黒間はこうした場合の対処法というものを心得ていた。
黒間は近くで食事をしているロシア人を指し示すと、アレと同じものを2つと言った具合に指折り示して、軽く首を傾げた。
若いロシア人のウェイターは分かりましたといった具合に深く頷いて、店の奥に消えた。

「おい、ひょっとして、今ので通じたのか?」
「そういうことじゃないか?まぁ、なんとかなるもんだろ?」

前世で会社の慰安旅行やらでハワイや韓国に何度も遊びに行った経験が生きた。
英語や韓国語が分からなくても、レストランで困ることは殆どない。
そもそも、黒間は外国人の前で動揺するようなことは昔から殆ど

なかった。同じ赤い血が流れている人間だったし、言葉が通じなくとも意思の疎通というのは可能だと信じていた。
それが不可能なのは、戦場ぐらいなものだ。
しかし、戦場であっても時折、相手の意思を感じることはあった。
それも殺意や敵意ではなく、好意や関心、興味といったプラスの感情を。

「一体、何が出てくるんだろうな?」
「普通なら、前菜、メイン、スープ、お茶だな」

酒は出るのだろうか、別途に注文しなければならないのか心配していたが、心配しなくても酒はちゃんとついてきた。
ボトルにキリル文字のラベルがプリントされ、中は透明な酒で満たされている。

「ウォッカってやつか?」
「たぶんな」

一緒についてきたグラスに注ぐと消毒液のような匂いが満ちた。

「これ、飲んでも大丈夫だよな?」

その異様な匂いを嗅いで苦笑いを浮かべた斎田が言った。

「とりあえず、飲んでから考えよう」
「そうだな、乾杯!」

グラスを合せて、恐る恐るウォッカを口に含むと火の付いた薪が爆ぜるような味わいが腹腔を満たした。
まさに火酒と言ったところか。

口の中が泡立つようだが、日本酒のような癖はなく、飲みやすいといえば、飲みやすいのかもしれない。陸軍支給の防寒衣が直ぐに要らなくなるほど体が火照ってくる。

酒のあとには、料理が直ぐに来た。

マッシュポテトにぶつ切りの茹でた野菜が入ったサラダと肉と野菜の串焼き。スープに、ビーフストロガノフが盛られたライスだった。

質よりも量というのは、如何にもソビエト軍の大規模火力集中と同じで、これがロシア流かと二人で笑いながら食べた。

程よく腹が満たされ、酒が回ったところで斎田がポツポツと語りはじめた。

「一緒に、今の隊に来て生き残ったのは、俺とお前と、他に誰だっけな？」

「根津と歌川、桜田、西東、それと安藤だな」

ウォッカのグラスを額にあてて黒間は答えた。

「安藤は生きてたか？」

「ああ、安藤は3人いただろ？」

そういえば、そうだったなと斎田が呟いた。

「安東と庵堂と、安藤だったな」

「そうそう。安東と庵堂が死んだ時は、次は自分の番だとか言って。泣きそうになってやがったな」

「ははは！そうだった。あんちくしょうめ！しっかり生きてるじゃねぇか！」

ゲラゲラと馬鹿笑いをする日本人をロシア人達が不審な眼差しで

見ていたが、二人は気が付かなった。
酔っ払っていたし、実戦の洗礼を受けた兵士は独特の泥臭さが精神を守っていた。

「タカトラが死んだのは残念だったな」
「ああ、いいやつだったのにな。あいつ結婚してたって知ってて？」
「いや、知らなかった」

タカトラというのは、藤堂という一つ上の先輩で、要領の良さから戦国大名の藤堂高虎になぞらえてタカトラと呼ばれていた。
善人だが、ずるいところがあり好き嫌いの別れる男だった。

「あいつさ、ノモンハンに出動する直前に見合いしていたらしいんだよ」
「帰ったら、いっしょになろうってか？」

そこで斎田が精一杯神妙な顔をつくって、語り始めた。

「俺は思ったんだ。日本でタカトラの帰りを待っている細君を慰めて、死んじまったタカトラの本願を叶えてやるにはどうしたいいかってな」
「で、どうしたんだ？」

とてつもない笑いの波動を感じて、崩れかける顔面を黒間は精一杯抑え込んだ。

「タカトラの遺品を整理するときにな・・・出てきたんだよ。アレが、一杯。だからさ、そいつをまとめて日本の細君のところへ送ってあげたんだ。軍事郵便でな。故人があなたに贈ろうとしていたも

のですって、手紙を添えてさ」
「アレって、なんだよ」

そこで、すっと斎田が無言で差し出してものは、小さな紙袋であった。
表面に星印と突撃一番とプリントされていた。

「お前ってやつは！」

爆笑しながら黒間は叫んだ。

「やっぱり、これしかねぇだろ！」

机を叩きながら、斎田も叫び返した。
ロシア人のウェイターが迷惑そうな顔をしたが、二人は気づかなかった。

「あー、もう。クソッ。お前は最悪な人間だな」
「おめぇに言われたくねぇよ。同期の癖に、俺より先に曹長になりやがって」
「実力だよ。実力」

もはやグラスなど使わず、直接ビンからウォッカをラッパ飲みしながら、黒間は言い返した。

「何機落としたんだっけ？」
「たしか、１５か、１６ぐらいだ。撃破も同じぐらいあったんじゃないか」
「結構、差がついちまったな」

次は俺が勝つ、と呂律の回らない口で斎田は吠えた。
できれば次なんてあったほしくないと黒間は思った。

第3小隊

１９４０年1月１５日　ハルビン

冬季休暇が終わり、松がとれると内地から補充のパイロットが続々とやってきた。

各中隊に収容されたパイロット達は、中隊内部の内務班に分かれて兵舎で起居することになる。

戦隊長の訓示も、中隊長の訓示も簡潔で直ぐに終わった。

特に新しく第3中隊長に任じられた篠原弘道中尉の訓示は隊史に残るほど短いものだった。それがどのような訓示であったのかは、本人の名誉のために伏せておく。

誰だって、忘れたい過去はあるものだ。

新しいパイロット達ははっきりと言って玉石混交だった。

目についたのは海軍からやってきた補充のパイロット達だ。彼らは軍装からして明らかに異なるので、大いに目立った。

異なるのは軍装だけではなく、文化もだいぶ違った。

彼らは自分たちのことを搭乗員と呼んでいた。陸軍ではパイロットのことを空中勤務者と呼ぶので、軽いカルチャーショックだった。

海軍出身者の多くはベテランで、最初から小隊長クラスとして集められた者達だ。一等航空兵曹や少尉が多かった。一等航空兵曹が陸軍では曹長にあたる。

少尉は少尉のままでいいとして、一等航空兵曹をこれから何と呼ぶべきか部隊で議論になった。

陸軍の規則では曹長だが、海軍の規則では一等航空兵曹になる。

こうした問題は他にもいくつも発生していた。例えば、海軍では大尉を「だいい」と呼ぶが、陸軍では「たいい」だった。海軍は大佐を「だいさ」と呼ぶが、陸軍では「たいさ」である。海軍には准

尉がなく、代わりに兵曹長があった。

また、陸軍では目下な者が上級者を呼ぶ際に階級の後に「殿」をつけるが、海軍では「殿」はつけない決まりだった。逆に「殿」を付ける場合は、相手を侮蔑するニュアンスになる。

敬礼のやり方も陸海軍で肘を曲げる角度に違いがあり、脇と大きく開ける陸軍式と脇を締める海軍式では全く作法が違う。

同じ日本軍なのに、何故こんなにバラバラなのか理解に苦しむ話である。

兵曹という階級を一等、二等、三等で分ける意味も分からない。伍長、軍曹、曹長の方が分かりやすいだろうと思った。「殿」のあるなしが業務に深刻な影響を及ぼすとも思えない。

しかし、将校たちはこういうことには異常なまでにこだわりがあった。陸海軍のどちらの将校も自分達のやり方が正しく、優れていると一歩も譲らなかった。

結局、部隊では結論が出なかったので上級司令部に問い合わせたところ、空軍が正式に発足するまでは、現状を維持するように通知があったらしい。

空軍が正式に発足するのは、日本でしか通用しない官僚制度の理屈で4月1日からになっていて、それまでは今までどおりにやれということだった。

大尉を「だいい」と呼ぶのか、「たいい」と呼ぶのかも、年度が変わらないと分からないらしい。

何とも無責任な話であり、黒間や多くの下士官、兵隊にとっては迷惑なことだった。

罪もない陸軍出身の下士官が、海軍出身者の上官に「殿」をつけて呼んで殴られたり、逆に海軍出身の下士官が陸軍出身者の上官に海軍式の敬礼をして、なっていないと殴られたりすることがあった。

後になって分かったことだが、概ね階級や敬礼の作法は陸軍式で纏まった。

これは日本空軍のモデルになったルフトヴァッフェが概ね陸軍式

の諸制度を採用していたためである。ルフトヴァッフェの前身は帝政ドイツの陸軍航空隊だった。

ただし、全てが陸軍式であるわけではなく、階級の後には「殿」はつけなくていいことになった。

これは面倒がなくて、陸軍出身者からは好評だった。

しかし、部隊によっては独自にローカルルールを定めているところもあり、「殿」をつけないと殴られる場合があった。これが完全に統一されるのは随分後になってからだった。

海軍以外からやってきた補充のパイロットもいて、ノモンハンで壊滅的な損害をうけて解隊された爆撃機部隊からの転科者も多かった。

彼らは一般的に飛行時間が長く、飛行そのものには習熟していたが戦闘機同士の空中戦には慣れていないので、射撃練習からやり直す必要があった。

飛行第１１戦隊は、戦闘第１１大隊と名前を変え、３個中隊を擁する戦闘機部隊になった。

１個中隊は３個小隊から成り、１個小隊は２個分隊からなる。小隊の定数は４機だった。各中隊には中隊本部があり、大隊にも大隊本部があってそれぞれ４機が配備されている。

よって、戦闘第１１大隊の総戦力は戦闘機５２機だった。

黒間が配置されたのは、第３中隊の第３小隊であった。

この小隊は戦闘第１１大隊の中で最も練度の低いパイロットが集められた小隊になった。

理屈は簡単で、飛行学校や教育飛行隊を繰り上げ卒業したパイロットの中でも飛行時間に差があり、３００時間近く飛んでいる者いれば、１００時間以下という者がいた。そうした飛行時間が短い者と卒業間近の者と混ぜて使うと事故の元になるだけなので、自然と飛行時間で部隊分けが成された。

やり方としては、進学校などに見られる習熟度別クラス編成に近い。

第１中隊には飛行時間が２００時間以上の者が集められ、第２中隊が概ね１５０時間程度。第３中隊はそれ以下の者が配置された。第３中隊の中でも、飛行時間別に小隊が分けられていて、第３小隊が最も飛行時間が短くなっていた。

問題はこうした飛行時間の短い新米を短期間にどうやって一人前に仕立てあげるかだった。

「では、本日の地上滑走訓練を始める。かかれ」

中隊長の号令で、一斉に発動機に火が入る。

除雪が済んだエプロンには、４機の九七式戦闘機改が並んでいた。エンジンは既に暖気が済んでいる。ガソリン臭い排気が鼻についた。

黒間は目が痛くなる前に飛行坊のゴーグルを身につけ、素早く機体の主翼に這い上がり、風防の窓枠をしっかりと掴んで、主翼に腰掛けた。

今日の黒間の定位置はそこだった。

反対側から、小隊員の安藤柾上等兵がコクピットに滑り込む。

「よろしくお願いします！」

安藤が声を震わせて言った。

「緊張するなとは言わないが、もっと肩の力を抜け」

安藤がニキビ顔を紅く染めて頷いた。

初等練習機の赤とんぼしか乗ったことがない者が、最新鋭戦闘機にいきなり乗るのだから緊張するなという方が無茶な話だった。

しかし、緊張してミスされても困る。

「ちょっと散歩するだけさ。そう難しいことじゃない」

訓練のメニューとしては、比較的簡単なものだ。

地上滑走は、飛行学校でも行う最も初歩的な訓練だ。まず機体に慣れるために、飛行機を使って滑走路を走る。

ただ、それだけのことだった。

しかし、これが意外に難しい。何故ならば、常にエンジンの反トルクが作用するからだ。４輪の自動車と違って、３輪の戦闘機は反トルクの作用を非常に強く受ける。

この反トルクを調整するために、垂直尾翼やエンジンの取り付け角度をオフセットしている場合があり、九七式戦闘機改は１度ほどエンジンのオフセットして装着されている。

しかし、こうした措置が有効になるのはある程度の速度が出ているときで、低速で地上を滑走する場合はラダーで当て舵をしなければ真っ直ぐ進むことができない。

現用戦闘機に比べて１０分の１程度の馬力しかない練習機でさえそうなのだから、九七式戦改の偏向はかなりキツかった。

安藤がそろそろとスロットルを押し出すとエンジンの回転計が頭をもたげた。

「もう少しだしていいぞ」

黒間が指摘すると安藤は恐る恐るスロットルを押し出した。

アイドルからほんの少しところで、ゆっくりと九七式戦は滑走を開始した。後ろから間隔を空けて残りの３機ついてくる。

それぞれがコクピットと主翼に一人ずつパイロットを載せていた。主翼にはもちろんプロペラ後流が遠慮なく直撃していた。気を抜けば吹き飛ばされそうだが、慣れればどうということはない。

しかし、九七式戦改は機体側面に推力式排気管を装備していたので、新米がうっかりスロットルを開いたら排気ガスのロケット効果

でアポロ並の吹っ飛び方をすることになる。
　1，０００馬力級戦闘機が装備する推力式排気管のパワーは強力で、自動車の排気ガスのようなチャチな代物ではなかった。これだけで、戦闘機の速力が１０～１５ｋｍ／ｈは向上するのだから、その力は推して知るべしである。
　新米と黒間を載せた九七式戦改は誘導路を経て、滑走路に向かう。

「よし、ゆっくりと止めろ。ブレーキは急に踏むなよ」

　一昨日、迂闊な新米が急ブレーキを踏んで、危うく転落しかけたので黒間は慎重だった。
　黒間は機を滑走路の端に止めさせた。後から、斎田を載せた機がやって来て、停止する。

「今のこの位置が、滑走開始位置だ。第3小隊はいつでもチームで行動する。飛行も、戦闘も、離陸も、着陸も全てだ。2機一組が編隊の最小単位だ。ペアの位置を確認しろ」

　安藤が左後方に振り向き、2番機の位置を確認する。

「確認しました」
「よし。常にペアの位置に注意するんだ。例え敵機を撃墜してもペアを失ったら、その戦いは負けだ。分かったか？」

　安藤が深く頷いたのを見て、黒間は本当に分かったのだろうかと心のなかで首を傾げる。
　きっと分かっていないに違いない。興奮で目が泳いでいる。
　黒間はため息をつきかけるが、最初はこんなものだと諦めて、一つ一つ仕事を片付けることにした。

「スロットルを開け。滑走を開始する」

軽く手をあげて斎田に合図すると４機の九七式戦改はそろそろ走り始めた。

「もっと開けろ」

黒間が発破をかけるとさらに速度が上がった。

ふっきさらしの主翼上面では既に限界に近い速度だ。

黒間は恐怖を覚えるが、単座機では他に教官が座る場所はなかった。

後年に、こうした不具合を解消するために新型戦闘機には、全て複座型が作成されることになり、訓練が随分と楽になるのだが、今はこれしかなかった。

「ラダーをもっと踏め！」

プロペラ後流に負けないように黒間は怒鳴った。

機体が左へ偏向し、滑走路から外れかけている。

安藤はラダーを踏んで、それを修正するが修正量が大きすぎて今度は機が右に曲がりかける。慌てて左ラダーを踏むが、やはり修正量が大き過ぎて機首が左に振れてしまう。

結果、九七式戦改は酔っぱらいのように蛇行する。尾輪が左右にふれ、機のバランスが崩れる。横転しかける。

「スロットルを絞れ！左ラダーは踏むな！」

生命の危険を感じて、黒間は怒鳴った。

エンジンの反トルクが消えて、スピードは落ちるが機は直進するようになった。

パイロットと言えば、顔面蒼白で彫像のように固まっている。
黒間は殴り倒してやりたい衝動に駆られたが、辛うじて思いとどまった。戦後に旧軍の私的制裁にまつわる悪評を散々に聞かされていたからだ。
この頃の日本軍は、兵隊と畳は叩けば叩くほど良くなると信じていた。
実際に、黒間も入営したばかりの頃には不愉快な思いを何度もした。
まぁ、自分はこんなものだと我慢できなくもなかった。新兵に対する私的制裁や陰湿ないじめは日本軍の半ば伝統だった。
しかし、前世であの戦争が散々な結果に終わったあとは全て変わってしまった。負けた軍隊というものは悲惨だった。特に偉そう顔をして兵隊を殴っていた奴らは報復に怯えた。戦後に現れた私的な報復やリンチを思い出すと今でも血が凍る。徴兵で引っ張られてきたチンピラを殴った教育係の鬼軍曹が、復員した後で闇市で血だるまになって発見された時は他人ごとではないと思った。
幸いにも、自分はその対象になることはなかったが、内心は酷く怯えていたものだった。全く自分が潔白であるとはとても言えなかったからだ。
特に戦争が上手く行かなくなった後半はかなり荒れていた時期がある。

「申し訳ありませんでした！」

とても及第点は与えられないが、何とか滑走路を一周して戻ってくるなり、安藤は叫んだ。
どう考えても鉄拳制裁コース間違いなしと考え、先制して頭を下げるあたり、安藤はかなり知恵が回るタイプだと黒間は判定した。
こういうタイプの後輩を見るとからかってやりたくなるのが先輩の心理である。

黒間はその場で腰を下ろし、下から安藤の顔を見上げた。

「俺の顔を見て話せ。地面に向かって叫んでどうする？」

安藤はきょとんとした顔をあげた。

「別に怒っちゃいない。最初はこんなもんだ。あんまり気にするな」

何となく手持ち無沙汰だったので、黒間は安藤の頭を撫でてやった。

「地上滑走の時は左ラダーは踏まずに、右ラダーと機体のトルクを合成して、まっすぐに進むように調整するんだ。分かったか？」

「は、はい・・・」

ぶん殴る代わりに、背中をバンバンを叩いてやって、パイロット交代になった。

黒間の計算では、これをあと1週間も毎日繰り返せば、とりあえず地上でもたつくようなことはなくなるはずだった。

飛行訓練はそれからだ。この方針は中隊の方針として、中隊長の篠原にも許可を受けていた。飛行の前に、地上での動作を確実にこなせるようにしておかなくてはならない。

機体にとにかく慣れさせるという意味もある。

問題は飛行訓練であるが、それについては黒間はある程度楽観していた。

前世の大戦末期には今ここにいる連中よりも遥かに飛行時間が短い未熟を通り越して無謀の域に達するような素人でも、四式戦に乗せていたぐらいだ。

四式戦よりも遥かに低速の九七式戦改なら、なお容易であろう。

「おい、クロ。ちょっといいか？」

中隊長の篠原が呼んでいた。

だいぶ、難しい顔をしていた。黒間が駆け寄るなり、肩を寄せて囁くように言う。

「だいぶ程度が悪いから、もっとゆっくり滑走させろ。機を壊すなよ」

「わかりました」

「それから、ああいう時はもっと怒っていい」

黒間は篠原の目を見た。

「そんな顔するなよ。怒られた分だけ、奴らは学ぶ」

「殴るのは苦手です」

「じゃあ、怒鳴れ。甘さと優しさは違う。志願してパイロットになった奴らだ。遠慮は無用だ」

黒間はそろそろと息を履き、わかりましたと答えた。

その日は、夕方までに喉が潰れるまで怒鳴る羽目になった。

昼間の課業が終われば、兵隊は内務班に戻って休む。

ただし、曹長にもなると下士官室を割り当てられ、内務班での生活もおさらばである。

下士官室は４人部屋だった。内務班での暮らしに比べれば、よほど気楽だったが同室の年長者への気遣いは存在しているので、さほ

ど自由というわけでもなかった。
　こうした濃密な人間関係が苦手人間には苦痛かもしれなかったが、幸いなことに黒間は戦国時代から続く尾張の農村出身であったので、少しも苦ではなかった。閉鎖的な中世以来の身分制が残る農村の生活は、どこか軍隊的でさえあった。
　よって黒間にとっては、これが常態という方が正しい。
　そう思うと、戦後の都市化で日本人が失っていたものが如何に大きいか分かる。
　この時代でも、都市部出身者の兵隊は兵営の暮らしには非常な苦労をしていた。それが正しいことか、間違っていることなのかは判断がつかないけれど。

「おい、クロ公よ。新しく入ったトウシロはどうだ？」

　酒の匂いを漂わせて相田十曹長が言った。
　部屋の隅にウィスキーの空き瓶が転がっている。もちろん、下士官室での飲酒は禁止だ。
　しかし、相田は無類の酒好きで、要するにアル中だったので隠れて酒を飲んでいた。見つかれば、タダでは済まないが、陸軍の飯が長いせいか見逃されている。
　黒間も階級は同じ曹長だったが、昇進は相田の方がずっと早かった。
　ノモンハンにも出動したベテランの下士官だ。飛行時間も長い。ただし、スコアは黒間の半分程度だった。

「半年か、１年もあれば、使い物になってくると思いますよ」

　黒間は読みかけの雑誌から顔を上げて答えた。
　内地の出版社が出しているミリタリー雑誌で、「空と海」という月刊誌だった。

日本のみならず、世界各国の軍艦や戦闘機等を写真付きの記事で紹介する雑誌である。

「その前にロスケが来たら、どうするんだ。あぁ？」

赤い顔をして絡んでくる先輩に、黒間はどうしたものかと思案した。

決して悪人ではないのだが、酔っ払うとタチが悪い。

「そうですね。爆弾でも抱いて体当たりでもしますか」

実際に、前世の大戦末期に行われたことだった。

水平の直線飛行も怪しい未熟なパイロットが、米軍相手にとれる戦法と言えば、特攻ぐらいしかない。そう思うと、この程入ってきた新人達は恵まれていた。

特攻隊員とどっこどっこの飛行時間しかない彼らだが、陸軍は彼らを人間爆弾ではなく、ごく普通の戦闘機パイロットとして扱ってくれている。

しかし、それがいつまで続くかは分からなかった。

この世界でも、黒間の記憶どおりに歴史が推移した場合、５年後には神風が吹くことになりかねない。

戦闘機パイロットとして、前世で大抵の任務をこなしたが、その中でも一番イヤな仕事は特攻隊の直援だった。

沖縄戦で何度か特攻隊と一緒に飛んだが、本当に後味の悪い仕事だった。爆装して重くなった隼戦闘機がグラマンにバッタのように撃ち落されるのを見て、黒間は涙も枯れ果てた。

特に悲しいのは、明らかに脱出すれば助かる状況でも、特攻隊員の多くが脱出せずに自機と共に落ちて行くことだった。

気持ちは分からなくもなかった。

誰だって、２度も死ぬために飛びたいとは思わない。

「爆弾を抱いて体当たりって・・・お前、正気か？」

精神の平衡を疑うような顔で言う相田を、黒間はおかしく思った。

確かに、あの頃の日本は正気を失っていた。

「クロ・・・お前はつかれているんだ。そういう時は、飲むのが一番だ」

そう言ってウィスキーのビンを押し付けてくる相田に黒間は閉口した。

しかし、ここで断ると面倒になるのは目に見えていた。酔っぱらいには常識が通用しない。

「クロ。とにかく困ったら、誰かにすぐ相談することだ」

顔は赤いままだったが、相田はそれなりに真剣な顔をつくって言った。

どうやら相田に、気を使わせてしまったらしかった。

「お前は、まだ若い。確かに、お前は空の上では、エースパイロットなのかもしれんが、地上ではまだまだヒヨっ子なんだ。わからないことがあったら、俺や中隊長にすぐ相談するんだぞ？」

言い含めるように言う相田に、黒間は深く頷いた。

先輩と言っても相田はまだ２７だった。前線で勤務するパイロットの殆どが３０前だった。

戦争を生き延び、２１世紀を見てきた黒間にとっては孫のような歳の若者ばかりだ。

しかし、それを知っているのは黒間だけだった。

「よし、言ってみろ。なんでも相談にのるぞ」

特に相談したいことなどなかったが、黒間は敢て難しい顔をつくった。

日本型組織の常として、先輩格のこういう発言を無碍するのは身のためにならない。

「実は、新しく入った新人がなかなか小隊に馴染んでくれなくて・・・緊張しているんでしょうか」

「うん。そうだな・・・俺もそう思う」

こういう場合の対処法は、嘘でもいいから困っているフリをして、相手の説教に調子を合わせることだ。

「まか、最初は誰だってそういうもんだ。初手から上手は誰もいない。その内にコツがわかってきて、だんだと要領よくやれるようになるもんさ。そうだろ?」

「そうですね」

「うん。そうだ。焦っちゃイカン。お前は焦っている。焦りは失敗のもとだ。もっと、ゆっくりと確実に仕事をこなすことが肝心だ」

なるほど、と黒間は深く頷いた。

内心では全く別のことを考えていたが。

「だいたいだな、インチとボスるのだって、最初から上手な奴はいないだろう?」

「インチ?ボスる?」

黒間は首を傾げた。

「えーっとだな・・・島と佐権が言っていたんだが、海軍じゃ女と寝ることをボスるって言うらしいぞ」
「はぁ・・・」

島と佐権とは、同室の海軍出身のパイロットだった。
偶に二人でしか理解できない言葉で話していることがある。「ケーエー」がどうのとか、「インチ」がどうのとか、シーアールがどうのとか。
その手の隠語は陸軍にもないわけではないのだが、海軍同士でこそこそ話していることが多いので評判はよろしくなかった。

「海軍さんは妙なことをしますね」
「向うからしたら、俺達も相当に変なのかもしれないがな」

確かにそのとおりかもしれない。
しかし、贔屓目に見ても陸軍の方がマシだというのが黒間の考えだった。
だいたい人間は陸地に住む動物で、船の上で生活するようにはできていない。本来ありえないことをしている分だけで、海軍のやり方は奇形的なはずだ。

「でも、バッターとかは俺はダメだな」
「バッター？野球ですか？」
「違う。海軍では麺棒みたいな奴を使って、新兵に気合を入れるそうだ。信じられるか？」

これには黒間も引いた。
あまりにもシュールである。木の棒で人を殴るのか。

「そりゃ、野蛮ですね」
「だろ?俺は陸軍でほんとによかったよ。木の棒で人を殴るなんて、本当に野蛮だ。信じられんよ」

陸軍では鉄拳制裁やビンタはあるけれど、木の棒で人を殴ったりしない。
同じ人間を殴るのなら、道具ではなく素手で殴るべきだと思った。
殴られた方は当然痛いが、素手なら殴った方も当然痛い。それが平等というものだ。

「わざわざ殴るための棒を船に積んでおくんでしょうか?」
「当然そうなるだろうな・・・」

そういう発想はなかったのか、相田も眉を潜めた。

「島さんと佐権さんって、もしかしてその棒を持ってきているんですか?」
「さぁな・・・」

なんとなく二人は気まずい気分になった。
とりあえず、下士官室内にそれらしい木の棒はなかった。
もしも、そんなものが枕元なんかにあったとしたら、実に嫌な気分になるだろう。

「こんなことで彼らと一緒にやっていけるんでしょうか?」

彼らとはもちろん、海軍のパイロット達のことである。

「そのうち落ち着いてくるんじゃないか?最初のうちの混乱はある程度は仕方ない」

「そりゃそうですが、異動で空母に乗るようなことになったらどうしますか？」

海軍航空隊と合併して発足した日本空軍には、空母の航空隊も含まれているという話だった。

黒間は読みかけのミリタリー雑誌の記事に目を落とした。

空軍発足の公式発表は既になされていて、内地の雑誌では様々な特集が組まれていた。それによると空軍は陸海軍航空隊が保有する全ての航空機を指揮下におく計画になっているらしい。

ただし、陸軍師団に配備されている小型連絡機と艦艇搭載の水上機は例外とのことだった。

「そうなったら、醤油でも一気飲みするしかないな。俺、船はダメなんだよな。あの独特の揺れている感じを思い出すと吐きそうだ」

心底困り果てたという調子で相田は言った。

調子が悪そうに胃の辺りを抑えている。

「すまん・・・ちょっと飲み過ぎたか。便所に行ってくる」

前かがみにも係わらず、風のように相田は去っていた。

黒間はため息をついて、散らかったままの酒瓶を片付ける。アレでは当分帰ってこれないだろう。

やっと静かになった室内で、黒間は誰にも気兼ねすることなく雑誌を読み進めた。

今月の特集は、新鋭戦艦飛騨である。

戦艦、飛騨？

そんな名前の戦艦は記憶になかった。

日本の戦艦といえば、わらべ唄にもなっている金剛、比叡、榛名、霧島、扶桑、山城、伊勢、日向、長門、陸奥の１０隻だ。

これに大和、武蔵を加えた１２隻が先の大戦で戦った日本の戦艦だった。

そして、長門以外は全て撃沈され、長門も原爆実験で沈めらた。

戦後に史上最大最強の戦艦として有名になった大和と武蔵だが、黒間自身もそういう戦艦があると知ったのは戦後になってからだ。

戦時中にも、そういう新型戦艦があることは噂では知っていていたが、具体的にそれがどんな物なのかは知らなかった。理由は簡単で、軍事機密だからだ。

もちろん、興味がなかったというのもある。陸軍航空隊の戦闘機パイロットにとって戦艦の大小や有無など割とどうでもいいことだった。一応、沖縄戦の末期に海軍の水上艦が特攻して撃沈されたという話は聞いていたが、殆ど記憶には残らなかった。

それよりも、宇宙戦艦になってイスカンダル星にいく話の方が印象に残っている。

「こんな船あったか・・・？」

記事を読み進めると意外なことが分かった。戦艦飛騨は、２０，０００ｔの小型戦艦だった。

東洋のポケット戦艦という紹介があり、武装は３１サンチ砲３連装２基６門になっていた。最高速力は駆逐艦並の３５ｋｔを発揮するという。

戦艦飛騨と同型艦の肥前は第二次ロンドン海軍軍縮条約締結で廃艦が決まった戦艦金剛の代替艦で、軍縮条約における日本の残保有枠の４０，０００ｔあまりを２で割った結果なのだという。

条約の制限で３５，０００ｔまでの戦艦しかつくれないから、残った５，０００ｔが勿体無いのでちょうど良くなるように小型の戦艦２隻を作った結果が、飛騨型戦艦ということだった。

つまり、今の日本の戦艦は飛騨、肥前、比叡、榛名、霧島、扶桑、山城、伊勢、日向、長門、陸奥の１１隻になる計算だった。

この内の比叡は練習戦艦なので、実働は１０隻になる。
ということは、大和や武蔵はどうなるのだろうと黒間は首を傾げた。
黒間が戦後に知った詳しい歴史の流れでは、ワシントン、ロンドン海軍軍縮条約から日本が脱退して、戦艦大和の建造が始まるはずだった。
しかし、第二次ロンドン条約があるということは、まだ日本は軍縮条約を守っていることになる。
大和や武蔵は建造されていないと考えるべきだろう。
この2隻の戦艦については、黒間はあまりいい印象がなかった。
それは多分に戦後のマスメディアの否定的な報道の影響を受けたものではあったけれど、飛行機の時代に逆行するような無駄な買い物だったのも確かである。
そもそも、真珠湾攻撃やマレー沖海戦で飛行機を使って戦艦を沈めておきながら、世界最大の戦艦を作って浮沈戦艦だとか吹聴するのは一体どういう精神構造なのだろう？
戦艦をつくる金で、もっと沢山飛行機をつくっておけば、もっと有利に戦えたかもしれないと思うのは、戦闘機パイロットとしては極々自然な発想と言えた。
黒間は海軍のことは殆ど何も分からないし、この2隻の戦艦がどんな戦略的な意味や価値をもっていたのかも知らない。しかし、大和と武蔵を作らなくて済んだというのは、たぶん良いことなのだと思った。
少なくとも、ピラミッド、万里の長城、戦艦大和とバカにされるようなことはなくなったのだから。

春のめざめ

１９４０年４月１５日　ハルビン郊外

ハルビンの春は遅く、短い。

街が氷の都と呼ばれる時期が過ぎても、あまり暖かくならなかった。

雪は溶けなくなり、若葉が芽吹いても、空は寒々しいままだ。

しかし、５月に入ると急に暑くなり、いきなり夏が始まる。ハルビンには夏と冬しかないのだ。

もっとも、高度３，０００ｍを巡航していれば、外界が夏だろうと冬だろうとあまり関係がなかった。富士山を見下ろす高みに登ってしまえば、後はただひたすらに寒いだけだ。

エンジンの熱と革製の飛行服に守られて、黒間以蔵は訓練空域に向かって飛行中だった。

列機は３機。自分を入れて合計４機。標準的な１個戦闘機小隊だった。

さらに、吹流しを引いた練習機が１機いた。

本日の訓練内容は射撃である。

練習機が牽引する吹流しにむかって射撃を加え、襲撃動作を繰り返す。やっと戦闘機らしい訓練ができるまでに新米達は熟達してきた。最近は特殊飛行（宙返り等）なども教えている。

ただし、未だに本格的な戦闘に耐えるとは思えなかった。

あと３月か、４月もすれば、それなりに形になってくるのではないかと思う。

「門田。フラフラするな！」

黒間はふらつく列機に鋭く言った。
門田明伍長の飛行時間は５０時間程度だ。本当なら第一線の戦闘機には触れることもできない程度の技量しかない。しかし、そんなパイロットでも使えるようにしなければならなかった。
彼の機は巡航編隊から今にも脱落しそうだった。
緊密な４機編隊を維持するのは、それなりに技量を要する。適切な間合いを保つために、細かなスロットルの調節が必要だった。
しかし、新人にはそれが難しい。
スロットルを開ければ編隊がつまり、閉じれば開きすぎてしまう。適切な間合いを保つためには先を読んだ調節が必要だが、それが簡単にできれば苦労しない。
また、風の影響も無視できない。高度が上がれば、空気密度が下がって機体が浮つく。一緒に飛ぶ編隊各機の作り出す航跡流にも注意を払う必要がある。
そして同時に、これが実戦ならば索敵も行わなければならない。編隊飛行というのは参加するパイロット全員の総合的な技量を問われるものだった。

「危ない！バカヤロー！」

スロットルを開けすぎた門田の機が危険な距離まで接近してくる。
黒間はラダーペダルを蹴って、機を滑らせ接触を回避する。
危うく衝突するところだった。
頭に血がのぼりかけるが、あまり怒鳴っても逆効果だった。飛行中に萎縮されても困る。それこそ事故の元である。

「す、すいません！」

インターカムを伝う門田の声は震えていた。
黒間は頭痛を覚える。震え上がりたいのはこっちだった。

この3ヶ月間、訓練中の事故で既に3人が死んでいる。墜落した戦闘機が5機だった。墜落した5機内、脱出に成功したのは2人しかいない。

飛行大隊の戦力のおよそ一割程度が訓練だけで失われている。特に操縦が難しい機ではない九七式戦改を使った訓練でこの有様だった。

技量が低すぎるのか、それとも訓練のやり方が悪いのか。大隊の多く将校は前者の信者だったが、その信仰を表明したところで、何の変化もないのが現実だった。

であるのならば、やり方を変えていくしかない。

「黒間から、各機へ。編隊を第2法に組みかえる」

第2法というのは、最近になって現場独自の経験と考察によって編み出された飛行編隊だった。

従来の密集して緊密な編隊ではなく、4機の間隔を広くとっているのが特徴だった。各機の自由度が高くなり、操縦技量が低いパイロットでも編隊を維持しやすい。

編隊の維持が容易なので、その分だけで索敵に集中しやすい。

欠点はその逆で、各機の自由度が高いので個々の技量向上と一層の相互連携に対する訓練の深化がなければ、バラバラの単機戦闘になりやすいことである。

ノモンハンでの空戦は既に多くの体系的な分析が費やされ、ソビエト空軍の使用する戦法についても纏まった文書が現場に配布されていた。

それによると、ソビエト空軍は主戦法は単機空戦ではなく、編隊空戦に移行しつつあり、これに対抗するにはわが方も編隊空戦法の確立しなければならないと結論されていた。

しかし、具体的にそれがどんなものであるのか未だに明確ではなかった。

ドイツ空軍を真似て４機編隊を導入したものの、使用法については試行錯誤の段階だった。

飛行編隊第２法も、その過程で生まれた戦術の一つで、４機編隊に高低差をつけて横一列に並べ、各機の間隔を５０～６０ｍほど空けて配置するのがその基本形態だった。

速度が出ている場合は編隊の間隔を広げて対応する。

後に、傘型編隊と呼ばれることになる日本空軍の基本飛行編隊の萌芽だった。

この時点では、未だ制式なものではなく、あくまで現場の創意工夫による自然発生的なものに留まっていたが、戦闘機の高速化により密集編隊の維持が困難になるにつれて、急速に広まっていた。

編隊第２法への組み替えると烈機の飛行が目に見えて安定したので、黒間はやっと一息つくことができた。

黒間は眉間に寄った皺を揉む。最近、頭髪に白髪が混じっていることに気付いて戦慄した。

部下を率いて飛ぶというのは重荷にほかならない。自分の命の心配だけしていればよかったころが懐かしい。あの頃は気楽だった。

「射撃訓練、始めるぞ。クロ、お手本を見せてやれ」

「了解」

訓練空域（それほど厳密な定めがあるわけではなく、実弾の空薬莢を空からばらまいても地上に迷惑がかからない場所）にたどり着き、練習機に乗り込んだ篠原中尉から無線が来た。

今日は中隊長自らが射撃標的を曳航する練習機に乗り込んで射撃訓練の評価を行う。

その為、新米が必要以上に緊張していた。それでは実力の半分も出せないだろう。

小隊長の黒間にとってははた迷惑な話だった。

そもそも、中隊長の参加は土壇場で決まったものだ。実態として

は中隊事務室の書類格闘から中隊長が敵前逃亡を図っただけのことだ。

きっと、週番下士官は顔面蒼白だろう。

「これより攻撃を開始する。まずは、後方上空攻撃だ」

戦闘機の攻撃機動としてはもっともベーシックなものだ。

黒間は機首上げして、高度を稼ぐ。スロットルを少し絞る。主翼に風をあてて、揚力を多めに稼ぐイメージ。

編隊から離れ、標的の吹流しから５００m程度の後方、上空に機をつけた。

上昇で対気速度が落ちていた。

しかし、エンジンのパワーには余力があり、何より高度があった。

降下のタイミングを読んで、機首を下げ。スロットルを空ける。

標的に向かって突進する。降下格は４０度程度。ラダーで横風の影響を修正する。

射撃直前にラダーペダルから足を離し、舵を中立に戻す。ピタリと白い吹流しが光学照準器の中央に来る。そこから少し前に向かって、操縦桿の銃把を引く。

機首機関砲と主翼のガンポッドが火を噴く。

射撃は一瞬。

九七式戦改は直ぐ様に標的を通り過ぎた。吹流しの下方に抜ける。

黒間は首廻らし、上空を見た。白い吹流しに無数の穴が空いているのが見える。

そのまま上空を睨んだまま降下で増速した機速を使って、ズーム上昇。

黒間は青空の中に並ぶ編隊との間合いを計り、ピタリと元の位置へ機を戻す。軽く機首上げ、速度を殺す。スロットルを元に戻した。

変わったのは航空時計の分針と幾ばくかの残燃料。それに射撃に使った弾薬の重量だけだった。

「流石だな」

篠原の講評に、黒間は機をバンクさせて答えた。
それから2番機、門田。3番機、斎田。4番機、多見が代わる代わる後方上空から突進した。
分隊長機の斎田は別として、門田と多見の射撃は早すぎる上に、遠すぎた。

「ヘタクソ！もう一度、最初からやり直せ！」

容赦なく篠原の罵声が飛ぶ。

「黒間！てめぇは新人に何を教えてやがった！」

もちろん、雷は黒間の上に降り注ぐ。
全くいい迷惑だった。

「門田、多見。もう一度やり直しだ。俺が間合いを図るから、俺の合図で射撃しろ。分かったか？」

二人からの応答を待って、黒間は編隊を離れた。

「門田。お前からだ。標的の後方上空に占位しろ」

門田機が、上昇して練習機の後方上空に機をつける。
黒間は出来るだけ2機を俯瞰できるように、少し距離を取った。

「門田。標的との距離はどれくらいだ？」
「５００ｍはあると思います」

黒間は顔を顰めた。

「今の位置で３００ｍってところだ。もっと距離をとれ」

緊張していたり、集中していたりすると思ったよりも遠くのものが近く見えることが多い。

門田が陥っている錯覚もそれによるものだと黒間は推定していた。地上での訓練では、門田の距離感は評価に値するほど正確だった。

門田機が機首上げ、再度上昇する。

「門田、止まれ！」

今度は行き過ぎそうになったので、黒間は慌てて止めにかかった。距離感というものには、天性の才能があるというのが黒間の持論だった。

ただし、才能の有無は練習を重ねることである程度は補うことができる。真に恐るべきことは、才能あるものが真摯に練習を重ねた場合の結果だ。

黒間は自分の距離感に天性はないと判断していた。

残念なことだが、仕方ない。偶に天性の持ち主が現れ、ひと目見るだけで対象との正確な距離をたちどころに明らかにして周囲の耳目をか攫っていくものだが、凡人でも技術を身につけることで似たようなことができる。

黒間が使うのは風防の窓枠を使うやり方で、風防の窓枠と単発機の大きさの割合を使って、彼我のおおよその距離が分かる。

風防の窓枠は自分の指の第一関節でも代用することもできた。双発以上の爆撃機を相手にする場合にも応用可能なやり方だった。

或いは、経験で何となくおよその距離を掴むことできたが、経験による測定は心理状態の影響を大きく受けるので、戦闘中にはあま

りあてにならない。特に爆撃機を相手にするときは、敵の防御機銃によって、どんなベテランパイロットでも緊張を覚える。逆に言えば、爆撃機の防御機銃の実効性とはその程度の意味しかない。

射撃において正確な距離を知ることは極めて重要だった。

弾丸がどの距離まで直進し、いつから垂れるのか、どの距離からどの敵機に対して有効な打撃を与えることができるのか。これは数値化されていて、概ね距離に比例して結果が悪くなる傾向がある。有効射程外からの射撃は全く無意味になる。

一番確実なのは、敵機にぶつかるぐらいの勢いで突進し、銃撃を浴びせることであった。

しかし、いつでも確実な方法を実施できるとは限らない。

だが、これ以上のことを今の新人二人に求めることができるだろうか？

「降下を開始しろ。ゆっくりでいい」

門田機が機首を下げ、吹流しに向かって突進していく。

黒間は門田が見えているものを想像した。

下方に練習機があり、細いワイヤーで曳航される吹流しがある。その下方には雪解けの大地があった。大地は彼方にあり鮮明な地図でも見ているな印象を与える。

光像式照準器の円環の中心に吹流しがあり、オレンジ色の豆電球の灯りに染まっている。

機の加速度と重力でずれそうになり照準を補正しながら、門田は黒間の射撃命令を待っている。

だが、まだまだ遠い。

「撃ってよし！」

黒間が射撃を命じたのは、殆どすれ違い様同然だった。

射撃時間はごく僅かだった。しかし、徹底した近接射撃によって、吹流しは穴だらけになった。

射撃を終えた門田機が標的の下方に抜け、編隊に戻ってくる。

「門田。今の感覚を忘れるな」

篠原は褒めはしなかったが、満更でもない調子だった。

黒間は無線に乗らないように注意深く安堵の溜息をした。

地上に戻って機を整備兵に預けるとパイロットは集合して篠原の講評を受ける。

はずだったが、中隊事務室からやってきた週番下士官が恐ろしい顔をして篠原を連れて行ったので、訓練の講評は黒間が行った。

さらに、訓練の結果と各個の反省を文書で提出することが求められていた。

訓練の結果や反省点を書面に書き起こすのは、自己客観視するためだ

それを確認して添削して返すのも黒間の仕事だった。

よって、戦闘機部隊であってもそれなりに事務仕事は発生する。

小隊員を解放した黒間が直ぐに事務机に向かったのはその為だ。

各員の飛行時間や訓練の結果も纏めて文書で提出する必要がある。

戦争をやっていても、やっていなくても軍隊とは巨大な官僚組織だった。紙がなければ何も進まない。

昔、ＮＨＫで見た歴史教養番組では、中国における紙の発明が大軍の編成を可能とし、戦争の大規模化と巨大な中華王朝を誕生させ

たと解説していたことがあった。
さもありなんと黒間は思った。
部下から上がってきた報告書に一枚一枚、丁寧に講評を加えながら黒間は欠伸を噛み殺す。
こうした仕事の退屈さは古代人も現代人も同じだ。
軍隊生活の大半がこうした退屈な時間の中にあることを娑婆の人間はどれだけ知っているのだろうか。
華々しさだけを強調されがちな戦闘機パイロットでさえ、年間の飛行時間は２００時間程度に過ぎず、それ以外の時間は全て地上で過ごしているのだ。
１年は３６５日、８，７６０時間ある。空を飛んでいる時間はその内の数％しかない。
その数％があるからこそ、このような退屈にも耐えられるのだ。

「クロ。ちょっといいか？」
「ダメです」

黒間は篠原の呼ぶ声を顔も上げずに却下した。
淡々と報告書に自分の検印を押して、決裁板に閉じていく。

「お前、上官を上官だと思ってないな？」
「中隊長殿。手が止まっています」

竹刀を持った週番下士官が冷たい声で言った。
篠原が絶望的な顔をして書類に向き直る。
どんな理屈をつけても退屈に耐えられない人間もこの世に確かに存在するのだ。例えば、彼のように。

「決裁をお願いします」

黒間は確認が終わった報告書を篠原の事務机に置いた。
決裁受けのトレーには似たような決裁板の束が３０ｃｍは積もっていた。これだけ決裁未済文書が溜まることも珍しい。
幾つかの書類は、起案日が先週のものもあった。流石にこれはマズイだろうと思う。どれだけサボればこんなことになるのだろうか。

「俺、書類を見ると蕁麻疹が出て気を失いそうになる病気なんだよ」
「そうですか、お大事に」

そっけなく黒間は答え、週番下士官に軽く会釈をして黒間は中隊事務室を退室した。
事務仕事ですっかり肩が凝ってしまった。
酒保に行って煙草でも吸おうかと思ったが、黒間の足は格納庫に向かっていた。
ハルビン飛行場の格納庫はクレーン等の近代的な設備を持ってい て、帝国空軍が保有する全ての飛行機が収容可能な広さがあった。
もっとも、整備が終わった機体は外の掩体壕に移されるので、作業がないときはガランとしている。
場合によっては昼食後の運動にバレーボール等をしていることもあった。冬場は特にそういう使い方をされることが多い。

「クロ、どうしたんだ？何か用か？」

鏡のように磨き上げられた禿頭の相原大尉が目ざとく黒間を見つけて言った。

「見学してもいいですか？」
「別に構わないが、機材に触るなよ」

黒間はもちろんと頷いてクレーンに吊るされた整備中の零式戦闘機を見た。
機体からエンジンが外されて、台車の上に載せられている。
そのエンジンは水冷式だった。
黒間はカウリングを外され、補機類が剥き出しになったエンジンをしげしげと見つめた。

「どうした?」
「いえ、珍しいなと思いまして」
「そうか?」

相原は僅かに首をかしげたが、そうしたいのは黒間の方だった。
黒間は自分が知っている零戦とは似ても似つかない零式戦闘機を見つめた。ちなみに、この戦闘機に「艦上」はつかない。この零戦は陸上用戦闘機だった。
まずエンジンからして空冷でないことから機体が与える印象が違った。
機体の線は非常に繊細でスマートに作られていて、如何にも日本風だ。しかし、黒間の知っている他のどんな戦闘機にも似ていなかった。
かなり強引だが、前世の大戦末期に本土防空戦で見かけた海軍航空隊の局地戦闘機の雷電がダイエットに成功した風に見えるのかもしれない。或いは零戦と雷電を足して2で割った風か。風防の形式は雷電によく似ていた。涙滴型ではなく、機体に一体化したタイプだ。しかし、後方視界は見た目ほど悪くないと言われていた。どのみち、どんな風防をつけようと真後ろは見えない。
この戦闘機が部隊に配備されたのは2週間ほど前のことだ。
今のところ1個小隊分、4機しかない。飛行大隊の大隊本部隊が使っているだけだ。生産数が少ないのか、他に何か理由があるのか、実際のところはよく分からない。

真新しい機体だけあって、最初は注目の的だった。
しかし、2週間もすると物珍しさも薄れてくる。逆に欠点や欠陥の方に目が行く事もある。
この見たこともない零戦も故障が頻発することから、最近は大隊本部でも持て余していると聞いていた。

「エンジンの故障ですか？」
「そうだ・・・５０時間も回らないとはね。愛国心が足りないんじゃないのか？」

苛立たしげに相原が言った。

「三菱のヒスパノ・エンジンがダメなんだ」
「何がダメなんですか？」
「クランクシャフトや軸受の強度不足。オイル・ポンプの容量不足。いいところを探すのが難しいな」

オイルで真っ黒になった部品を相原は手にとってみせた。

「見ろ。軸受が焼き付いて摩滅している。強度が足りないんだ」

その様子が豚か牛を解体して臓物を観察しているように見えて、黒間はグロテスクなものを見た気分になる。

「２０ｍｍ機関砲もまともに動かない。酷いもんだ」

黒間はエンジンから外された機関砲を見た。
新型の２０ｍｍ機関砲だ。砲身が２ｍ近くある。長砲身砲だった。高初速で弾丸を撃ちだすことができる。零戦はこれを中空のエンジンクランクシャフト内に砲身を通してプロペラスピナーから発射す

る。
　所謂、モーターカノンだ。
　ヒスパノ・スイザ２０ｍｍ機関砲。制式には９９式２０ミリ機関砲という。ヒ式機関砲と呼ぶことが多い。
　この見たこともない零戦は、ヒ式機関砲を機首に１門装備していた。他に、九八式固定機関銃が機首２丁、主翼２丁。合計４丁装備である。これは九七式戦闘機改と同じだ。２０ｍｍ機関砲の装備で、火力は飛躍的に向上していた。ただし、モーターカノンがまともに作動しないのが問題だった。

「初期不良は新兵器にはつきものでしょう？」
「そうだといいんだが。三菱の水冷エンジンは、昔から不安定だからなぁ。いっそ、エンジンはもう全部東亜重工につくってもらえばいいんじゃないか？」
「自分は、そんなに悪くないと思いますよ。これ」
　黒間は、見たこともない零戦を改めて見なおした。
　横からは葉巻のように見える胴体だが、前から見ると思った以上にスラっと細い。主翼も薄く小さく作られていた。前世で飛ばしたことがある二式単戦と良い勝負ができるかもしれない。ラジエーターやオイルクーラーを胴体下面に埋め込むように配置して、少しでも空気抵抗を抑える腐心も伺える。他にも如何にも高速で飛ぶことを目的とした意趣があちこちに散りばめられていた。
　おかげで高度６，０００ｍで３１０ｋｔは出る。
　水冷１２気筒１，０００馬力エンジンを装備した戦闘機としては存分に速いと思う。

「そんなに気に入ったなら、飛ばしてみるか？」
「いいんですか？」
「エンジンがオーバーホールが終わったあとの試験飛行でよければ

な、戦闘機動はするなよ」

黒間は深く頷いた。

翌々日、エンジンのオーバーホールが終わった零戦が格納庫から引き出された。

天気は悪くなかった。雲量は3か、2といったところ。快晴だ。朝陽を浴びて、零戦の灰白色の塗装に温かみが宿る。

そうするとペコンだの、パコンだのというあまり聞きたくない金属音がするので、黒間は微妙な顔をした。冷たいステンレスの流し台にカップ焼きソバの茹で汁を捨てた時に出る時の音に近い。

金属応力外皮構造というものはそういうものだと知っていてもあまりいい気分はしなかった。

「気にするな。こいつの外板強度は１２Ｇもあるんだ。急降下で４５０ｋｔ出してもびくともしない」

何故か焦ったように相原が言うのでおかしかった。

「大丈夫。分かってますよ」

「ならいいんだが、操作説明書は読んだよな？」

黒間は頷き返し、説明書を相原に返した。

説明書はコンパクトな文庫本サイズで、ポップな文体とイラストがプリントされていた。表題は「俺の零戦がこんなに可愛いわけがない」。擬人化され何故か実妹になっている零戦とパイロットの兄

が、妹のいかがわしい趣味を基軸に幼馴染の少女や学友達とドタバタコメディを繰り広げるストーリーを通して、零戦の操縦法を学ぶ内容になっている。

意図的に表情を消し去った黒間の顔を見て、相原は言った。

「前にも言ったかもしれないがもう一度言っておくぞ。これは俺が書いわたわけじゃない」

酷く真面目な顔をして、黒間は頷いた。

説明書の代わりに相原から飛行帽を受け取り、黒間はコクピットに滑り込んだ。

ざっと操縦席を見渡す。

各種計器の配置は九七式戦改とはかなり違った。九七式戦の製造元は中島飛行機だが、零式戦闘機は三菱だった。企業文化の違いだろうか、中島飛行機に比べて三菱の方が作りがしっかりして、高級感があるように思える。

それとも九七式戦と世代の違いがあるのか。計器パネルが全体的に見易い。

コクピット内部は、決して広いわけではないが適度に空間があり、座席にゆったりと座ることができる。座席のつくりは、明らかに九七式戦よりも上で、増槽込みで２，０００ｋｍ飛べる長距離飛行での疲労軽減を意図していることが分かる。

全体的に細い紡錘体のような機体だが、もっとも直径がある部分をコクピットに充てているようだった。しかし、視界が悪くない。水冷エンジンの特有の細く長い機首は地上駐機時には正面の視界を塞いでいるが、正面の左右は空けていてちゃんと前は見える。

風防の枠が多いのが多少気になるが、視界は十分だ。

しかし、正面はやはり見えないので地上では不便だ。これは水冷エンジン機なら仕方がないことだった。機体設計の巧緻は関係ない。

「座席の右側に配電盤がある。ブレーカーをあげろ」

黒間は言われたとおりにした。

配電盤も九七式戦改に比べてスイッチ類が増えていた。装備している電子部品の数が増えているからだ。長距離飛行用の電波方向指示器まで備えている。

「電圧計でバッテリーがちゃんと充電されているか確認したら、ラジエーターフラップを全開にして、セルモーターの作動スイッチを押せ」

零戦のエンジン始動には、起動車もエナーシャも必要なかった。セルモーターを使って、ボタン一つで自動的にエンジンがかかる。

エナーシャにクランク棒を突っ込んで苦労して回す時代は終わったのだ。

乾いた咳払いのような作動音がして、ペラが回り始める。

あっけなくエンジンスタートに成功したことに黒間が軽い感動を覚えた。

何しろ、それまでの戦闘機というものはエンジンの始動一つとってもエナーシャを回すために重いクランク棒を回したり、トラックを改造した起動車を呼んだりと手間暇がかかったものなのだ。

もちろん、そうした手間暇をかけている間に敵が来たら地上撃破される。

ノモンハンではエンジン始動中にＩ－１６の機銃掃射を受けて地上で撃破された機も多い。飛行前だからガソリンを満載していて、銃撃されると景気良く燃える。

「エンジンの調子はいいみたいだ！」

回るプロペラの唸りに負けないように黒間は怒鳴る。

「当たり前だ。俺の整備は完璧だからな！」

負けずに相原が怒鳴り返した。

それからしばらくペラを回し、スロットルを押したり引いたりしてエンジンのテストをした。

相原は取扱説明書やチェックリストを片手に、コクピットに顔を突っ込んで計器を読んでいた。未だに信頼性が定かではないエンジンはベテランの整備兵にも細心の注意を払わせる。

癇癪の酷い手のかかる子供のようなものだ。

しかし、どれほど手がかかると言っても放り出すようなことはできない。使えるようにするのが、相原の仕事だった。

軍用機のエンジンは設計し、製造して、軍の審査をパスして終わるものではなかった。熟成させ、信頼性を確立するのに年単位の時間がかかる。最初から何のトラブルを起こさないエンジンなどただ一つも存在しないのだ。

「よし、飛ばしてみよう」

ひと通りの検査を終えるまでに、たっぷり３０分はかかった。

黒間は一秒で早く飛んでみたかったので、いい加減にウンザリしていた。

「クドいかもしれんが言っておくぞ。絶対に宙返りとかするなよ」

「分かってますよ」

黒間はこの零戦の飛行資格をもっていない。

規則違反もいいところだ。しかし、それなりに零戦の飛行特性には検討がついている。飛行に不安はあまり感じない。前世の記憶があることが幸いした。複数の機種を乗り換えて戦ったことから、機

種転換のコツのようなものを掴んでいるのだ。

この零戦の飛行感覚は、おそらく前世で飛ばした二式単戦と四式戦の中間か、四式戦に寄った感じではないだろうかと思う。

取扱説明書にあったこの零戦の離着陸の速度は四式戦にかなり近いものだ。

離着陸の速度はその機体のもつ揚力と密接に関係する。

揚力が大きければ大きいほど低速で飛べる。つまり離着陸速度が低くなる。揚力が小さい場合はその逆になる。

ただし、揚力が大きいと空気抵抗も大きくなるので揚力の確保は速度性能とトレードオフの関係だ。飛行機の設計技術というものは、概ねこの矛盾した2つの必須要素を同時に満たす方法論の開拓によって進歩してきたと言っても過言ではない。

この零戦の離陸速度は、四式戦に近いことから重戦型の戦闘機であろうことが分かる。それなら飛ばせる自信はあった。

ただし、水冷エンジン機なので過信は禁物である。前世で水冷エンジン機を装備した機は三式戦があったが、あれを飛ばした経験はない。

黒間はエンジンを絞りつつ、機を滑走路に向けた。

誘導路を回りつつラダーやエレベーター、エルロンを動かして動作確認する。動翼の操縦系は軽い。これは隼や二式単戦と同じだった。

四式戦は操縦系は重かった。渾身の力を込めないと曲がらない。アレではダメだと黒間は思った。ほんの小さな力でも、大胆に反応しなければいけない。戦闘機の操縦はピアノ演奏のように打てば大き響く繊細さが必要だ。

もっとも、黒間はピアノの演奏などしたことはなかったけれど。

滑走路まで来て、黒間はフラップを下げた。フラップは油圧式。

黒間はフラップが確実に下がったことを目視してから、スロットルを一杯に押し込んだ。ブレーキ解除。機体が弾かれたように走りだす。

三菱ヒスパノ・エンジンが離陸馬力を発揮し、直径３ｍのプロペラを回す。高ピッチプロペラ独特の鈍い響きが耳朶を打つ。

機体が反トルクで、曲がろうとする。あまり強くはない。軽くラダーで当て舵をすると真っ直ぐに走るようになった。

機体の反トルクは思ったほど強くなかった。おそらく尾翼を僅かに傾けてあるのが効いているのだろう。零戦は反トルク対策に尾翼を３度ほど傾けて取り付けていた。

これを取扱説明書では、零戦を擬人化する際にアホ毛として視覚化していた。

何がどうアホなのかは不明だ。しかし、アホ毛のお陰で格段に操縦しやすい。

黒間が余計なことを考えている間に機尾が浮いた。

黒間はそのまま滑走を続ける。操縦桿を引けば離陸できるが、何もせず機体が自然に浮くまで待つ。滑走路は２，０００ｍもある。重爆が余裕をもって降りられる長さがあった。焦って離陸する必要はない。どれくらいで機体が自然に離陸できるのか確認する意味もあった。

滑走路を４分の１残して、足元から抵抗が消える。

主脚が大地から離れたのだ。機体の自重が主翼に集まるのを黒間は感覚した。ここからは揚力が機体を支える。

滑走路の端を越えるころには、高度が２０ｍ程度あった。

操縦桿を軽く引いて、高度を取りつつスロットルを緩める。念のために水温と湯温を確認したが、許容範囲内だった。

極々自然に機は空にあった。ふわりと浮くような、非常に軽やかな飛行だ。

黒間は主脚引き込みレバーを引いて、主脚を格納した。これは固定脚の九七式戦改にはない。主脚を格納するだけで速力があがった。続けてフラップを収納する。機体が僅かに沈むが、速力が上がると高度も回復した。

冷却水やオイルが冷え過ぎないようにラジエターフラップを絞る。

零戦は旋回しつつ高度を取る。眼下の風景が少しずつ小さく遠くなっていく。反比例に視界が開け、遠い雪のこる山岳までが小さく明瞭に捉えられる。

コクピットの視界を確認し、前方視界の良さに黒間は目を細める。低層の雲が黒間の目線と同じ高さまで来て、直ぐに流れ去っていく。真っさらな純度の高い青空だった。黒間は冷たい乾いた空気を吸い込んで笑みを強くした。

「・・・いいじゃないか」

黒間はＯＰＬ型照準器のスイッチを入れた。

ここまで来て機関銃の試射ができないのは如何にも残念だった。

黒間は照準器のクロスヘアの中心に敵機の後ろ姿を夢想する。その機体はＩ－１６であり、Ｉ－１５であり、ＳＢ爆撃機だった。次にＰ－４０やハリケーン、バッファロー、ビューファイターが現れた。スピットファイア、Ｐ－４７やＰ－５１、Ｆ６Ｆ、コルセアが現れて消えた。

黒間はそいつらを１機残らず空想の中で叩き落としてやった。

総選挙

１９４０年７月１５日

一日の課業が終わり、夕食から消灯までの自由時間に黒間以蔵は新聞を読んでいた。

内地の新聞ではなく満州国の新聞だ。名前はハルビン新報という。満州国内の日本人向けに発行されている新聞で、会社は満鉄の系列である。

取り扱っている記事はハルビン周辺のローカルな話題が殆どで海外記事は多くない。内地に関わる記事も通り一遍の話ばかりで内容がない。大手の新聞社の記事をそのまま丸写ししていることもしばしばある。魅力は購読料の安さぐらいだった。

しかし、内地の新聞は一般に購読料が高いので、経費節減が叫ばれる昨今の事情を勘案すると酒保にこれしか新聞がないのも止む得ないことかもしれない。

「そんなもん読んで楽しいか？」

半裸でサイダーを飲みながら斎田三矢が言った。

この男は極端に暑がりなところがあり、少しでも暑くなると途端に肌の露出率があがる。これが美女なら大歓迎だが、野郎の裸には用がない。

見ていても虚しくなるばかりである。

「あんまり楽しいことは書いてないな」

黒間も自分のサイダーを呷る。

新聞を畳んで窓辺に目をやると虫の声が聞こえた。
氷都と呼ばれるハルビンにも夏はやってくる。夏といっても内地ほど暑くはない。気温も３０度を越えることはなかった。２５度が上限で、真夏でも夜に寝苦しいということは殆ど無い。
しかし、サイダーはキンキンに冷えている。これは夏だろうと冬だろうと同じだった。これは有り難かった。
黒間にはこの世に幾つか絶対に許容できないものがあるが、ぬるいサイダーというのはその中でも最右翼に位置する。

「内地で選挙があったそうだ」
「そうなのか。で、それがどうしたんだ？」

俺には関係ないと斎田の顔には書いてあった。
或いは関係に気付いていないだけかもしれなかった。どちらかと言えば、後者の方が正解だろう。
前世なら、黒間も同じ顔をしていただろう。選挙など自分には関係のない話なのだ。そもそも戦前の普通選挙制度下においては、選挙権は２５歳以上の男子のみ与えられるものだった。
今の黒間には選挙権はない。投票に行くこともできないのだ。
国防という国家の一大事に身命を捧げている人間に何故選挙権が認められないのかは不明だが、とにかく今の黒間には選挙権がなかった。
つまり選挙でどの党がどれだけ議席を得たところで関わりのないことだった。少なくとも前世では。

「今度の選挙で、立憲政友会が大勝利して議席の３分の２を確保したそうだ」
「ふーん。それがどうかしたのか？」
「政友会は、ドイツとの同盟を結びたがっている」

立憲政友会の鳩山一郎内閣が帝国議会を解散したのが、3週間程前のことだった。

ちょうどナチス・ドイツが西部戦線で大勝利して、パリが無防備都市宣言を出した頃だ。2度目の人生でもドイツの電撃戦は黒間の知っている歴史どおりに展開し、フランス軍は呆気無く崩壊してしまった。

そして、「バスに乗り遅れるな」の掛け声と共に日本がドイツとの軍事同盟に進んでいくのも黒間が知っているとおりだった。

いや、この表現は正しくない。

正しくは、軍事同盟の再締結に進むだ。日独は、防共協定という軍事同盟を既に結んでいる。ただし、それは独ソ不可侵条約で事実上、ドイツから一方的に破棄された。しかも、日本がノモンハンでソ連と武力衝突している最中に、だ。

このような裏切りを行う国家と再び軍事同盟を結ぶことに何の意味があるのかは不明である。国家に真の友人はいないけれど、国際的な信用というのは相応の意味があった。

黒間は何かの間違いでドイツが電撃戦に失敗して、戦争が泥沼になることを期待していた。

というよりも、ドイツがあんな勝ち方をすると予想している人間など殆どいなかった。次の戦争も第一次世界大戦と同じく長期戦になるだろうと誰もが予想していたのだ。

フランスは西欧の大国だった。イギリスに次ぐ広大な植民地を持ち、第一次世界大戦を闘いぬき最後の勝利を掴んだ実績もある。

確かにドイツ軍は強力かもしれない。東欧の大国ポーランドを1ヶ月足らずで屈服させた。しかし、それはソ連軍との挟撃があったからで、フランスはポーランドとは違う。それが常識というものだった。

しかし、その常識が覆ってしまった。

日本の世論が狂ったようにドイツやヒトラーを持ち上げるようになるのはこの頃からだ。

もちろん、ノモンハン事件の最中に独ソ不可侵条約を結ぶような裏切りをドイツが働いたことなど綺麗に忘れ去られている。

或いは、忘れたフリをしているのか。

どちらにせよ、日本の世論というものがドイツの勝利にすっかり幻惑されているのは確かだった。

ドイツの勝利が確定する前に勝ち馬に乗れという調子のいい意見が世論の大勢になったとき、ドイツとの同盟か否かを掲げて選挙を行えば、どうなるかはっきりしている。

政友会は結党以来の空前絶後の勝利を収めた。

しかし、黒間は知っている。これは自殺行為以外の何者でもないことを。

「そういえばこいつ、あの宇宙人の祖父だっけな」

黒間は前世で政権交代を掲げた選挙で空前絶後の勝利を収めた後で、戦後史上最悪と罵倒され退陣した内閣総理大臣の顔を思い浮かべた。名前はなんと言っただろうか？記憶するのも気分が悪い。しかし、顔はよく覚えている。一目見ただけで無能と分かる顔をしていた。

新聞に載る現内閣総理大臣の顔とはあまり似ていない。

しかし、やっていることはよく似ていた。

選挙の勝ち方も似ている。そして、おそらくその結末も瓜二つなのではないかと予想した。

「宇宙人って何の話だ？」

「新しい総理のことだ。何を考えているのか分からん」

ふむん、と斎田は新聞の写真をまじまじと見た。

「そうか？」

「そうだよ。ドイツとの同盟なんて冗談じゃない。ヒトラーの戦争に巻き添えを食らうだけだ」
「でも、選挙で決まったならしょうがないだろ」

黒間は言葉に詰まった。

全くそのとおりだったからだ。政友会が選挙で３０８議席も獲得したのは、民意の後押しがあればこそだった。

皮肉な話である。日中戦争もなく、軍部の暴走もない（２・２６事件も５・１５事件も黒間が調べたかぎりはおきていない）というのに、日本は民意の後押しで戦争への坂道を転げ落ちていく。

戦時中の悪名高い翼賛選挙でもない、憲政の常道に基づく選挙の結果がこれだった。これなら軍国主義の方がまだマシというものだった。

少なくとも、軍部が悪かったと後から言い訳できる。

「イギリスとドイツ、どっちが勝つと思う？」

黒間はこの程始まったドイツ空軍の英国本土爆撃を伝える記事を斎田に見せた。

後に、バトル・オブ・ブリテンと知られることになる英国本土航空戦だ。この戦いにドイツは敗退し、ヒトラーは英国本土攻略を諦める。

それが黒間の知っている歴史だった。

「そんなこと分からんよ」

意外なことに斎田は、ドイツとは答えなかった。

この質問をすると大抵の人間はドイツと答える。慎重なタイプが少しだけ分からないと答え、へそ曲がりだけがイギリスと答える。

前世でもそうだった。

「クロはどっちが勝つと思う?」
「イギリスだと思う」

黒間が知っているのは概要程度だったが、イギリス空軍が初期的なレーダーを有効活用してドイツ空軍を散々に痛めつけたことは知っていた。

所謂、地上迎撃管制システムの萌芽だ。レーダーによる早期警戒と位置測定、無線通信機を組み合わせて、地上の指揮所から戦闘機部隊を誘導し、効果的な迎撃戦闘を行う。

ＲＡＦ（イギリス空軍）が導入していたチェイン・ホーム・レーダーは後年に登場したレーダーに比べれば距離、方位分解能は全く話にならにほど劣っていたが、それ等から得られる情報を一元化し、空中戦を”管制”しようという発想は画期的だった。

そして情報の一元化には、情報の蓄積と解析が必要不可欠であり、高速で推移する航空戦では、その処理速度が戦闘の結果に直結する。それと同時に処理された情報をそれが必要な場所へ高速に移動させる或いは、相互に行き来させる高速大容量の通信網がシステムの要だった。

つまり、高速情報処理のためにコンピュータとそれを繋ぐネットワークの発展し、冷戦の最中に後に世界を革命することになるインターネットワークが生まれるのだが、それはまた別の話だった。

「お前、競馬でいつも大穴とか狙うタイプだろ」
「そんなんじゃねぇよ」
「じゃあ、どうしてイギリスが勝つと思った?」

黒間は答えていいものか少し迷った。

あまり詳しいことを話して変な噂がたったら困る。憲兵に睨まれるような真似は避けたかった。

「そうだな・・・イギリスは自分の庭で戦うわけだろ？撃墜されてもパイロットが生きていれば直ぐに復帰できる。だが、ドイツのパイロットは脱出しても捕虜になるだけだ」

「その前にドイツが押し切るんじゃないか？」

「イギリスはフランスとは違う。簡単に諦めたりしない。ジョンブルの伝統がある。それにイギリス海軍も無傷で残っている。ドイツがドーバー海峡を渡れるとは思えない」

それもそうだな、と斎田は頷いた。

世界三大海軍のイギリス海軍が健在である限り、ドイツがドーバー海峡を渡るのは不可能だ。制海権が取れなくては、ドーバー海峡は渡れない。

トラファルガーの海戦やネルソン提督の例を持ち出すまでもなかった。子供でも分かることだ。戦車は海を渡れない。

ヨーロッパ最強の大陸軍を率いたナポレオンは海峡を半日でも霧が閉ざしてくれれば世界を変えて見せると言ったらしいが、霧にまぎれて海峡を渡ったところで帰り道を失って全滅するだけだろう。皇帝になる前にナポレオンはエジプトに渡海遠征しているが、イギリス海軍に帰り道を塞がれ散々な失敗に終わっている。

歴史上唯一、イギリスを征服することができたのは、ユリウス・カエサル率いるローマ軍だけだ。カエサルは強力なローマ海軍で海峡の制海権を確保し、それを成功させた。

今のドイツ海軍にイギリス海軍を正面から打ち破る戦力がどこにもないことは誰もが知っていた。巡洋艦に追い立てられたポケット戦艦、アドミラル・グラーフ・シュペー号がウルグアイで自沈したことは日本でもマスコミで広く紹介されている。

そうしたことから、イギリスが航空戦に負けてもドイツが本土に上陸することはないという考え方もできる。上陸作戦の最中に、艦隊が突入してきたら目も当てられないことになるからだ。

「だったら、飛行機で戦艦を沈めてやればいい」

真っ赤な顔をして話に絡んできたのは島次郎だった。

海軍からの転籍組で、階級は二等航空兵曹（二空曹）だ。つまり、軍曹である。しかし、島の方が少し昇進が早い。そして、下士官室の同部屋だった。

かなり酔っているらしく目が座っている。やっかいな奴に絡まれたものだった。

「陸攻を飛ばして、戦艦ネルソン号の土手っ腹に魚雷をぶち込んでやるんだ」

陸攻とは帝国海軍が整備している陸上攻撃機のことである。

航空魚雷を搭載し、敵艦を雷撃するために作られている。これは黒間も何度か見たことがあった。前世の大戦でも見たことがあったし、ノモンハンに出動した九六式陸攻も見ている。

陸攻は日本海軍独特の兵器である。ワシントン・ロンドン海軍軍縮条約で平時の兵力量を制限された帝国海軍は、無制限の戦力である航空機で優勢な英米海軍に対抗しようとした。それが結果として時代を先取りする形になり、マレー沖海戦の大勝に繋がった。

ただし、前世の大戦末期には防弾皆無の無理な設計が祟り、出撃するたびに壊滅的な損害を被った。

あまりにも簡単に火を吹くのでワンショット・ライターなどという不名誉な2つ名を頂戴している。誤射ではあったが、火力が貧弱なことで定評がある隼戦闘機の一連射で火を噴くような脆い爆撃機だった。

実際、陸攻が生還するのは兵器の性能や技量ではなく運の要素が強く、陸攻で出撃し、3回雷撃して生き残った者はいないとされている。

「島軍曹は戦艦を飛行機が撃沈できると思う？」
「逆にできないと思う理由を知りたいね」
島の物言いは挑発的だった。
「浮沈艦なんて無いんだ。陸攻が四方八方から雷撃すれば、戦艦だって沈められるはずだ」
「そうだな」
黒間は深く頷いた。
前世でも陸攻は戦艦を撃沈している。マレー沖海戦だ。
もっとも、それをここで話すわけにもいかなかった。まだ、それは起きていないことだったし、できれば起きて欲しくないことだった。
「ま、ルフトヴァッフェのお手並み拝見ってところだな」
黒間は新聞に載ったゲーリング国家元帥のポートレイトを見てそう呟いた。写真はプロパガンダ映画のカットなのか、ゲーリングは元帥杖を片手に、厳しい表情の横顔を浮かべている。
それを見ていて黒間はあることに気がついた。
ゲーリングってこんなにスマートだっただろうか？
黒間はゲーリングが麻薬中毒患者で、かなりの肥満であることは何かの雑誌で読んで覚えていた。
しかし、新聞写真のゲーリングは、かなりスマートで、どちらかと言えば痩せぎすな感じだった。

「どうしたんだ?」
「いや、なんでもない。気のせいだ」

写真なら幾らでも修正できる。
それにゲーリングが肥満であろうとなかろうと、そんなことはどうでもいいことだった。

「俺はドイツが勝つと思うぜ」

もう一人、酔漢が話に絡んできた。
佐権力軍曹だ。島次郎と同じ海軍から転籍組だった。元の階級は、二等航空兵曹（二空曹）だ。昇進はやはり佐権の方が黒間よりも早い。やはり、下士官室の同部屋だった。

「飲み過ぎじゃない?」
「ダイジョブ。自分を信じて!」

大丈夫という酔っぱらいが大丈夫だったことは古今例がない。
かなり酷く酔っていた。目が泳いでいる。
島と佐権は海軍からの転籍組で、二人でよくつるんで飲んでいた。二人ともかなりの酒好きだった。島は強肝臓の持ち主だったが、佐権は下戸だった。下手の横好きで、大抵は酔いつぶれて寝ている。
飲んでいるのに佐権が起きているなんて、かなり珍しいことだった。

「ドイツにはウラル重爆がある」
「ウラル重爆?」

無言で左権が頷くと、ちょっと待ってろと席を立った。

「便所かな？」
「さぁ？」
しばらくすると佐権が戻ってきて、一冊の雑誌を広げた。
「こいつだ。ウラル重爆撃機。ユンカース８９、４発重爆撃機だ。これらからはこういう飛行機の時代だよ」
モノクロ写真に封じ込められたジェラルミン製の怪鳥は鉄十字のマークをつけた大型爆撃機だった。
巨大な主翼と太く括れた胴体が印象的な大型機だ。胴回りは九七式重爆よりも二回りは大きい。下から映した機体のフォルムは、どことなくシロナガスクジラのように見えなくもなかった。鰹節のように突き出た機首が印象的である。
どこか垢抜けないイメージだった。前世大戦末期に本土上空で遭遇したＢ－２９に比べるとレトロチックといった体だが、それが却って得も言えぬ迫力を醸しているのかもしれない。
そうした機体が滑走路か駐機所と思しきところに何十機と並んでいる。写真に写っていないだけで、おそらくもっと沢山の機があるのではないかと思われた。
掲載写真はどこかの軍事基地内部を映した写真ばかりだった。写っている兵隊は、おそらく全てドイツ兵だ。飛行機の整備作業や、喫煙中の寛いだ表情のワンショット。離陸するメッサーシュミット戦闘機や無線機の前に陣取る通信兵の写真までであった。
黒間は雑誌を読み進めてあることに気付いた。写真のアングルが、どうも隠し撮りの体なのだ。
裏を返して表紙を確認するとタイトルは、第二通信（2ちゃんねる）とある。
「これ、憲兵が回収してる発禁の雑誌なんじゃ・・・」
「細かいことはいいんだよ」

よくないと思ったが、黒間は黙っておくことにした。

「戦艦も空母も、戦車も何もかも時代遅れだ。これからは４発重爆が、敵国を直接爆撃することで、地上戦も海戦もなく勝敗が決する時代だ」

「戦略爆撃か」

「ああ、そうそう。それだよ、それ。日本にもこういう重爆が必要なんだ」

黒間は肯定と否定の言葉を同時に思いついた。

肯定するのは簡単だった。自分には身に覚えがある。前世の大戦末期の本土空襲だ。Ｂ－２９戦略爆撃機の攻撃で日本は焦土と化した。

今でも瞼の裏に焼き付いているのは、爆撃を受けて炎上する日本の大都市だ。高高度精密爆撃から夜間低空無差別爆撃に切り替えたＢ－２９が投下する集束焼夷弾は木と紙で作られたの本の街をいとも容易く灰にしていった。そこに住んでいる何の罪もない人々と一緒に。

炎上する街が夜空を赤々と照らし、悲鳴と怒号が耳朶を打った。真昼のように明るい街から、焼け出された人々の群れが暗い方へ暗い方へ逃げていくのが見えた。

翌日、火が収まって街に戻ると風景は一変し、真っ黒な焦土と街だったものの残骸だけが残っている。木造家屋は跡形も無いし、鉄筋コンクリートの建物は煤で真っ黒になり、朝になってもまだコンクリートに昨夜の熱を蓄えている。

そして、沢山の捻くれた誰のものとのしれない焼死体を片付ける仕事が始まるのだ。

最後はヒロシマ、ナガサキだった。

「どうしたんだ？クロ」
「なんでもない」

少し顔に出ていたらしい。
黒間は軽い頭痛を覚える。血圧が上がり、顔が浮腫んだ気がする。
冷静さを求めて、黒間は冷たいサイダーを煽った。
まだ、それは起きていないことだ。回避できる可能性はゼロではない。

「ウラル重爆で、イギリスの生産基地を片っ端から爆撃する。ロンドンはブリテン島南部にあるから、爆撃の射程距離圏内だ。チャーチルがどんなに頑張ったって、工場が殺られて武器が作れなくなったら戦争はオシマイだ。年内に戦争はドイツの勝利で終わる。イギリス海軍が無傷で残っていたって、何の意味もない」
「意味ないって、アンタ、ほんとに元海軍かよ」

斎田が呆れたように言った。

「俺が海軍に入ったのは飛行機が飛ばせるからだ。お船に興味はないね」
「だったら、陸軍でもよかったじゃないか」
「試験に落ちたんだよ」

佐権はバツが悪そうに言った。

「問題は、戦闘機だ。イギリス空軍の戦闘機が全滅しない限り、本土爆撃も本土上陸も絵に描いた餅だ。イギリスにはスピットファイアがある」

黒間は前世でスピットファイアと対戦したことがあった。

１９４３年の乾季のビルマ戦線だった。場所は確か、ラングーンだったと思う。

偵察機の護衛に出撃した隼?型で、相手はスピットファイアだ。ハリケーンやＰ－４０との対戦はあったが、スピットファイアとの対戦はそれが初見だった。

機影は、識別表に乗っていた標本と全く同じだったと思う。我が国の諜報機関は大変優秀であると場違いなことを考えてしまった。

その頃の自分は、戦慣れした一端のパイロットになっており、戦闘の最中にも余計なことを考える余裕があった。

スピットファイアの第一印象は、例えるなら肉厚なナイフのような飛行機だった。石を研いで作ったナイフ型の石器のような。無骨だとか、質実剛健とは言うよりも、滑らかな鈍さが際立つ機影だ。ただし、動きは見かけほど鈍くもないし、想像よりもずっと滑らかだった。

味方は3機、敵機は４機。同高度からの反航行戦だった。

戦果は撃墜2、撃破1。味方の損害はゼロだった。相手が格闘戦に付き合ってくれたからだ。上空から一撃離脱されたらあんなにも簡単にはいかなかっただろう。

スピットファイアが隼相手に格闘戦を仕掛けてくることはその後もしばしばあり、彼らが隼相手に格闘戦を仕掛ける愚を悟るまでの間は比較的楽な戦いができた。

だが、メッサーシュミット相手ならどうだろうか。

「そうだよな。問題はそこだ」

それから黒間達はしばし沈黙した。

戦闘機こそ、彼らの商売であり生活そのものだったからだ。

ドイツやイギリスの同業者がどんな気持ちで戦っているのか、推し量ることができる。そして、その推測はおそらく間違っていない。

期待と不安。我こそはという戦闘機パイロット特有のプライド。

墜落、失墜の恐怖。空戦が齎す麻薬にも似た猛烈な射幸感。一度味わってしまったら、地上での生活はぬるま湯のように思えてくる。

ノモンハンのような、全滅するか、させられるか式の徹底した戦闘をくぐり抜けた後でさえ、黒間は敵パイロットへの交感を失っていない。

同じ悪い遊びを楽しむ仲間意識がある。

ノモンハンの戦いは所詮は、局地戦だ。ドイツとイギリスの戦いは国家存亡を賭けた全面戦争である。その渦中に身をおいている同業者が、今どんな気持ちで戦っているのか。

「考えてもしょうがない」

斎田がぼそっと言った。

そのとおりだった。戦場はユーラシア大陸の西果てにある。

「どうせ直ぐに結果はでるさ。ドイツが勝てば、秋口には戦争が終わる。イギリスが粘れば、延長戦だ。どっちにしても俺達の出番はまだまだ先の話だろうよ」

「出番なんて無い方がいいんだがな」

黒間はボヤいた。

日本に出番が回ってくるとすれば、同時にアメリカの出番も回ってくるはずだからだ。

翌日、飛行。

黒間は鳥になるため、飛行服を身にまとう。

季節は夏だったが、高度があがれば地上の熱気は消し飛ぶ。保温のために分厚い飛行服は必須装備だ。しかし、暑いものは暑い。額に流れ落ちる汗を絹製のスカーフで拭い、黒間はやぶにらみに熱気の漂う滑走路を見やる。

正午過ぎだった。

とてつもなく静かだ。暑さのせいか、それとも他に黒間の知り得ない理由でもあるのか、妙に静かだ。

「何やってんだ。早く来いよ」

久しぶりに二人で飛ぶ斎田がぶっきらぼうに言った。

「日が暮れるぜ」

「その方が涼しくなる」

黒間は買ったばかりのサングラスをかける。

「どうしたんだ?それ」

「日差しで目がやられそうだ。目は大切にしないとな」

大切に使えば一生使える。

格納庫には整備の済んだ零式戦闘機が2機。エンジンの暖気は済んでいる。

零式戦闘機は初期の故障が一段落して、数も20機程度に増えていた。しかし、大隊の全てを満たすほどの数はまだ無い。

生産性に重大な問題があるのか、それとも他に優先的に供給されているのか。或いは単純に予算の問題なのか、何れにせよ零式戦で飛べる日はあまり多くなかった。

ともかく貴重な時間を空費するのは避けたい。

黒間は整備兵の手を借りてさっさと機に乗り込むと結束バンドを

接続し、チョークを外してもらい、スロットルを開いて滑走路に向かった。

少しだけ視線が高くなり、視界が基地のフェンスを超えて基地を囲むトウモロコシ畑に届いた。

青々としたトウモロコシが背を高く太陽に向かって伸びている。それが地平線の向うまで果てしなく続いているのだ。

ハルビンの郊外な夏の風景だ。実に大陸的な夏である。

流れていく地上の風景を追いやって離陸。

急くようにエンジンをいからせて、地上から機体を引き剥がす。一度だけ後方を確認して、斎田がついてきているか確認する。

斎田の零式戦が、後下方に見えた。

黒間は機をバンクさせる。無線を使わなくてもそれだけで意味が通じる。

零式戦はハーフロールして、黒間は操縦桿を引く。骨格が遠心力で軋む。筋肉をパンプアップさせ、黒間はそれに耐える。

加速度と遠心力の合成値が航空力学とパイロットの本能による統制を受け、なめらかに機を右旋回させる。

黒間は進路を北にとって、高度を上げていった。

零式戦は九七式戦改よりも、遥かに優れた戦闘機だった。

とにかく速度が出るのが素晴らしい。機体の剛性の高さから安心して乱暴な操作ができる。九七式戦では空中分解するような急降下でもびくともしない。

ただし、小回りはあまり効かない。水平面での旋回戦は九七式戦とは勝負にならない。

ポイントは速度を維持することで、高速を維持していれば九七式戦よりも機敏に動ける。九七式戦の得意とする速度域では戦わないことができる。仮に九七式戦が得意とする水平面の旋回戦に巻き込まれても、スロットルを開けば加速して逃げられる。高度があれば急降下して離脱してもいい。

この戦闘機がもう少し早く実戦配備されていれば、ノモンハンで

あんな苦労はしなかっただろう。零式戦であれば、Ｉ－１６やＩ－１５を確実に捕捉、撃墜できただろう。

試しに黒間は空想の中でＩ－１６と戦ってみた。

退屈な国境監視飛行の暇つぶしにはちょうどいい。

黒間の想像の中で、Ｉ－１６は大抵の場合は劣位で空戦を始める。都合のいい想定というわけではなく、零式戦の過給器の２速設定高度が彼よりも高いというだけの話だ。

黒間は下方を見て、緑で覆われた山々の背景に仮想のＩ－１６編隊を配置してみた。３機編隊。寸胴なハエのように見える機影が３つ。

敵機は零式戦の接近にまだ気付いていない。降下しつつ増速して、４００ｋｔまで加速。照準器の真ん中に敵機を捉える。

操縦桿の機銃発射トリガーは２種類にある。２０ｍｍ機関砲１門と７．９２ｍｍ機銃が４丁。同時発射も可能だった。

２０ｍｍ機関砲用のトリガーに指を掛け、照準器の円環から敵機の主翼がはみ出た瞬間に引いた。

２０Ｘ１１０弾、１３０ｇの炸裂弾が秒速８８０ｍでＩ－１６の胴体に突き刺さり、爆ぜる。敵機に大穴が空き、主翼が千切れて飛ぶ。錐揉み状態で敵機が墜落する。

零式戦はそのまま下方に離脱。もう一機も列機が始末した。

残りは１機。不利を悟った残敵が逃走に移る。急降下して離脱。九七式戦相手なら通用するテクニックだが、零式戦には通じない。

地面スレスレまで逃げる敵機を零式戦は難なく追跡し、撃墜しようとしたところで黒間はあることに気がついた。

「１０時方向・・・何か見える」

無線封鎖を解除し、黒間は斎田に確認を求めた。

「あれは偵察機か？」

斎田はあんなの見たこともないと付け加えた。

こちらよりも高いところを双発機が飛んでいた。

その双発機は南から北に向かっている。南は満州国で、北はソ連である。これから偵察機に向かう友軍機かもしれなかった。逆に仕事を終えてソ連に戻る敵機である可能性もある。

国籍マークがどこにも見当たらなかった。国籍不明機の取扱いは規則で決められていて、不明機が武装していてこちらの指示に従わない場合は撃墜していいことになっている。

大抵の場合は、航路を外れた旅客機などだが、敵味方の秘密偵察機らしきものに遭遇したこともある。

一瞬、黒間は戦闘機乗りの衝動に駆られた。

不明機を追いかけてみたいと思ったのだ。しかし、発砲は禁じられていたし、上から指示で先制攻撃されない限りはソ連機は無視する決まりになっていた。

些細な衝突が日ソ全面戦争に発展することを日本政府が酷く恐れていたからだ。

独ソ不可侵条約がある限り、ソ連は後背の脅威を受けることなく対日戦に全戦力を投入できる。そうなっては苦戦は免れない。満州国の保持さえ怪しいものだった。

それが、日本がドイツとの同盟交渉に躍起になっている理由の一つでもあった。ヒトラーとスターリンの同盟など、日本にとっては有害無益でしかない。

「今のは見なかったことにしよう」

「そうだな」

黒間の提案に斎田はそっけなく答えた。

不明機は高度を上げながら、国境を越えて向こう側に飛び去っていた。

１９４０年の夏はまだ始まったばかりだが、国境の空は緊張に冷たく震えていた。

帰郷

１９４０年８月２５日

「内地に帰って、戦闘機をもらってこい」

中隊長の篠原弘道中尉が投げやりな調子で言った。

そのままマッチで紙巻煙草に火を点け、一服すると器用に片手でマッチをへし折る。

季節は盛夏を迎えていた。

中隊長室には扇風機が持ち込まれ、ぬるい空気をかき混ぜている。湿度はそれなりに高い。降水量が多いからだ。しかし、日本とは違って蝉は鳴いていない。満州の冬はとても寒いので蝉の幼虫は凍死してしまう。

しかし、だらしなく肌着を着崩して団扇を仰ぐ篠原はどこまでも日本の夏の風景だ。

ちなみここは満州国のハルビン郊外である。

「特別に好きな奴を選んで取ってきていいぞ。何か質問は？」

「自分だけですか？」

紫煙を吐き出し、片眉を上げて篠原は答えた。

「ああ、そうだ。そのまま内地で三日間の休暇をとれ」

「命令ですよね？」

「命令だ。休暇をとっていないのは、後はお前だけだ。規則を守れ、上が五月蝿いんだ」

黒間は会話の出口を求めて視線を彷徨わせた。
それがたまたま、汗が書類に落ちないように事務机に敷いた手ぬぐいに止まった。綺麗な藍で、朝顔の模様を染め抜いている。

「綺麗な手ぬぐいですね」
「ああ、帰郷した時に、おふくろがもっていけと渡してくれたんだ。で、お前は何が言いたいんだ?」

篠原は呆れたように言う。

「そんなに日本に帰るのが嫌なのか?他の奴なら感謝感激雨あられ、だぜ?」
「別に嫌というわけではないのですが」
「じゃあ、なんだ?親父と喧嘩でもしたのか?それなら悪いことは言わない。仲直りしておけ。後悔、先にたたずって言うじゃないか」
「そうじゃないんです」

じゃあ、なんだ?と篠原が言うので、黒間は愛想笑いするしかなかった。
ずっと前に死んだ父と母にもう一度会うのが怖いとはとても言えなかった。
もう一度人生をやり直すことになったあの日から恐れてきたことだ。ちなみに、黒間は次男で、兄と姉が一人ずつついる。妹が1人、弟が1人。典型的な貧乏子沢山だった。
姉はこの頃には嫁に出て実家にはいない。兄は長男なので戦争には行かずに済み、随分長生きして戦後に癌で亡くなった。妹と弟はまだ小学生ぐらいなはずだ。
母は、子供達が全員一人立ちするのを見届けると病を得てこの世を去った。

父は・・・・
もう５０年以上も昔の話だ。
それでも父と母の顔はきちんと鮮明に思い出すことができるので不思議だった。

「とにかく行け、どうしても帰りたくないなら、女のところで居つづけでもして散財してこい。なんでもいいから、とにかくキリをつけろ。俺達はもうすぐアレだからな」
「分かりました」

敬礼。
黒間は空席が目立つ中隊事務室を後にした。
他に何人も内地に戻っている者がいた。内地に戻れない事情がある者でも、休暇を得てハルビンや大連、新京に足を伸ばして娑婆の空気を楽しんでいる。大抵やることは決まっていて、酒を浴びるほど飲むか、派手な女遊びをするか、どちらかだった。
相棒の斎田は金髪の女を抱きたいという腐った理由で内地に戻らず、ハルビンに宿をとって、稼いだ金を売春婦につぎ込んでいるらしい。
黒間も誘われたが、あの男と穴兄弟になるつもりはなかった。そんなことは嫌過ぎる。そもそも、金髪の女を抱きたいなどとは思わない。
なら、どんな女ならいいのかと考えたところで、黒間は声をかけられた。

「クロ。内地に帰るのか？」

下士官室で同部屋の島軍曹だった。

「命令だそうで」

「帰るがの嫌なんだってな。珍しい奴だよ。俺なんか、北海道だから帰るに帰れなくて悶々としてるって言うのに」
「帰りたいですか？」
「当たり前だろ。アレの前に、一度は家族の顔を拝んでおきたいと思うさ。普通は」
「そうですね。もうすぐアレですから」

アレとは、部隊移動だった。
どこに行くとはまだ聞かされていない。そもそも部隊移動の話さえない。しかし、正式な命令よりも早く噂が広がり、部隊が南方にいくことは周知の事実になっていた。
一体、何のために？
それはもちろん、戦争のために決まっていた。
仏印進駐である。黒間の知る歴史どおりの展開だった。ただし、黒間が知っている歴史とは違うこともいくか起きている。
例えば、史実ではドイツの攻撃を跳ね除けたイギリス空軍は、８月初旬には殆ど壊滅し、この程ドイツ軍はイギリス本土に上陸した。
上陸作戦は成功し、既に戦いは内陸部に移っている。ドーヴァー市やポーツマス市などの港湾もドイツ軍の手に落ちた。ドイツ軍自慢の装甲師団の幾つかも既にイギリス本土に上陸しているらしかった。
イギリス軍はロンドンを死守する構えを見せているが、制空権を喪失した上で、ダンケルクから撤退で殆どの装備を重装備を失っているイギリス軍の戦線崩壊は時間の問題だった。
黒間は想定外のドイツ軍の奮闘を恨めしく思った。
この戦いで、黒間はイギリスが勝つ方に賭けていたからだ。失った賭け金は少なくない。ただし、殆どの者がドイツの勝利に賭けていたので一人あたりの配当は雀の涙ほどでしかなかった。
大英帝国が誇るロイヤル・ネイヴィーももはや虫の息である。
ドーヴァー海峡突入を図ったイギリス本国艦隊はドイツ空軍の猛

攻に遭い、戦艦ネルソン、レナウンを失って退却した。
黒間の知っている歴史では、航行中の戦艦が撃沈されたのはマレー沖海戦が初めてだったはずだが、今回はこれが最初の実例になった。
しかも撃沈されたのは、戦艦ネルソンだ。世界最強の戦艦の一つとして、ビック7と称された巨大戦艦である。ナポレオンの侵略からイギリスを守った英雄の名を引き継いだ戦艦が沈んだことで、イギリスの負けは確定したようなものだった。
イギリス海軍にはまだ戦艦も空母も残っているが、それを動かす人間の心が折れてしまったのだ。
逆にネルソンを撃沈したドイツ軍の士気は天を衝くほど高まった。戦艦ネルソンの沈没が齎した衝撃はそれだけに留まらず、世界に一大センセイションを巻き起こした。
センセイションである。一生の間にそうな何度も使うことのない言葉である。
その衝撃はユーラシア大陸の東の果てまで届いた。部隊が仏印に展開するという噂が広まったのも、戦艦ネルソンが沈んだ後からだった。
全く、迷惑な話である。

「そういえば、クロ。お前の故郷ってどこだっけ?」

島は急に思い出したかのように言った。

「愛知県ですよ。名古屋です」

それを聞いた島が怪訝な顔をする。

「お前、名古屋弁とか喋れるのか?」
「当たり前だがね」

翌日、定期便の輸送機がやって黒間は機上の人になった。
機内には内地に戻る人間がちらほらといた。席が埋まるほどではない。しかし、指定された席は相席だった。窓際の席に、酷く酒臭い息を吐く陸軍大佐が座っている。
黒間は自分の運の悪さを呪ったが、陸軍大佐は黒間に気がつくと破顔して言った。

「おい、若いの。一杯付き合え。俺は今日で退役だ」

おかげで黒間は空の旅をそれなりに楽しむことができた。
正午には、朝鮮の平壌に着陸して給油。それからは一気に朝鮮半島を南下して、日が暮れる前に北九州の飛行場に降りた。
そこで一泊し、翌日には岐阜県の各務原飛行場に到着した。
平成の御代でもそうだが、各務原は日本航空産業の中心地の一つで、陸軍航空隊が作った最初期の飛行場だった。
隣接地には川崎航空機の工場があり、そこで生産された軽爆撃機などが飛行試験を受けていた。三菱重工愛知工場で生産された零式戦もここで試験を受ける。試験に合格した零式戦が空軍に受領され、各々の任地へ向かって飛び立つ。
飛行場には飛行試験が済んだ零式戦がずらりと並んで軍への引渡しを待っていた。
黒間はその数に圧倒された。
優に１００機はある。格納庫にある分を加えたら２００機はあるかもしれない。こんなに沢山の零式戦がずらりと並んでいるのは前世でも見たことがなかった。

それと同時に、ここから好きな機を選ぶことなど、とても出来そうにないと思った。１機１機見て回っていたら、日が暮れてしまう。

そもそも好きな機を選んだところで、ずっとその機に乗れるわけでもない。搭乗機は固定されていなかった。急な故障があれば、予備機に変えて飛ぶ。オーバーホール中でも同じだ。搭乗機が固定されているのは中隊長以上からだ。

小隊長やその列機は日替わりで、空いている機があればそれで飛ぶのが普通だった。

「すいませーん」

黒間は近くで作業をしていた整備兵を呼び止めると事情を説明した。

満州から来たこと。好きな機体を選んでいいと許可を得ていること。その上で、この中で特に具合のいい機体はどれか尋ねた。

「はぁ・・・好きな機体を取ってきていいですか。そういうのって困るんですよね。何のための規則だと思ってるんだか」

兵隊というよりは役所の係員のような調子で整備兵は言った。

その物言いに思わず、ムっとしかけたがよく考えるともっともな話だったので、黒間は黙っていた。

「まずは書類の提出を事務室でやってください。受領書にちゃんと責任者の押印はありますか？」

「ああ、確認してあるさ」

「そうですか。たまに書類がないって大騒ぎになって、テレタイプで送って貰ったりすることがあるんですよね。こっちも暇じゃないっていうのに」

上級者に対する敬意の欠片もない口ぶりに黒間は段々腹が立ってきた。

しかし、黒間はここに喧嘩をしにきたわけではなかった。それに、階級に物を言わせて偉ぶるのは黒間の趣味でもない。

前線から遠のくとこういう人間が増える。黒間はそう思った。

最前線の修羅場にはこういう人間はいない。戦争は人間を正直する。強いものは強く。弱い者は弱い。価値の序列は前線に近づくほど、ぞっとするぐらいにシンプルになる。物を言うのは単純な力だ。前線では誰もが力の信奉者になり、強者はとても単純に尊敬される。

黒間は心底、この緊張感のない顔をした整備兵を軽蔑し、哀れんだ。

きっとただの一度も前線に立ったことがないのだろう。

ここには血で血を洗うような死闘も、魂まで凍るような緊張もない。食料の補給がなく、食べられそうな雑草を探す苦労もなかった。

もちろん、内地がそんな風になってほしいとは決して思わないけれど、前線帰りの実戦経験者には敬意を払うべきだと思った。

黒間の胸に輝く国境事変従軍記章にはそれだけの価値があるものだった。

「じゃあ、案内します。迷子になられちゃ困りますからね」

その背中に蹴りをぶち込んでやろうかと思ったが、黒間は我慢した。望んで得た休暇ではないが、休暇を営倉で過ごすのは御免である。

そこで黒間はあることを思い出した。

ここに来たら一つ聞いておこうと思っていたことがあったのだ。

「一つ質問なんだが、ここにある零式戦って、牛車で名古屋から運んでいるって本当なのか？」

そういう話を戦後に聞いたことがあった。

ハイテク技術の塊である戦闘機を牛車に乗せて名古屋にある三菱の飛行機工場から岐阜の各務原まで運んでいたらしい。

もちろん、牛車に乗せるときは分解梱包する。折角組み立てた戦闘機をもう一度バラして、しかも牛車で運ぶなど正気の沙汰だと思えないが、実際に行われていたことだ。

大型の爆撃機の類が生産された時は特に悲惨で、牛が数頭がかりで荷車を引っ張る。おまけに道が狭いので牛車が曲がる時には、あちこちに頭を下げて電信柱や看板やら取り外しながら進んだらしい。戦争末期には飛行機の増産で、輸送に酷使された牛が病気になってしまい生産がストップしてしまったこともあるのだという。

何故、牛車を使うのか首を傾げるところだ。トラックで運べばいいだろうと思う。

しかし、これにはそれなりに合理的な?理由があった。道が舗装されていないので、トラックに乗せて走ると震動で飛行機が破損する可能性があり、敢てのろまな牛車が選ばれたのだ。

震動が気になるなら道を舗装すれば済む話なのだが、戦艦や戦闘機を作る金はあっても道路を舗装する金はないのが戦前の日本という国だった。

最も合理的な解決方法は、飛行機工場と飛行場を併設してしまうことだ。そうすれば、作ったそばから飛行試験ができる。しかし、そういう発想はなかったらしい。

来る日も来る日も牛を連れて名古屋と各務原を往復した関係者の努力を貶める意図は全くないが、とてもやるせない気分にさせられる話だった。

前線でパイロット達がボロボロの機体で必死に戦っているとき、新品の戦闘機を乗せた牛車がノロノロと田舎道を進んでいくのだ。

バカも休み休みやってくれと言いたい。

「あぁ・・・少し前まで、そういうことをやったらしいですね。で

も、今は名古屋の工場から直接、鉄道でここまで運んでますよ。当たり前じゃないですか」

「ああ、そうかい」

黒間は胸の支えがとれた気分になった。

しかし、溜飲は少しも下がらなかった。

各務原から名古屋へは戦前から鉄道が走っていた。

もちろん、電車ではなく蒸気機関車だ。

白煙を勢い良く吐き出す黒塗りのＤ５０型機関車が鉄路を南へ南へと走る。

窓の外に流れる景色は、中世から延々と続く尾張、岐阜の水田地帯である。

時々、人の姿も見えた。みんな野良着を来て、腰を窮屈に曲げて田んぼに向かっている。夏の草取りだ。この時代に除草剤なんて便利なものはない。

水田の作業というものは全てが大変だが、その中でも最も大変なのは夏の草取りである。太陽が照りつける夏の一番暑い時期に泥の中に膝まで突っ込んで、雑草を一つ一つ手で抜いていくのだ。

それだけでも十分な苦役だ。しかも、泥の中には蛭が潜んでいる。蛭がふくらはぎに鈴鳴りになることも珍しくない。土地改良が進む前の湿田だと、田舟を使わなければ胸まで浸かることだってある。

とにかく田んぼの草取りほど大変なものはなかった。

その為、百姓の間では「タノクサ野郎」というのは最大級の侮蔑表現であった。

そうした百姓のあまり目にすることのない苦労を脇に避けて見れば、車窓の風景はとても美しかった。

８月だ。
空には入道雲と青々とした若い稲が空に向かって真っ直ぐ伸びている。

「おお・・・」

思わず、感嘆の声が漏れるほどだ。
もはや記憶の中にしか存在しない昭和初期の日本の夏だった。
自動車の排気ガスで汚染されていないとても純度の高い青い空の下をＳＬが疾走している。
蒸気ピストンと鋼鉄のギアが混ざったＳＬ独特の走行音が驚くほど耳に馴染んだ。
しかし、全開の窓から遠慮なく石炭灰が入り込んでくるのには閉口した。エアコンがないから窓は全開でないと蒸し風呂になってしまう。
座席もまるでクッションが効いていないので、削岩機の上に腰掛けているような有様だった。そして、そこには沢山の人間がすし詰めに押し込められている。
黒間は改めて戦後５０年の科学と社会の発展の有り難さを痛感し、自分がいかに贅沢に慣れていたかを思い知る。
３等客車の固い座席に尻が痛くなって我慢できなくなったころ、降車駅の大曽根についた。
実家はここから歩いて３０分ほどである。
時刻はまだ昼下がりだ。人通りはあまり多くない。
戦前から大曽根は鉄道の駅があり、名古屋の繁華街の一つであった。駅前にはモダンなコンクリート製のビルが立ち並び、道の両脇には商店がずらりと並んで商店街を形作っていた。
駅のそばに映画館もある。現代的なシネマコンプレックスのように大きなものではないが、子供の頃に何度か見に行ったことがある。
夜になると大通りの左右にびっしりと屋台が並び、大勢の人で賑

わう。

「・・・・」

黒間は改札から数歩も歩かない内に立ち尽くした。

こみ上げてくるのは郷愁だった。

空気の匂いが違うなどと、そんなことを自分が考える日が来るとは思わなかった。

息を吸って、吐く。ただそれだけを何度か繰り返した。この空気の味は、格別な気がした。今まで呼吸したどんな空気よりも、体に馴染む気がする。

黒間は駅前を行き交う人々を見た。

みんな普通だった。少し古めかしい格好をした人々が、少しだけ忙しそうしていた。和服を着ている人間が多く、若者がジーパンを履いていないことを除けば、ありきたりな日本の駅前の風景だった。

笑っている人はいたが、泣いている人はいなかった。険しい顔をしている人はいたけれど、誰もそのことを問題にはしていない。

小さな子が歩いていた。

小学生ぐらいだ。学校帰りかもしれない。友達とアレコレおしゃべりに興じている。

黒間の視線に気がついたのか、子供が不思議そうな顔で見つめ返してきた。

「どうしたの、おじちゃん」

黒間はほんの少しだけ傷ついた。

まだおじちゃんと呼ばれるような歳ではない。少なくとも肉体的には。

「何でもないんだ。学校帰りかい？」

「そうだよ」
「おい、さっさと行こうぜ」

呆けたような顔で答える黒間を気味悪く思ったのか、友達の一人がその子の袖を引いた。

「お腹いたいの？」
「いや・・・別に、大丈夫だ」
「でも、泣いてるよ」

そこで黒間は落涙に気がついた。

「これは、違うんだ。何も痛くない」

痛くないはずだった。
しかし、猛烈に胸が締め付けられるように傷んだ。
心が痛かった。形のないものが痛むはずないのに、どうしてか心が痛いと思ってしまった。

これからどうしようか。

黒間は泣きながら途方に暮れた。
まだ、最寄りの駅についただけなのに、こんな有様だった。実家の前に立ったら卒倒するのではないだろうか。
少なくとも、泣かないでいる自信は全くなかった。
今でも涙が止まらないのだ。
基地に帰ろうと思った。もしも、家に帰ってしまったら、自分はどうかしてしまうのではないか。
だが、しかし、運命とは多くの場合、否応ないものである。

「イの字。そんなとこで何やってんの？」

黒間は振り返って、その場で無様にもひっくり返った。

「ね・・・ねーちゃん」

「うん。久しぶり。鼻紙いる？」

黒間が姉の藤沢（旧姓黒間）貴子と再開したのは、そうした戦闘機パイロットらしくない、締まらない状況でのことだった。

黒間の実家は、うどん屋だった。

正確には、うどんの麺をつくる製麺所である。

黒間の記憶が正しければ、この頃には既に店を畳んでいたはずだった。支那事変と国家総動員法で小麦粉が手に入らなくなったからだ。製麺機も鉄の供出で国に取り上げられ、家族は軍需工場で働いていたはずである。

しかし、支那事変がないおかげなのか、黒間製麺所の暖簾はまだ残っていた。

よって、夕食は常にうどんである。売れ残りや仕損じた麺が家族の食卓にあがる。

黒間は卓袱台の上の深皿を見た。

冷やしうどんである。

井戸水で冷やした麺に刻みネギとシラス干しがふりかけてある。

これに麺つゆをかけて食べるのが黒間家の夏の定番である。

どこからどのように見ても冷やしうどんであった。

あまり美味しいものではないが、これ以外に食べるものがなかっ

た。文句はない。食べるものに文句をつけないのは、黒間家の食卓における鉄則である。

いや、この時代の日本の家庭における共通した鉄則であろうか。

「以蔵。食べないのか？」

長兄の黒間勉蔵が言った。

まだ若い。今年で27歳だっただろうか。製麺所で小麦粉相手に日夜奮闘する腕はとてつもなく太く、肉と骨がしっかり詰まっているように見えた。

兄のたくましい二の腕を見て、黒間は再びこみ上げそうになった涙を全身全霊で抑え込んだ。

半世紀後に市立病院の病室で癌との苦痛に満ちた戦いを終えて逝った兄の腕は、枯れ木のようにやせ細っていたことを思い出してしまったのだ。

「ああ、うん。食べるよ」

碗に入った麺つゆをかけ、黒間は冷やしうどんに向きなおった。

うどんの味はよく分からなかった。

夢を見ているような気分だったから。

「家族が全員揃うなんて、何年ぶりだろ？」

姉の貴子が天ぷらのナスに醤油を垂らしながら言った。

黒間の意識からすれば、半世紀ぶりということになる。

「2年か、3年ぶりじゃない？」

母の黒間美幸が答えた。

黒間は母の顔をまともに見るのが辛かった。
あまりにも嬉しそうで、幸せそうだったからだ。自分がどれだけ母に心配をかけてきたのか、母の笑顔はそれの裏返しだった。

「以蔵。帰ってくるなら、ちゃんと連絡してから来なさい。そうしたら、ごちそうを用意したのに」
「これで十分だよ。おふくろ」

黒間は母が慌てて近くの揚げ物屋に買いに走った野菜の掻揚げをかじった。
こんな贅沢品が黒間家の食卓にあがることは滅多にない。
この天ぷらは黒間のために用意されたものだった。母は、黒間の帰還を殊の外喜び、歓喜という他ない笑顔でこの食卓を囲んでいた。

「姉ちゃんは、どうして帰って来たの？」
「ああ、私はこれだから」

貴子は少し膨らんだお腹を撫でさすった。その顔は幸福そのものだった。
黒間は未来の甥っ子の顔を思い出した。
もうそこに居るのか。

「ねぇ、ねぇ、お兄ちゃん。いつまでお家にいるの？」

下の弟、黒間才蔵が甘えた声で言った。
黒間はこの鼻垂れ小僧が貿易商として大成し、アメリカ人と国際結婚して、２０年後にカナダに移住してしまうなんて全く想像もできなかった。
鉄砲玉か、糸切れた凧のような、まるで突風のような男だった。
黒間や家族と衝突したことも一度や、二度ではない。最後には家を

出て、それから一度も帰ってこなかった。父と母の葬儀にも、だ。
そんな男にも、こんな甘ったれた時代があったのだ。

「そうだな。明後日の朝までかな。朝一の汽車で各務原に戻るつもりだ」
「ふぅん。じゃあ、次はいつ帰って来るの？」

才蔵の一言に、食卓が凍りついた。
子供がやることは時として、正気を疑うほどに残酷である。
黒間は答える言葉を持たなかった。視線を冷やしうどんに落とし、片眉を少し上げて曖昧に微笑むのが精一杯だった。

「ねぇ、お兄ぃ」
「さいぞう！余計なことは言わないの！」

舌っ足らずながらも、断固たる調子で妹の黒間恵子が言った。

「なんで？」
「いいから！はやく食べな！」

恵子は才蔵を睨みつけて言った。才蔵はビビる。
三つ子の魂百までも、雀百まで踊り忘れず、そんな言葉が黒間の脳裏をよぎった。
妹の恵子は気が強い子だった。それは後々まで変わっていない。
だが、決して乱暴者ではなかった。逆に思いやりのある優しい子だった。仕事で忙しい父母に代わって弟の才蔵の面倒を一番よく見たのは恵子である。
そして、聡い子だった。
黒間が何のために戻ってきたか、この歳で既に悟っている。

「ごちそうさま」

食卓で父、黒間伝蔵が発した言葉はそれだけだった。
振り返りもせず、押し黙ったまま仕事場に戻っていく。これはいつもの事だった。明日の朝一に卸す麺をこれから仕込むのだ。
父は、明治の漢であった。

「お父さんは相変わらずね」
「あれでも本当は喜んでるのさ」

兄と姉は好き勝手に言った。

「俺も、ごちそうさま」

残った冷やしうどんを掻き込んで、黒間は父の後を追った。
黒間はどうしても父に言わなければならないことがあったのだ。

黒間製麺所の作業場は、黒間の記憶の中にあるとおりだった。
小麦粉の微粒子が漂う粉っぽい空気の中で、父は製麺機に小麦粉をセットしている。
暗い、ぼんやりとした白熱電球の下で、父は黙々と働いていた。
それは黒間が記憶している最も古い父の姿と同じだった。

「親父。少しいいかな」
「後にしろ」

にべもなく父は言った。

一瞬、黒間は父の怒りの爆発を恐れて首を竦めた。
仕事の邪魔をすると父は容赦なく怒り狂った。あまり父に怒られた記憶はないが、一度怒った父はそれはそれは恐ろしかった。
地震雷火事親父とはよく言ったものだ。
おかげで、入営直後のシゴキも大して恐ろしいとは思わなかった。父の怒りに比べたら、どうということはない。

「大事な話なんだ」
「言わんでいい」

黒間に背を向けたまま、父は言った。
頑なに拒絶の意思を表す父に黒間は困り果てた。
どうしても、黒間は父に伝えなくてはいけないことがあるのだ。だが、それをどうやって伝えるべきかは、黒間自身もまるで見当がついていなかった。
今から5年後の１９４５年5月１４日、深夜未明。Ｂ２９の編隊が夜間低高度で名古屋市中心部に侵入。市街地に対する無差別絨毯爆撃を行った。
国宝の名古屋城も被災炎上。民間人にも多数の犠牲者が出た。
被災者の名簿の中に、黒間伝蔵の名前が載っていたことを知るのは、終戦後に帰郷してからだ。黒間が戻ったときには、既に葬式まで済ませてあった。
遺体は兄と母の懸命な捜索にも係わらず、見つからなかった。あまりにも多くの死体が散乱していて、どれが誰のものなのか分からなくなっていたらしい。そうした遺体の一部は、軍が纏めて片っ端から焼却処分していた。防疫のためだ。死体は病原菌の塊であり、急速に腐敗する。
帰郷した時、名古屋は一面の焼け野原だった。
家も何もなくなっていた。黒焦げになったコンクリートビルディングの残骸が、あちこちにポツンポツンと残って、浮浪児の溜まり

場になっていた。
こんな有様になって、日本はどうなるのかと絶望したものだ。
そして、父にもう二度と会えないことに黒間は例えようのない悲しみを覚えたのだった。
しばらく、黒間は伝えるべき言葉が見つからず、立ち尽くした。
先に口を開いたのは、父だった。

「お前に返すものがあった」

小麦粉まみれの手で父は作業場の事務机から何かを取り出した。
無言のまま突き出されたそれをを見て黒間は首を傾げた。
預金通帳である。

「余計なことをするな。お前から小遣いを貰うほど耄碌しちゃいない」

射抜くような視線に、黒間は怯んだ。
通帳を開くとかなりの額が溜まっていた。一度も引き下ろした様子がない。
黒間はかなりの金額を毎月実家に送金していた。パイロットには様々な危険手当がつく。衣食住が保障されている軍隊では使い切れない。実家が貧しいものは皆、仕送りするのが普通だった。

「使ってくれよ。俺が持っていても仕方がない」
「要らんと言った」

父はさっさと黒間に背を向けて、仕事の続きに戻った。

「親父」
「くどい！」

父の本物の怒声が響き渡った。
さきほどまで賑やかだった食卓を囲む声がぴたりと静まる。よく訓練された兵士のような完璧な気配の消し方。ニトロセルロースのように過敏な空気が作業場に充満した。
だが、黒間はここで引き下がるわけにはいかなかった。
これくらいどうってことはない。
ここにいるのは世間に出たばかり若造ではなく、戦争を生き延び、戦後の混乱をくぐり抜け、妻と子と孫まで得た人生の長老であった。
父の2倍も長く生きている。
しかし、その知見は黒間に何かを齎すことはなかった。
作業場に響くのは嗚咽だけだった。
やがて涙の向うから、胸の奥のさらに向こう側から答えが現れた。

「・・・俺は親孝行がしたいんだ」

だって、親父はもうすぐ死んでしまうから。
生きている間に、俺は何も貴方にしてあげられなかったから。
必死に戦い、必ず護ると誓ったはずなのに、貴方を護ることができなかったから。

「男が泣くな、バカタレ」

父は静かに言った。
黒間が今まで恐れ、慄き、家に帰ることを頑なに拒んできたのは、何も出来なかった自分を責める自分がいたからだった。
戦争だから仕方がなかった、と何もできなかった自分を慰めてきたことを指弾されたくなかった。
奇跡が起きて、贖罪の機会が与えられた。しかし、贖罪には、まず罪があることを認めなければならなかった。

黒間は罪を認めることが恐ろしかった。
だが、父はそんなことはないと黒間を庇うように微笑んだ。
黒間は父が笑うところなんて、数えるほどしか見たことがない。
父は、黒間が落とした通帳を拾い上げ、それを自分の懐に収めた。

「使うつもりはないが、これは預かっておく。いいな?」

黒間は泣きながら頷いた。

「軍隊に行って、少しマシになったかと思ったが、お前はしょうがない次男坊のままだ」

小麦粉まみれの手で、父が頭を撫でてくれた。
頭が真っ白になったが少しも気にならなかった。

帰郷2

翌日、目が覚めたときには、既に日は高く昇っていた。
起床ラッパの鳴らない朝だった。
黒間は自分が下士官室の固い寝台ではなく、座敷のふとんの中にいることに気がつく。
そのまま暫し、天井を見上げる。シミだらけの天井。古ぼけた白熱電灯の電球。視線を真横へ向ける。庭で母が出来上がったうどんを天日干しているのが見えた。
青空、白んだ夏の日差し、風鈴の音、入道雲、日に焼けたすだれ、既にしおれた朝顔。汗だくになって働く母の後ろ姿。
黒間は、この瞬間を決して忘れるまいと思った。

「あら、起きたの」
「おはよう。お母さん」

黒間が布団から這い出すと母がこちらに気付いた。

「朝ごはん食べちゃいなさい」
「うん。みんなは？」
「もうとっくの昔に済ませてるに決まってるじゃない」

それなら起こしてくれればいいのに。
しかし、二度寝させてくれたのは母の思いやりであることは直ぐにわかった。
軍隊では決して許されない贅沢だった。

「今日はいい天気ね。散歩でもしてきたら？」
「いいよ。別に。それよりも何か手伝うことはない？」
「いいから、いいから」

母は黒間の手から出来立てのうどんを取り上げた。
笑う母を見てるとまた泣いてしまいそうだったので、黒間はさっさと朝食を済ませることにした。
朝食は麦飯と味噌汁だった。それに生卵が一つ。
朝食に生卵がでるなど、信じがたい贅沢であった。これが黒間のために特別に用意されたものであることは容易に想像がついた。
お櫃から、既に冷えてしまっている麦飯をよそって、生卵を茶碗に落とした。
醤油を垂らせば、卵かけご飯の出来上がりである。
暑くて食欲がないときにはこれが一番である。
ちなみに軍隊では、卵かけご飯は絶対にでない。衛生管理に問題があるからだ。食中毒で部隊が全滅したりしないように、あらゆる食材は加熱調理される。
魚介類や肉、生野菜も同様である。煮物、焼き物、蒸し物はあるが、生物は決してでない。暑くても、寒くても、熱々のものを食べるのが軍隊というところだった。
部隊が常夏の南方にいくことを思うと、黒間はウンザリする。
そして、そういうことならどうしても買い揃えておくべきものがあることに気が付いた。
黒間はそそくさと朝食を片付ける。

「お母さん。ちょっと行ってくるよ」

普段着に着替え、作業場に顔を出すと父と母、兄と姉が小麦粉と格闘していた。

「お昼は？」
「外で食べるよ。夕方までには戻る」
「早く帰って来なさいよ。今夜は、すき焼きだからね」

黒間は母の言葉に目を見開いた。
黒間にとってすき焼きというのは、年に1回だけ正月に食べるものであった。
そんなことをして、我が家の家計は大丈夫なのだろうかと黒間は心配になったが、そんな心配は無意味であること気づく。
家族が揃って食事ができるのは、ひょっとすると今晩が最後になるかもしれないのだ。
それが分かっているから、母はすき焼きを炊くのだ。

「・・・なるだけ、早く帰るよ」
「気をつけていってらっしゃい」

黒間はやっとそれだけ言葉を絞り出し母に見送られ駅前に出た。
探しものは幾つかあった。特に重要なのはふりかけであった。黒間の好みは紫蘇ふりかけであった。南方に行くならおかかふりかけよりも断然、紫蘇ふりかけである。ふりかけが素晴らしいのは嵩張らないことである。それでいてしっかりと日本を感じさせる味がする。
前世でも、食欲がないときに乾燥味噌や乾燥醤油を粉にしてご飯にふりかけて食べたものである。その時に、酸味の効いた紫蘇ふりかけがあったらどんなにいいだろうかと夢想したものだった。
ちなみに戦前の食卓にもふりかけは存在したが、ふりかけという名称が浸透したのは戦後のことである。この頃は「ふりかけ」ではなく「ご飯の友」というのが一般的だった。
意外なことかもしれないが、ふりかけの食品としての歴史は浅く、今日的なふりかけが誕生したのは大正時代である。

ふりかけは駅前の乾物屋で直ぐに手に入る。

だが、カメラ屋は駅前になかった。

黒間はカメラが欲しかった。それも戦地に持っていける頑丈な奴を。

記録を残すべきだと思ったのだ。前世の戦いでも、カメラが欲しいと思うことが何度かあった。

浮ついた物見遊山のような気分で言っているのではない。黒間の精神はそういうところから遥か遠いところにある。

戦争は悲惨だ。

だからこそ、後の世にそれを伝えていかなければならない。そのために人間にはカメラという魔法を手に入れた。カメラはファインダーに時間を切り取る。プラスチック製のフィルムは、１００年先に、その時起きた出来事を伝えてくれる。まさに魔法である。

問題は金がないことである。

銀行に寄って、貯めた金を全て引き下ろしたが、それでも５０円しかない。ふりかけの値段はたかが知れてるが、カメラはそうもいかない。他に幾つか揃えておきたいものもある。

小銭もその一つである。

「すいませんが、これを5銭玉に両替してください。全部、新品でお願いします」

黒間は行員に5円札を渡して言った。

「千人針ですか？」

「いや、チップに」

若い女性行員は小首を傾げた。

きっと意味が分からなかったのだろう。しかし、両替は笑顔で請け負ってくれた。よく躾の行き届いた行員である。

この時代に新品の5銭玉を大量に両替するなら用途は大抵の場合、千人針だった。

死線（4銭）を越えるという意味である。ある種の言葉遊びのような趣があるが、込められた願いは切実だ。同じような用途で10銭玉をよく使われた。苦戦（9銭）を越えるという意味である。

だが、黒間が欲していたのはチップとしての五銭玉だった。

南方の現地人に配るために使う。あちらは欧州列強の植民地である。チップの文化が根付いて、何か物を頼むときにはチップが必須である。チップを出さないと喧嘩になったり、途端に愛想が悪くなる。

そんな時に重宝するのが5銭玉だった。あちらでは真ん中に穴が空いている硬貨は珍しく、新品の5銭玉は美しい黄銅色を放つのでハッタリが効く。

前世の経験から学んだテクニックだ。

これで残り45円。

黒間はカメラが買えるのか不安になってきた。

そこで黒間は思い出したかように笑う。

45円の使い道でこんなに頭を悩ませる日が来るとは思わなかったのだ。平成の世なら、缶コーヒー一つも買えやしない。

しかし、昭和の世なら45円あれば家族が5人、6人いても1ヶ月は暮らしていける。

恐ろしい話だと思った。

まるで別の国みたいじゃないか。

「いや、アレは別の国か」

銀行を後にした黒間は、街辻のあちこちに翻る日の丸を見て、そう独り言ちた。

日本人が国旗を掲げることを憚るようになったのはいつからだろうか。戦後も暫くは祝日になると普通にどこの家庭でも国旗は掲揚

されていた。
ある時から、日本人はそれを憚るようになった。黒間自身もそれをしなくなった。
それが何時からか、何故なのか思い起こそうとしているうちに、市電がやってきた。
名古屋市電だ。
市電＝路面電車とは限らないが、名古屋市電＝路面電車だった。
地下鉄路線とバス路線の拡充で廃止される１９７４年まで名古屋市民の足として活躍した歴史と伝統溢れる路面電車である。
黒間も小さいころから何度も世話になってきた。もう一度市電に乗れるかと思うと感慨深いものがある。
大曽根から、カメラ屋がある今池までは市電が通っていた。
各駅停車しながらゆっくりと走る市電の車窓は、記憶の中にある名古屋そのままだ。
しかし、何となく道行く車の数が多い気がした。気のせいかと思ったが、時折渋滞に巻き込まれて市電が止まることがあったので気のせいではない。
大型のボンネットトラックや満州で乗った軽トラックも多かったが、どのように見てもスバル３６０としか思えない丸っこいボディの小型車が沢山走っていた。
スバル３６０が生まれたのは戦後のはずである。
黒間が最初に買った自家用車もスバル３６０だった。だから、見間違えるわけがない。
何故、スバル３６０が昭和１５年の名古屋の街をこんなにも沢山走っているのか。
それは当然、誰かがそれを作っているからに決まっている。
スバル３６０のバンパーには、東亜重工の風変わりなロゴマークがあった。トランジスタ・ラジオを作ったり、戦闘機用のエンジンを開発したり、手広く商売をしている日本有数のコングロマリットだ。

この会社は一体何なのか？

疑問に思った黒間は探りを入れてみたことがある。あくまで仕事の片手間にできる程度だ。分かったことはあまり多くなかった。

東亜重工は極端に秘密主義な組織で、商品の広告は大々的に打っていたが会社そのものの露出は不可思議なほど少ない。会社そのものの紹介するパンフレットの類もなかった。ハルビンにある東亜自動車（東亜重工の子会社）のショールームに行って、会社そのものについてアレコレ質問してみたが、店員も自分の会社がいつ、どのように始まったのかは知らなかった。

自分の勤め先の詳しい来歴など知らなくても今日、今必要な仕事はできる。しかし、大抵の大企業はその創業の苦労や成功を讃えて止まないものだし、社員も触りぐらいは知っていそうなものだった。

戦後にバイクメーカーから日本第2位の自動車メーカーに発展した某企業などは、その創業者の仕事ぶりが神話化されているぐらいだ。

そう考えると創業者や会社の来歴について音沙汰がないのは奇妙なことである。

意図的に情報を統制していると考えるのが自然だった。

しかし、日本の国家予算の１０年分の資産を持つと揶揄される巨大企業のトップの名前を隠し通すことなどできるわけもない。

「山本五十六」

黒間は声に出して見て、その言葉のもつ意味を改めて反芻した。

会ってみたいとは思わない。

しかし、彼が今どこで、何を考えているのかは知りたいと思った。

今池には老舗のカメラ屋があった。

創業は明治３７年、１９０４年である。日露戦争開戦の年にあたる。

昭和１５年現在でも既に歴史ある名舗であるが、黒間が記憶している限りでは２１世紀になっても暖簾を守っていたはずである。

つまり創業１００年。カメラの小売店としては最長不倒であろう。

そうした店が立つ今池は、名古屋でも古くからある繁華街一つである。昭和１５年現在でもそうだった。２１世紀になっても変わらない。

平日の昼間でも、人通りはそれなりにあった。

市電が降りると左右に立ち並ぶ芝居小屋や映画館から出てくる人の波にぶつかる。

大曽根には駅前に一つしかない映画館も、今池には四つも、五つもあった。飲食店も多く、胃袋を刺激する匂いが立ち込めている。

冷房が効いたカフェーやミルクホールも多かった。そういう店は大抵は満席で、若いカップルが二人だけの世界を作っていた。

野暮ったい格好の空軍パイロットには無縁の世界である。

一瞬だけ、末永く爆発しろと呪いの言葉を吐きそうになる。しかし、黒間は寸前のところで思いとどまった。

彼らの幸福を邪魔する権利など、誰がもっているのだろう？

幸せな彼らが眩しかった。

今まさに戦争の坂道を転げ落ちようとしている国家の日常風景とはとても思えない。目の前に戦争という断崖絶壁が転がっていることを知っているのは黒間だけだった。

果たして、何人の恋人たちが、あの戦争を生き残ることができるのだろうか。

時が止まって欲しい。黒間はそう思った。

この一瞬が永遠になってしまえばいい。

そうすれば、戦争が恋人たちを引き裂くこともなくなる。

この幸せな空間に爆弾が落ちてくることもない。
黒間がそこまで考えたところで、正午を告げるサイレンが鳴った。

「分かっているさ、そんなことできないってことぐらい。そう急かすなよ」

黒間は踵を返し、カメラ店に入った。
カメラ店はこの時代の店としては広く、ガラス製の陳列棚にはところ狭しとカメラが並んでいた。
日本製のカメラもあったが、目に付くのは宝石のように飾られた舶来品の数々だ。
アメリカはコダック、アーガス、グラフレックス。ドイツはライカ、コンタックス、レチナ、ローライ、イハゲー、フォクトレンダー、リンホフ。数はドイツ製とアメリカ製が半々といったところだ。
しかし、値段は半々どころではない。
特にライカは冗談のような値がついていた。家が買える。

「いらっしゃいませ。今日は何をお探しですか?」

品の良い感じの老店主が黒間に声をかけた。
カメラの知識など全くない黒間にとって、これは好都合だった。

「カメラを探しています。頑丈な奴を」
「頑丈な奴、ですか」

一瞬だけ、老店主は探るような視線を黒間に向けた。
それも直ぐに柔和な笑みの中に消える。

「はい。戦場に持っていっても滅多に壊れないカメラはありませんか?」

「貴方は従軍記者なのですか？」

黒間は頭を振った。

本当のことを言うべきか一瞬迷う。

「私は空軍の戦闘機パイロットです。最後の休暇をとるために日本に帰国しました。部隊に戻ったらおそらく、南方に派遣されます。その後のことは、正直どうなるか分かりません。私はこれから起こる様々な出来事をできるだけ後世に多く伝えるためにカメラが欲しいと思っています」

精一杯の誠意を込めて黒間は言った。

老店主は接客用の笑みを消して黒間の話に耳を傾けた。

そして、言った。

「なるほど、分かりました。それなら持っていくカメラは外国製のものがいいでしょう。海外では、国産品は部品が手に入らないので修理が難しいでしょうから」

老店主はカメラの一つを手にとった。

「戦場に持っていくというのなら、やはりこれが最適解だと思います」

果たせるかな、そのカメラはドイツ製のライカ?だった。

クローム仕上げの軍艦部が眩しい手の中に収まる土地付き一戸建て住宅である。

「ご冗談ですよね?」

「いたって、私は真剣ですよ」

老店主は楽しそうに笑った。

「このカメラこそは、戦場の錆に耐える貴方の戦ま友、カメラの中のカメラと言えるでしょう。戦禍の泥に耐え、高温多湿に挫けず、厳寒厳冬を越えて、最後まで貴方に付き従うことでしょう」

「予算は４０円までお願いします」

「４０円ですか・・・」

老店主は少し呆れたらしい。

「安かろうと悪かろうという言葉をご存知ですか？」

「知っていますが、これでも私の一ヶ月分の給料と同じなんですよ」

「兵隊さんの給料ってそんなに安いんですか？」

老店主は少しだけ意外そうな顔をした。

この頃そこそこ裕福なサラリーマンの給与が月収１００円ぐらいである。

パイロットは飛行手当がでるので、これでもまだ多く貰っているほうだった。下士官より下の兵隊になると俸給は悲惨極まり、笑いを誘うほどだ。兵役は義務だから、給料が出るだけでもありがたく思わなくてならない。

ちなみに月収１００円貰えるのは大尉以上からだった。

軍隊に何か幻想のようなものを抱いて志願してくる保守的な若者は数知れないが、あまりの俸給の悪さに嫌になって辞めていくことが多かった。

将校ならともかく、下士官はまともな人間がつく仕事とは思われていなかった。月給３０～４０円とは、そういう人間が貰う給料なのだ。

２１世紀の感覚なら、安い派遣か、ちょっと多く貰っているフリ

ーターか、そんなところだ。
それでも志願者が後を絶たないのは、それよりももっともっと貧しい生活をしている人々が山ほどいたからである。
貧困は社会問題だった。青年将校がクーデターを起こすぐらいに。
黒間もそうした貧者の一人だった。

「そういうことなら、いいものがあります」

老店主は一度店の奥に引っ込んで、紙箱を持って戻ってきた。

「それは？」
「フェイクライカです」

老店主が紙箱を開くと中から金メッキが眩しいカメラが出てきた。

「フェイクライカ？」
「ライカの偽物ってことです。戦争でドイツからライカの輸入が止まったせいで、ライカの価格が暴騰しているのですが、これはライカそのものの価値も去ることながら、投機筋の影響も大きいのです」

眉に皺を寄せて老店主は言った。

「おかげで偽物のライカを作って一儲けしようとする人間が現れる始末です。このカメラもそういう不心得者が作った贋作の一つです・・・比べて見てください」

老店主はフェイクライカと本物のライカを並べて置いた。
違いは一目瞭然である。
本物のライカの軍艦部（カメラの上部構造部）は銀色のクロームメッキだが、フェイクライカのメッキは金色である。フェイクライ

カのレンズキャップにはハーケンクロイツの刻印があったが、本物には付いていない。張り皮の色や質感も全く違う。
しかし、細かい作りはかなり似せたものに仕上がっていた。
下手な偽装を施したせいで、却って偽物らしく見える。これでは本末転倒だ。

「非常に程度の低い偽装です。しかし、一度も本物を見たことがない素人を騙すにはこれで十分だと思ったんでしょうね」
「これを幾らで売るつもりだったんですかね？」
「６００円です。顧客の一人が被害に遭いまして、ライカを手に入れたと大喜びで今朝、これを私のところに持って来ました・・・本当のことを言うべきか、とても悩みました」

老店主は寂しい笑みを浮かべ、黒間は顔を背けた。

「詐欺はよくありません。しかし、このカメラはとてもいいものです。こんな陳腐な偽装を施されてしまったせいで、本来の価値が損なっている。これはライカでもないし、もはやＦＥＤでもない。何者でもない無い物になってしまった」

老店主は残念でならないという顔をしていた。

「ＦＥＤ？」
「このフェイクライカは、ソ連製のコピーライカ。ＦＥＤをベースに作られたものです」

黒間にはコピーとフェイクの違いが分からなかった。
同じ偽物なのではないか？
それを言うと老店主は笑って頭を振った。

「違います。コピーとフェイクは似て非なるものです。ＦＥＤはライカ?の猿真似ですが、決して自らをライカ?とは名乗りません。ＦＥＤはＦＥＤです。己を偽るようなことはしない」

そういうことなら理解できる。

「まぁ、特許を無視して堂々とコピーを生産するのはどうかと思いますがね」

老店主は苦笑して言った。

黒間も釣られて笑った。

「しかし、これが意外とバカにできないものです。オリジナルのライカ?よりも実用性、特に耐久性はＦＥＤの方が勝るかもしれません」

「私もそう思います」

黒間はソ連が戦後に作ったアサルトライフルのことを思い出した。非常識までに頑丈作られたそれは戦車に踏まれた後、泥に埋めて海水で洗ってからでも故障せずに作動するらしい。

「フィルムもライカ判がそのまま使えます。貴方のご予算ならこれがベストでしょう」

「ありがとうございます」

黒間は心の底から老店主に感謝の言葉を述べた。

同時に、この店が２１世紀まで続く理由が分かった気がした。

カメラを手に入れると途端に何かを撮ってみたくなる。
幸いに撮りたいものは無数にあった。
黒間にとって、目に映る全てが遠く過ぎ去り、二度と戻ってこない景色だった。これら全てを２１世紀まで残しておくことはできない。
それでも、３５ｍｍフィルムには残る。
１９世紀末に生まれたカメラが２０世紀半ばまでに今日的な形に発展、進化したのは偶然ではない。
カメラの進化は必然だ。黒間はそう思った。
移ろいやすい浮世もフォルムには後の世まで変わることなく残る。
思えば、２１世紀までに日本製カメラが世界市場を席巻したのはそういう理由があってのことかもしれない。技術的なことは黒間にはわからない。経済政策や、経営戦略の巧緻ももちろん影響しているだろう。しかし、それ以前に無意識的な、形而上の理由があって、人々はカメラを求めたのではないか。
東欧の大国ポーランドは、戦災で破壊され尽くした首都ワルシャワを戦後再建するに当たって、破壊された建築物の罅や落書きの一つ一つまで生存者の証言を集めて修復したらしい。
それはそれで意義のあることだ。
だが、変化のないところに進歩はあるのだろうか？些かならず疑問である。
むしろ進歩に逆行する行為だと黒間は思った。日本人は焼け跡に焼ける前の街を再現するようなことはしなかった。
むしろ日本人は積極的に過去と決別し、新しい街を作った。
歴史や伝統を投げ捨てるところに、戦後の奇跡的な発展があった。
だが、失われていくものを惜しむ気持ちはあったはずだ。それが日本人にカメラを求めさせた。
敗戦から半世紀の間にあまりにも多くの物事が変わってしまった。

忘れ去られていく多く物事を後世に残すために、日本人にはカメラが必要だった。

必要なものを作るために、技術が生まれ、進歩した。

こんなことは考えすぎだろうか？

しかし、必要は発明の母という格言もある。

ファインダーに名古屋城の天守閣をおさめた黒間がつらつらとそんなことを考えていた。

加藤清正が組んだ石垣の上に築かれた五層の名古屋城天守閣は国宝に指定された第一級の文化財だ。銅瓦は緑錆を吹き、白い漆喰と相まってとても美しい。

天守の頂上に輝くのは名古屋のシンボルとも言える金の鯱である。元は陸軍や宮内省が管理していたが、今は名古屋市に管理が移り、公園として整備され一般公開されていた。

これらの殆どが戦災で焼失する。

それを思うと黒間はため息しか出ない。

自分が全知全能を尽くし、死力を振り絞って戦えば、これらを護ることができるのだろうか？

もちろん、無理に決まっている。

前世でもそれは失敗したシナリオだ。力の限りを尽くしても、できないことは存在する。帝国陸海軍は自殺攻撃まで繰り出して戦ったが、それでも勝てなかった。１９４５年になれば、アメリカは原子爆弾を完成させる。

たった1機でも、アレが本土上空に侵入すれば、全てが終わる。

だが、それでも、人間やってできないことはないと黒間は考えていた。

まだ出来ることは残されている。はずだ。

「帰るか」

今の黒間にできることは、家に帰ってすき焼きを食べることだ。

今晩の夕飯の味を想像するとツバが出てきた。
絶対、ご飯は大盛りで食べよう。
そんなことを考えながら、フラフラと市電の駅まで歩くとすっかり日は傾いていた。
夏の夕暮れは長い。小さい頃は永遠に続くほど長く感じられた。今は、それほどではない。一日はあっと言う間に過ぎ行く。しかし、暑さのせいか、今日はいつまでも日が落ちる気配がなかった。
市電はなかなか来ない。
太陽が地平線まで傾き、街路樹が地平線まで影を伸ばしていくようだった。それを追いかけるように自分の足元から影が伸びる。
黒間はそれをぼんやりと見ていた。
そんな時、同じ市電を待つ人々の列に、見覚えのある顔を認めた。眼鏡の女が、手で西陽を遮りながら熱心に文庫本を読んでいる。文庫本のタイトルは、夏目漱石の「こころ」だ。
小説の舞台は明治末期。二人の下宿生と一人の女性の話だ。黒間も読んでみたことがある。感想は特にない。一体、何の話なのかよく分からなかった。友人に裏切られ、恋人を盗られたKが自殺するのは理解できないことではない。しかし、先生が死ぬ理由は分からなかった。書評では先生は明治の精神に殉じたとされていたが、それなら、そもそも明治の精神とはなんぞやと問うところから始めなければならない。
いや、そもそも、Kも先生も自殺するほどの止むに止まれぬ理由があったのだろうか？
死んだところで得られるものなど何もない。
違う。問題はそこではない。
問題は、文庫本を読む女のことだ。
「あれ？ひょっとして黒間君？」
女が黒間の視線に気づいて振り向いた。その拍子に、近視用の分

厚いメガネがずり落ちかける。
どこかで見覚えのある顔だと思ったら、小学校の同級生だった。
そして同時に、黒間の亡妻、或るいは未来の嫁、黒間（旧姓佐藤）素子。その人だった。
たしか、今は学校の教師をしているはずである。

「あ・・・うん。そうだね」
「そうだよね！どうしたの？仕事帰り？あれ、軍隊に行ってたんじゃなかったけ？」

亡妻の若々しい声に、黒間は圧倒された。
二人が一緒になるのは４年後の話だ。結婚は見合いであった。それも、写真見合いだ。
内地から送られてきた写真を見て、婚姻届を書いて軍事郵便で送り返した。書類を送り返した後は、そんなことはさっさと忘れた。
黒間自身はその時ビルマにいて、一式戦を駆ってＰ－５１やスピットファイアと激闘の日々を送っていたのだ。甘い新婚生活を想像する余裕など一切ない。
二人が幾らか時間をとって顔を合わせたのは、敗戦直前のことだ。本土防空のために内地帰還命令を受けた時に、初めて黒間は小学校の同級生を妻に娶ったことを思い出したのだ。
酷いと思わないで欲しい。戦時中の話だ。
黒間以外にもその手の見合い婚をしていたパイロットは多かった。高確率で死ぬパイロットは刹那的なものの考え方をする人間が多く、結婚について真剣に考えている人間はどちらかと言えば少数派だった。
黒間もその一人で、敗戦で除隊してから家に帰ると妻がいて、扶養家族がいることに目眩を覚えた。
空戦のやり方しか知らない戦闘機パイロットが、敗戦後の焼け跡でどうやって暮らしていくべきか、妻とはどんな風に付き合ってい

けばいいのか。誰もそんなことは教えてくれなかった。
結局、我武者羅に働くしかないという結論に至るわけだが、彼女がいなければきっと自分は自暴自棄になって死んでいただろう。敗戦が納得できずに、荒れた時期があるのだ。
その結論に至るまで、娑婆では無能以外の何者でもないポツダム少尉を支えていたのは彼女だった。
敗戦の混乱の中で、女一人で酒を飲んで暴れる大の男を食わせていく。その苦痛、苦労、絶望は、どれほどのものだっただろうか。
敗戦のショックで泣き喚く黒間を見て、彼女は何を思ったのだろう。不安で泣きたいのは、きっと彼女の方だったに違いないのに。
感謝しても、しきれなかった。
それが愛情に変わったのは何時だったのだろうか。

「あの、大丈夫？ものすごく顔色が悪いけど？気分が悪いなら、早く休んだほうがいいよ」

思い出に現実逃避していた黒間は強制的に再起動させられた。

「いや、大丈夫だ。ちょっと、いろいろあって、内地に帰ってきたんだ」
「ふうん。じゃあ、直ぐに外地に戻るの？」
「ああ、明日の朝一で」

黒間はまともに素子の顔を見ることができない。
若い頃の妻は、それはもう美人というわけではナイジェル・マンセル。
いや、つまり、セナの最高のライバルは、シューマッハではなくマンセルだと思うのだ。シューマッハって要するにライバル不在のお陰でチャンピオンに成れたのであって、実力というより運の要素がありおりはべりいまそがり・・・

「いまそがり?」

どうやら、口に出していたらしい。
黒間はとても混乱していた。

「ごめん。深い意味は無いんだ」
「別にいいけど。電車来たよ?」

二人揃って、同じ電車に乗った。
それからしばらく世間話などをした。
黒間が話したのは、満州やハルビンなど主に外地の話だ。特にロシア人が作った欧州風の街であるハルビンは、素子の興味を引いたらしい。

「へぇ、いいな。私も行ってみたいな」
「行ってみたらいい。綺麗なところだ」
「どうやって?黒間君が連れて行ってくれるの?」

素子が挑発的な物言いに、黒間は鼻白んだ。
妻がこんな風に話すことなんて、少し意外だった。新鮮だと言ってもいい。
そういえば、前世で妻と話をしたのはいつが最後だっただろう?
風邪をこじらせ、肺炎と診断されてから入院まで僅か3日足らずだった。あまりにも展開の早さに黒間は全く理解が追いつかず、入院の準備が済んだと思ったらもう葬式の用意をしなければならなかった。
子供たちに、母さんが亡くなったと電話したときは直ぐには誰も信じてくれなかったほどだ。
そうだ。俺は彼女の最期に何もしてやれなかった。

臨終を看取った時も、何の言葉も交わすことができなかった。
正直に言えば、老いた妻の入院の付き添いに、不平や不満がなかったわけではない。勝手に倒れてしまった妻に愚痴をこぼしてしまった。
黒間はずっと前から、自分の浅はかさや身勝手さに後悔していた。
妻の元に旅立つときが来たら、謝ろうと思っていた。
そして、自分の心からの気持ちを正直に伝えたかったはずなのだ。
その機会がとても不可思議な形で、今ここに現れた。

「黒間君、なんで泣いてるの？」

黒間は止めどもなく流れる涙を拭った。
苦労して息を整える。
はっきりと、これだけは言っておかなければならないことが、黒間にはあった。

「俺は、君のことをあい・・・」
「あい？」

不思議そうな、奇妙なものを見るような目で素子は問いなおす。
そこで黒間は急に冷静になってしまった。
よく考えてみれば、まだ二人は結婚すらしていない。半世紀に及ぶ結婚生活を覚えているのは黒間だけで、素子は何も知らないのだ。
二人の関係はこの時点では、ただの小学校の同級生に過ぎない。
黒間は、心臓の早鐘をなんとか落ち着かせようとする。

「ねぇ、黒間君。今なんて言ったの？あい？ってなに？」

興味津々に、何かとてつもなく面白いものを見るように素子が言った。

「えーっと、それは、だな」

まだ危機は終わっていなかった。
なんとか誤魔化す方法がないか、黒間は必死に考えた。
ここで変に思われては、歴史が変わってしまう。

「その、なんだ。これは誤解だ。その、あいというか・・・あい」

その時、黒間の脳髄に電光の如くアイデアが閃いた。

「アイーーーーン！」

右手を水平に、笑顔と共に顎を突き出す。
それは２１世紀初頭に流行したとあるお笑いタレントの持ちネタだった。
ちなみに今は昭和１５年８月である。

翌日、黒間は日が昇る前に母親に起こされた。
このまま永眠してしまいたい気分だったが、母は容赦しなかった。
家族全員で朝食をとり、そのまま氏神様に参拝した。
父は紋付き袴、兄は背広。弟、妹は学生服。全員が正装をして、古式ゆかしい作法に則り、武運長久祈願した。
二礼二拍手一礼したとき、黒間の脳裏に去来したのは虚無だけだった。
神社には駅前の写真屋が待機していた。参拝が終わるとその場で

記念写真を撮った。
そこで黒間は、昨日買ったカメラをあの場に忘れてきたことを思い出す。だが、全ては今更だった。
あの後、黒間はどうやって家に帰ったのか覚えていない。
ただ一つ確かなことは、黒間が全て放り出して走って逃げてきたということだけだった。

「あのー、兵隊さん。もうちょっと・・・しゃきっとした顔をしてくれませんかねー？」

写真屋の親父がフードから顔を上げて言った。
そんなに締まらない顔をしているのだろうかと、黒間は首を傾げる。

「以蔵。何があったか知らんが、しゃきっとしろ」

兄に怒られた。

「兄ちゃん」
「なんだ？」
「死にたい」

兄が目をむいて怒り狂った。

「ふざけんな！」

一発、腰の入ったいいパンチを喰らって、黒間は少しまともに物を考えられるようになった。
きっと全て運命だったのだ。
黒間はそう思うことにした。運命なのだから仕方がない。

考えていることはひたすら後ろ向きだったが、そうでもしなければやっていられなかった。いっそ気が狂ってしまえば楽になれるのだが、黒間の精神は至って頑健にできてきた。

決して壊れないのだ。それは前世で証明済だ。

ビルマやフィリピンで狂死する部下や上官を何度も見送ってきている。

黒間は前世の大戦末期に、爆撃の最中、笑いながら防空壕から出て行った上官の一人を思い浮かべた。何となく、彼の気持ちが分かるような気がしたのだ。

怒り狂った兄を母がなだめ、なんとか記念撮影を終える。

そして、大曽根駅に出ると既に列車がプラットホームで待っていた。

駅前には国防婦人会や在郷軍人会が立てた旗や幟が翻っていた。盛大な見送りである。

和服に白エプロンの婦人会の面々が黒間に千人針を渡してくれた。

黒間は乾いた笑みを浮かべて、それを受け取った。前世でも、同じものを貰った記憶がある。いつの間にかどこかにいってしまった。

結論、あってもなくても同じ。

在郷軍人の顔よりも、腹の方に威厳がある敬礼に送られて汽車に乗り込んだ。

車窓から、家族を見る。

父、母、兄、姉、弟、妹。

何が起きているのか分かっていない弟を除いて、皆、強張った顔をしていた。

これではいけないと思って、黒間は笑みを浮かべて言った。

「行ってくるよ。心配しなくていい」

黒間は自分がこの戦争で生き残ることについて、さほど疑問に思っていなかった。

だが、誰も黒間の言うことを信じないようだった。
母は今にも泣きそうだし、妹は今の一言で泣いてしまった。
思わぬ逆効果に黒間は動揺する。

「恵子。おいで」

妹を呼び寄せ、黒間はオカッパ頭を撫でくりまわした。

「大丈夫。すぐに帰ってくるよ。ちょっとの辛抱だ」
「ほんと？」
「ああ、本当だよ」

黒間は妹の鼻と涙で濡れた渋面を手ぬぐいでふいてやった。

「お兄ちゃん。おみあげ買ってきてね」

あまり状況を把握できていないらしい弟が言った。
黒間はその丸っこい坊主頭を掴んで締めあげた。

「お前は少し自重しろ」
「痛いよ。離してよ！」

突然の謂れ無き暴力に弟が抗議する。

「ちゃんとおとなしく、良い子にしていたら買ってきてやる」
「ほんと？」
「ああ、ほんとだ。お母さんの言うことを聞いて、しっかり勉強するんだぞ」

分かったと頷く弟に黒間は目を細める。

本当に分かっているかどうかは問題ではなかった。

「以蔵。しっかりやんなさいよ」

「ああ。姉ちゃんも、がんばれよ」

流石に姉はタフだった。

無理にでも笑ってみせ、いつもと何も変わらないことをアピールしていた。だが、目が笑っていない。

こんな負担をかけて、お腹の子供に障らなければいいがと黒間は心配になった。

そこで、あることを思い出す。

「お姉ちゃん。悪阻がひどくなったら、サイダーを飲めよ」

姉は悪阻が酷く、思い出話にそのことを話すことが多かった。

何も食べられない時期に、確かサイダーで栄養を補給して切り抜けたらしい。

「よく分かんないけど、分かったよ」

姉がどこか呆れたように言って、笑って頷いた。

今度の笑みは心からの笑みだった。

「兄ちゃん。さっきは悪かった。少し血迷っていた」

「もういいさ。俺もカッとなって悪かった」

黒間はまだ痛む頬を軽く撫でた。

「でも、本気で殴ることはないだろ」

「だから、悪かって言っただろ？」

少しも悪く思っていないことは明らかだった。
確かに、兄は何も悪くない。
時と場合によって、言っていいこと悪いことがある。

「アイーンか・・・」
「あい？なんだって？」

兄が聞き返してきた。

「別に何でもない」

どうしてあんなことを言ってしまったのか、黒間にもよく分からなかった。
最後に、父と母に話す時間が残った。
母の顔は、今にも降り出しそうな空模様だった。気丈にも耐えているが、痛ましくて見ている方が辛い。
黒間は大抵のことに恐怖を感じない。精神年齢が高すぎるからだ。８０年も生きていると大抵のことに人間は恐怖を感じなくなる。
だが、母の涙を想像すると黒間は空恐ろしい気分になった。黒間にとって、この地上に残った恐怖は母の涙ただ一つだけだった。

「お母さん。体に気を付けてな」

母が皺の多い顔にさらに皺をつくって頷いた。
黒間は母の顔を忘れないようによく見ておくことにした。前世でも、確かそうしたはずだ。
こんな風に母の顔を見るなんて、そうあることはでなかった。
もしも、機会があるのなら、一度やってみるといい。とても温かな気分になるだろう。

「お父さん。これを」

黒間は父に一通の封書を差し出した。

タイトルはない。

遺書ではなかった。黒間は死ぬつもりは少しもなかったから。

だが、父はそうは思わなかったらしい。峻厳そのものの顔を一層強張らせて、封書を受けった。

「今は開けないでほしい。４年後に、その時まだ戦争が続いていたら、開封してくれ」

「どういうことだ?」

「開封すれば分かる。そして書いてあるとおりにしてくれ。それまでに戦争が終わっていたら、この手紙は開けずに焼き捨てて欲しい」

封書には黒間が知るかぎりのこれから起きることが記してある。

謂わば、黙示録だ。

結局、黒間は父に本当のことを言うことができなかった。

言葉では上手く伝えられるとは思えなかったし、信じてもらえるような話でもない。特に父の性格からして、受け入れて貰えるとは思えない。

だから、手紙にして預けることにした。

父が手紙に書いてあるとおりに、早期に名古屋から一家で疎開してくれれば、父が戦災に遭う確率は大幅に軽減できる。

理想なのは、それまでに戦争が終わっていることだが。

「じゃあ、行ってきます」

出発の時間だった。

車掌の笛がプラットホームに響き、蒸気機関車の警笛がけたたま

しく鳴った。
国防婦人会や、在郷軍人会の列が一斉に日の丸を振り、万歳三唱を叫んだ。半世紀ほど前に、当たり前のように行われていた出征兵士を送る儀式だった。
これが良いことか、悪いことか、黒間は判断がつかなかった。戦争反対のプラカードを掲げる平和主義団体による抗議活動に見送られるのが幸福なことだとは思わないが、これは過剰ではないかと思えてくる。
だが、悪い気はしなかった。そういう気分にさせるのが、儀式の意味だとは分かっていたけれど。
ある種の熱気に包まれたプラットホームを汽車がゆっくりと加速していく。
次第に遠ざかっていく家族の顔を黒間は見ていた。前世でも、同じ構図だったことを思い出す。見送られるのはこれが2回めだ。前と同じ絵だった。
だがその時、前と違うことが起きた。日の丸の列をかきわけて、袴姿の女が飛び出してきたのだ。
黒間は目を見開く。
素子だった。どうして、彼女がここにいる?
「黒間君!これ、忘れ物!」
差し出された紙袋を慌てて黒間は受け取った。
既に汽車は動いていた。素子は小走りに叫ぶ。
「家に行っても誰もいないし!近所に人に聞いて!走って来たの!」
黒間が紙袋を覗くと、昨日買った雑貨とカメラ。そして、軍人手帳が入っていた。
これを紛失したら、懲罰ものである。

「ありがとう！でも、どうして！？」

黒間は理由が思いつかない。

「なんとなく！」

なんとなく、か。

だが、愛の始まりはいつだってなんとなく、なのかもしれない。

愛なんて、たまたま知り合った男女が、たまたまお互いを訳も分からず好きあうことだ。だから、もしも運命というものがあるのだとしたら、これはまさしく運命そのものだ。

黒間はたまらず叫んだ。

「会い行くよ！絶対に、君を迎えに行くから！」

プラットホームエンド。

立ち止る素子に、黒間はその姿が見えなくなるまで手を振り続けた。

帰郷2（後書き）

今回からタイトルを変更しました。
作品のコンセプトをより分かりやすくするためです。

仏印進駐

１９４０年９月２７日　コンポントム飛行場

日独伊仏四国同盟が締結された日は、晴れだった。

黒間以蔵は赤道直下の太陽を見上げ、ずり落ちかけたサングラスをかけ直した。

幸いなことに南部仏印のコンポントムはまだ雨季だ。気温はあまり高くない。しかし、１１月頃の乾季になると気温が４０度近くまで上がる。

氷都のハルビンなら、そろそろ冬支度を終えるころだ。しかし、仏印はこれから暑さの本番だった。

先のことを思いやり、黒間は心の底からウンザリする。

前世で敵機との戦いには負けたことはない。しかし、熱帯の暑さには何度か負けている。熱帯の暑さには伝染病など厄介なオマケがついてくる。

しかし、赤道直下特有の湿度の高いネットリと粘着く空気はどこか懐かしいものだった。

「黒間軍曹、こいつは治りそうでありますか？」

感傷に浸っていた黒間を現実に呼び戻したのは設定隊（基地建設部隊、海軍では設営隊という）の伍長だった。

酷く心配そうな顔でうんともすんとも言わなくなったショベルカーを見上げている。このショベルカーは設定隊が持ち込んだものだ。東亜重工のロゴマークが入っている。

前世では影も形もなかった土木用重機のお陰で、コンポントム飛行場の拡張工事は順調に進んでいた。

前世ではパイロットまで動員した人海戦術で作った滑走路もブルドーザーとロードローラーのお陰であっと言う間に完成した。
当初、７５０m級の滑走路二本しかなかった飛行場も、いまでは１６００m級滑走路を要する立派な空軍基地になった。建設工事も滑走路の拡張から宿舎や掩体壕の工事に移っている。それらも黒間達のようなパイロットの手を煩わせることなく、設定隊の機械達が黙々と作業をこなしてくれている。
おかげで酷く楽ができた。
今後も楽をするためにショベルカーにはただちに戦線復帰してもらわなければならない。

「大丈夫だ。ケーブルの交換で元通りになる」

黒間は手についた機械油を雑巾で拭いながら答えた。見た限り、故障の原因は電源ケーブルの被覆が熱ダレで溶けたことだ。剥き出しになった電線が漏電して短絡したらしい。
木べらでディーゼルエンジンに張り付いたゴムをこそげ落とす。
昔はよくあったことだ。
日本車が滅多なことでは故障という触れ込みで売れるようになったのは、８０年代過ぎてからだ。それ以前は、車とはちょっとしたことで直ぐに壊れるものだった。
ダメになったケーブルの数は2、３つ程度だ。
これぐらいなら直ぐに交換できる。
総取り替えだと3日はかかる。その場合は、嘘でも処置なしと答えるつもりだった。

「そうですか、良かった。ところで軍曹はいつ重機の修理を覚えたのでありますか？戦闘機パイロットというのは、みんなこうなんですか？」
「あー、そのなんだ。まぁ、いろいろあってな」

前世の戦後にこれで飯を食っていた、とは言えなかった。
手早くケーブルの交換をしながら、黒間は曖昧に笑う。
笑顔とは最も都合のいい仮面である。

「エンジンルームのボンネットは開けたまま作業してくれ。雨降りは閉めていいが、そうでないなら放熱のために開けて置いたほうがいい」

少しはマシになるはずだ、と黒間は付け加えた。
ショベルカーのキーを回すと呆気無くエンジンがかかった。一昔前の重機らしく酷い震動だ。マフラーから黒い煙が立ち込める。喉と目が痛くなる。
環境安全基準など欠片も存在しない時代の車だった。動く環境破壊である。しかし、そうであるが故に単純で、修理は至極容易である。
呆気ないものだ。どうということない、つまらない仕事だった。

「ありがとうございます。地獄に仏であります」

しかし、伍長の顔に浮かぶ笑みは本物の感謝そのものだった。
伍長の笑みを見て黒間は一瞬だけ赤道直下の暑さや不快感を忘れる。
そして、礼と共に差し出された紙袋を見た。

「これは？」
「うちの隊長から、お礼に、と」

そうかと頷いて黒間はありがたく仕事の報酬を受け取った。
最初は南方の果物かと思った。バナナやマンゴーの類は甘くて人

気がある。しかし、紙袋は思ったよりも軽かった。

「おつかれさん」

天幕を張っただけのピスト（パイロット用の待機所）に戻ると下から声がした。

見下ろすと半裸の斎田が地面に転がっていた。

極端に暑さに弱いこの男を赤道直下に連れてきたのは間違いだった。もっとも、黒間が連れてきたわけはないし、何が間違いなのかも不明だが。

「居るに作らず、ゐぬるに死せず」

斎田のとなりに腰を下ろし、黒間は言った。

「なんだって？」

「死体のように眠っちゃならぇねって孔子様がおっしゃっている」

紙袋の中身は煙草のパッケージだった。1カートンある。かさばる割に軽いはずだ。

銘柄はゴールデンバット。市販のタバコではこれが一番安い。

「おお、一つくれよ」

「好きにしろ」

黒間はパッケージの一つを手に取り、慣れた手つきで開封。

飛行服のポケットからシルバーのメッキが真新しいライターが靭やかに現れ、点火。

「おい、なんだ。それ」

「ジッポーライター」

黒間は紫煙を吐き出して答えた。

済んだ金属音を響かせて、ライターのキャップを閉じる。

真鍮製のボディーを手の中に弄ぶ。よく手に馴染む。素晴らしい手触りだった。そして、適度に重い。この重量感こそがジッポーの魅力だと黒間は思った。

黒間は銀メッキの輝きに目を細める。

これを平成の御代にオークションにかけたら幾らになろうだろう？益体ものない妄想を黒間は弄ぶ。

ジッポーライターが日本に普及したのは戦後のことである。普及は意外に遅く７０年台以降のことだ。日本はライターの輸出国でアメリカ製の輸入オイルライターなど誰も見向きもしなかった。しかも、戦後に発展したガスライターによって、オイルライターは時代遅れと思われていた。

ジッポーライターが日本市場を開拓するのは、高度経済成長後の富裕な若者向けのファッションアイテムとしてジッポーが認知されてからで、戦前は不遇の時代だった。

しかし、１９４０年時点であっても、如何なる強風下でも確実に着火し、極めて堅牢で操作性に優れ、オイルの交換も容易なジッポーはその実用性と豊富なバリエーションから来るコレクター性によって世界で最も普及したオイルライターだった。

その誕生は１９３３年である。

つまり１９４０年時点で、手に入れようと思えばできないことはなかった。問題は、日本に輸入されていないことである。

黒間がこれを入手したのは、ハルビンのとある古道具だった。中古の日本製ライターに混じって売られていたのだ。

どうして、これが古道具屋に並んでいたのかは不明である。

一つ確かなことはこれがとてつもない掘り出しものであるということだった。

黒間は何食わぬ顔で中古品のライターとしてこれを買い求め、フリントとウィックを交換した。オイルを注入するときちんと火がついた。

素晴らしい。まさにジッポーだった。イッ、ワーク。

「そういえば、お前。煙草は吸わないんじゃなかったか？」

吸殻をもみ消しながら斎田は言った。

一服した後で黒間は答える。

「禁煙はやめだ」

煙草は体に悪い。

２１世紀初頭の禁煙活動を見てきた黒間は喫煙が如何に自分と周囲の健康を害するかを知っている。

「どうして？煙草は体に悪いんだろ？」

だから、俺に残り全部俺に寄越せ、と言いたげ斎田から紙袋を遠ざける。

「なんだよ。ケチか？」

「別にそんなんじゃない」

黒間は煙草のパッケージを一つ斎田に投げてやった。

斎田は器用に空中でキャッチする。

「じゃあ、なんだなんだよ」

「煙草は体に悪い。だが、戦争ほど体に悪くない」

黒間はため息と共に紫煙を吐き出した。
遠くで軍隊ラッパが鳴っていた。非常呼集である。

日本軍は南部仏印進駐以後、対英戦を念頭に置いた情報収集活動に余念がなかった。
偵察の主力は、司令部偵察機と呼ばれる戦略偵察機だった。
司令部偵察機というのは帝国陸軍航空隊の発明品で、その意図は長距離、高高度飛行可能な高速偵察機を用いて、シベリアに展開したソビエト軍の動向を直接探るというものであった。
こうした発想は、後にＵ－２やＳＲ－７１、あるいはスパイ衛星に発展し、国家戦略を左右する存在となるのだが、他国でも同様の発想はあっても機材は爆撃機等の転用に留まっていた。その点で、専用機の開発を進めた帝国陸軍航空隊の先見性は高く評価されるべきものである。
１９４０年現在、帝国空軍の設立でその運用は空軍に移管していたが、司令部偵察機の呼称はそのままであったし、部隊の規模は陸軍時代よりもさらに拡大していた。
それは司令部偵察機が集めるべき情報が、軍事的な分野のみならず、政治経済に及ぶようになっていたからだ。
実際、マレー半島上空でエンジントラブルを起こした司令部偵察機も、偵察したのはプランテーションの作付け状況であった。仕事の発注元は農林省である。農林省の官僚たちは占領予定地の農業政策立案のための資料収集を行なっていたのだ。
司令部偵察機のパイロット達は、アブラヤシの畑を撮影することに何の意味があるのか首を傾げつつも黙々と任務こなし、帰還する

途中で事故に遭った。エンジンが一つ、前触れもなく吹き飛んだのである。

後に明らかになったが、原因はエンジンのオーバークールだった。熱帯でのエンジンの運用データはまだ乏しく、パイロットが誤ってオイルクーラーのフラップを開き過ぎていた。

結果、冷えすぎたシリンダーが熱膨張で歪み、内圧に耐えられなくなりクラックが生じた。クラックから気化ガソリンと高圧空気の混合物が漏れ、プラグスパークで点火。右エンジンが吹き飛ぶ。

墜落したのは百式司令部偵察機だった。

今年、制式採用されたばかりの最新鋭機である。

パイロットは何とか海上まで脱出しようとしたが、海岸線を越えたところで力尽きて不時着水することになった。

機体はサンゴ礁の上に乗り上げ海没することもなく、パイロット達も健在であった。

問題は、最新鋭の司令部偵察機とそのパイロット達の処遇だった。

今まで好き放題に上空から覗き見されてきたイギリス軍がこれを見逃すはずない。容易にそれが予想されたので、日本軍の対応も迅速だった。

帝国海軍は遊弋中だった最寄りの水雷艇を回収のため現場に急行させ、帝国空軍は戦闘機一個大隊をローテーションで投入してその上空を守った。

黒間が一個小隊を率いて、高度３，０００ｍで大鷹型水雷艇４８号の上空を旋回しているのは、概ねこのような理由によるものだった。

当本人は、もちろん何も知らされていない。

行けと言われたところ行って、やれと言われたことをやっているだけだ。

「ハァ・・・」

黒間は大きな欠伸をした。

太陽は天頂を回って、少し西に向けて傾きかけている。眠くなってくる時間だ。

水上艦の上空直掩というのは酷く退屈な任務で、巡航速度でぐるぐると目標の上空を飛び回るだけで、何事も起きなければひたすら暇である。

直掩に出ているのは2個小隊で、別動の小隊は低高度で警戒していた。

合計8機だ。６００ｔの水雷艇1隻の護衛としては、破格と言っていい戦力である。

どうやら上は、この機会に洋上飛行訓練を行うつもりらしかった。これればかりは訓練しすぎて、訓練しすぎることはない。

ＧＰＳやロランＣのないこの時代に、単発単座機の洋上飛行は常に命がけだった。機位を失って燃料がなくなれば即座に墜落、死に至る。

頼りになるのは、小さな磁気コンパス一つだけだ。

一応、空軍の各飛行場には誘導電波発信施設があり、クルシー航法装置を使って方位を割り出すこともできたが、誘導電波を出せば敵に爆撃目標を教えるようなものなので頻繁に使えるものではない。

磁気コンパス以外にジャイロコンパスもあったが、これは地球の自転と同期していないので、１５分置きに磁気コンパスで修正する必要があった。

もちろん、修正作業は手動である。これを怠るとジャイロコンパスが狂ってしまう。

さらに燃料タンクは３０分毎に切り替えしなくてはいけない。そうしないと重量バランスが狂ってしまう。

零式戦には3つの燃料タンクがあり、胴体内と左右主翼にあるタンクを任意に使用できる。長距離飛行の場合は、これに落下タンクが加わるが今回は装備していない。

使う順番は主翼の燃料タンクからだ。これは被弾面積の大きい主

翼から早く可燃物であるガソリンを除くためである。
使った燃料タンクと切り替えた時間を太腿に括りつけた記録盤に書き込み、発信時刻と残燃料から残りの飛行時間を割り出す。これには専用計算尺があり、片手で計算できるようになっていた。
帰りの燃料を考えるとあと1時間は飛んでいられる計算だった。
しかし、これは黒間の乗機に限った話である。
列機の3機は黒間よりも早く限界が来る。理屈は簡単で、黒間の飛行に合せて頻繁に速度を調整しなければならない列機の方が燃料消費にムラが出やすいからだ。
少し余裕を見て帰投時間を決める必要がある。

「それまでに、交代が来てくれないとな」

黒間は列機の様子を見た。
少なくとも編隊の維持に苦労するようなことはない。ノモンハンの後に補充されたヒヨっ子達も今ではたくましく成長した。
まだ不足は多いが、地上滑走でもたついていた春先に比べれば格段の技量向上である。
残りの不足分は、実戦で補っていくしかないだろう。
上もその不足が分かっているから、ローテーションを組んで今日のように長距離飛行をさせている。飛行時間は長ければ長いほどいい。
考えるよりも先に体が動くようにならなければ、空の上では長生きできないのだ。
その時、黒間は北の空に動くものを認めた。
断雲の上、水分過多の水色の空に糸くずのような黒い線が見える。
一瞬、黒間は緊張しかけた。しかし、目を凝らすとそれが零式戦の編隊であることが分かる。4機編隊が2つ見える。交代の直掩機だ。
黒間は愁眉を開き、無線で小隊に呼びかけた。

「2時方向に注目、何が見える？」

列機のパイロット達が黒間の指し示す方向に視線を向けた。

接近する友軍機を使ったちょっとした索敵訓練だ。

「友軍機です」

「数は？」

空かさず黒間は質問した。

友軍機と答えたのは、4番機の門田明伍長だ。

「数は6、じゃなくて8」

まず正解といったところだ。

「距離は？」

「1万五千です」

残念だが、そうではない。

「だいたい1万ってところだな。見積もり過ぎだな」

ちなみに、黒間が友軍機に編隊に気付いたのはおよそ20，000m付近のことだ。

目の良さには自信があった。生の人参を齧ってビタミンを補給しているのは、このためである。マズイ肝油ドロップを食べ続けられるのも、このためだった。

黒間は機をバンクさせ、機首を北に向けた。

帰投の時間である。

大鷹型水雷艇４８号が現場に到着したのは夜半だった。
夜光虫が輝く海を割って水雷艇が速度を落としていく。
月光を反射する海面に、角ばった水雷艇のシルエットが落ちていた。灯火を管制しているので、明るい海面に比した強いコントラストが、より水雷艇の印象を堅くしている。
特型駆逐艦以来、日本の水雷軽艦艇は艦首甲板の乾舷部のみ高い短船首楼型船体が伝統的に採用され、航洋性の確保に一役買っていたが、大鷹型水雷艇も多分に漏れず同様の形式を採用していた。
その船体は多くの場合、優美ともいえるカーブを描くのが常であったが、大鷹型水雷艇はそれに反して角ばった直線的な構成をしていた。
２０世紀後半に現れるステルス艦にも似ているが、実態としては量産性を重視した結果で、ステルス性は全く考慮されていない。
このような船を帝國海軍を建造するに至った理由は、主に第二次ロンドン条約に起因している。
５年間の延長が決定したワシントン、ロンドン海軍軍縮条約の規定により帝国海軍はＡ－１４０型戦艦（４６サンチ砲搭載の史上最大の戦艦）の建造を始めとする海軍拡張計画が全て白紙になっていた。
新型戦艦の計画中止はそれはそれで帝国海軍に大混乱を巻き起こしたが、それ以上に問題となっていたのが補助艦の数的劣勢の固定化だった。
ロンドン海軍軍縮条約は補助艦の質的、数的な制限を設けており、補助艦を用いて主力艦の数的劣勢を補うという帝国海軍の軍備構想を根幹から否定していた。

帝国海軍はこの軍備構想に基づき特型駆逐艦という極めて革新的な大型駆逐艦の整備に注力していたが、軍縮条約でこれに待ったがかかっていた。

対応策として軍縮条約の範囲内で許される限りの船体に、特型駆逐艦と同等の武装を施した白露型駆逐艦などが建造されていたが、無理な重武装が祟って復元性に難がある船となってしまった。

白露型駆逐艦は後に復元性の回復させるため、武装を一部撤去することになるのだが、それによって平凡な性能の駆逐艦になってしまっている。

これに満足できなかった帝国海軍は特型駆逐艦の正当な後継艦として甲型と呼ばれる新型駆逐艦の構想を練っていたが、第二次ロンドン海軍軍縮条約によって新型戦艦の建造計画共々白紙撤回となっていた。

結果、帝国海軍は艦隊決戦で勝てないという結論に至る。

そしてそこから、帝国海軍は艦隊決戦の主力を条約制限外の航空機（空母艦上機ではない）に転換し、戦いの土俵を抜本的に改める決断をすることになる。

それが帝国空軍設立に至る最初の一歩だった。

しかし、帝国海軍は海軍であったので、やはり水上艦を全て放棄することに抵抗があり、夜戦に活路があるのではないかとも考えていた。

即ち、航空機による昼間決戦と水上艦による夜襲追撃である。

航空機による昼間決戦で勝利した後、撤退するアメリカ太平洋艦隊を夜襲で追撃するというわけだ。

これは日本海海戦でバルチック艦隊に止めを刺した水雷艇、駆逐艦による夜襲の再来であり、ロシア海軍の戦艦４隻を撃沈したという実績もある。

この夜襲構想において主力となるのは、これもまた条約外の戦力である６００ｔ以下の水雷艇だった。

小型の水雷艇は視認性が低く、的が小さいので阻止砲火も当てに

くい。よって夜襲には最適の機材である。魚雷も近接雷撃のため、高価で取扱いが難しい酸素魚雷ではなく、旧式の空気魚雷を用いた。

被弾すれば一撃で戦闘能力を失ってしまうが、６００ｔの水雷艇と条約型巡洋艦や戦艦なら相打ちでもお釣りがくる計算だった。

そして、夜が明ければ航空攻撃を反復し、陸上攻撃機の攻撃圏から敵が離脱したら、航洋性が高く航続距離の長い大型駆逐艦や巡洋艦、戦艦、空母を使って日付変更線の向うまで追撃し、アメリカ太平洋艦隊を完全に殲滅するのである。

日本海海戦もそうだが、艦隊決戦とはただ一度の戦闘で勝敗が決することは殆どなく、翌日以降の追撃戦や遭遇戦が連続的に発生するものだった。

水雷艇のような小型艦であれば消耗しても直ぐに補充できる。相打ち覚悟の突撃であれば、消耗に耐える数の確保は必須だった。また、数が多ければ、多方面に戦力を貼り付けておくことができた。そうした貼り付け戦力の土台の上がなければ、主力艦隊を機動運用することなどできない。

生産を容易にするため設計段階から建造簡略化を図っており、それが角ばった直線的な４８号挺のラインに現れていた。使用する鋼材も高価な高張力鋼ではなく、入手容易な普通鋼である。

さらに駆潜艇と船体を共通化し、ブロック工法を用いることで容易に生産の切り替えできるようになっていた。実際、駆潜艇と水雷艇の差異は武装と機関だけで、変更は船体ブロックの入れ替えだけで済む。

第二次世界大戦勃発で軍縮条約は破棄されていたが、完全な失効は２年後である。それまで建造できる戦闘艦は条約外の水雷艇／駆潜艇しかない。そのため日本全国の小規模造船所では昼夜兼行で水雷艇／駆潜艇をマスプロダクトしていた。４８号挺もそのうちの一艦である。

よって、単艦で格上の敵と遭遇した場合にとり得る選択肢はあまり多くなかった。

艦載艇を下ろすために停船した４８号挺を背後からサーチライトの強光が照らした。

４８号挺を暗闇から引きずりだしたのは、シンガポールを根拠地とするイギリス東洋艦隊の駆逐艦、ヴァンパイアだった。

ヴァンパイアはアドミラルティ?級駆逐艦の一艦で、就役は１９１７年の老兵である。

だが、老兵であっても駆逐艦は、駆逐艦だ。

ちなみに駆逐艦とは、水雷艇駆逐艦の略語で、本来は水雷挺を狩るために作られた船である。つまり、水雷艇の天敵とも言うべき存在だった。

ヴァンパイアの出現は、４８号挺にとって全く不意打ちだった。

４８号挺にも水上見張り員はいたが、彼らはヴァンパイアの接近にまるで気づいていなかった。マスプロダクトされた水雷艇の乗員の練度など、推して知るべしである。

ヴァンパイアから発光信号で退去勧告がなされる。

この時点で４８号挺はイギリスの領海にあった。領海内であっても、軍民問わずあらゆる船舶は無害通航権は保障されているが、４８号挺の現況はどのような解釈を以ってしても無害とは言えない。

警告従わなければ、次は警告射撃が待っていた。最後は実力行使である。

ヴァンパイアは４門の主砲を既に照準を終えている。

対して４８号挺がヴァンパイアに向けられる主砲は１門に過ぎない。

彼我の砲火力は４対１だった。恐ろしく分は悪い。熊鷹型水雷艇は重量軽減のために主砲を２門に減じており、前後に１門ずつしか装備していなかった。

艦首砲を加えても２対１にしかならず、艦首砲を使うために回頭すれば、回頭中は艦尾砲が使えなくなる。そして、回頭中に一方的な滅多打ちを食らうのは火を見るより明らかだった。

完全に詰みである。

ヴァンパイアは老朽艦であったが、そうであるがゆえに老練な艦長を頂いていた。

４８号挺に残された道は、尻尾を巻いて逃げ去るか、非常に分の悪い博打に訴えるか、どちらかしかない。

日英は敵対していたが、交戦状態ではなかった。どちらの船も自衛以外の武力行使は許可されていない。そうであれば、残された道は一つしかない。

はずだった。

新造艦の４８号挺を任された経験の浅い中尉の艇長は、少し別の考え方をした。

艦首砲に発砲を命じたのである。

目標はヴァンパイアではなく、浅瀬に乗り上げた司令部偵察機だった。

４８号挺の任務は司令部偵察機とパイロットの回収だったが、それが果たせない場合はイギリス軍の手にわたらないように機材を破壊するよう命令されていた。

今がまさにその時であるという判断だったが、これはまずい対応だった。自艦の安全が全く確保されていない状況ですることではない。このような苦し紛れに訴えるのは経験不足の証左である。

突然の砲撃に驚いたヴァンパイアが発砲。期せずして、２艦は戦闘状態に突入した。

結果は当然ながら一方的なもので、ヴァンパイアは一発も被弾しないうちに４８号挺を大破させた。

悪手を打った件の艇長は交戦から5分後足らずで、艦橋に直撃弾を浴びて即死。一応、責任を果たした形にはなったけれど、何の問題解決にもなっていない。

さらに悪い事に、破壊工作を図った司令部偵察機はパイロット共々無傷であった。夜間砲撃の命中率というものはとても低い。

本土を失った祖国に、久しぶりの勝利を齎したヴァンパイアは、勇敢だが愚かな敵に敬意を表しつつ、偵察機の回収作業に移った。

勝ち誇るヴァンパイアだったが、彼らはこの後に待ち受ける運命にまだ気付いていなかった。
予期せぬ敗北に熱り立つ東洋の軍事大国は、既に報復の手札を切っていたのである。

夜明け前に離陸した黒間は日の出を洋上で迎えた。
海面に反射する朝陽に目をやられないようにサングラスをかけなおす。
偶にエンジンの排気温度や回転計に目をやる。
厳密に数値を確認することは殆ど無い。いつもと同じ数値が出ているかどうかが問題だった。計器の針がいつもと違う場所にあったら、何か異常があることが分かる。
黒間は視線を空に戻した。
司令部偵察機がエンジントラブルで墜落したらしいことが噂になっていたので、エンジンの取扱に少し過敏になっていた。
ちなみに、司令部偵察機の製造元は零式戦と同じ三菱で、両者は同じヒ式水冷１，０００馬力エンジンを使用していた。水冷エンジンは前方投影面積が小さくできるので、速度への要求が高い司令部偵察機や戦闘機に向いている。
大丈夫だとは思うが、用心するこしたことはない。
黒間は視線を下げて、護衛対象の爆撃機を見た。
川崎の双発爆撃機だった。正式には９９式双発軽爆撃機だ。数は６機。これは前世でも何度となく護衛してきた軽爆撃機である。
シベリアからニューギニアまで、帝国陸軍航空隊が飛んだ全ての戦場に投入された傑作機だ。現在は空軍機だが、所属は違っても仕

事の内容に変化はない。
これを護衛する黒間の仕事も前世と同じだった。護衛の零式戦は8機。
合計15機。これと同じ編成の攻撃隊が他に2群ある。
駆逐艦1隻を葬り去るには過剰とも言える戦力だった。しかし、広大な洋上からたった1隻の駆逐艦を探し出すためにはこれだけでは足りない。
他に先行する水上偵察機があったが、海の広さに比べればその数は十分とは言えない。

『同胞の敵討ちだ』

出撃前の訓示を脳内で反芻し、黒間は鼻を鳴らした。
同時にため息をつく。
戦後の民主主義に毒されすぎたのか、今ひとつ当世流の堅苦しいやり口に肩が凝る。
人類皆兄弟というわけにはいかないのだろうか？
もちろん、人類初の殺人が兄弟殺しであるのはしかと存じあげているけれど。なぜ、カインはアベルを野に誘ったのだろうか？
余計なことを考えつつも黒間は空から敵を探しだそうとしていた。
この辺りは黒間は全く実際的で、情け容赦なかった。
確実に敵を先に見つけ、先手をとって一方的に撃墜する。格闘戦のような疲れることは出来るだけしない。安全、確実がモットーでなければ長生きできない。敵からの一切の反撃を受けぬままに一撃で殺すのが最善手である。
今日の天気は晴れ。赤道直下にしては雲が少ない。
発達した積乱雲がないのはよい傾向だ。積乱雲は高度10，000m超えて成長することもある。
爆弾を抱いた戦闘機で敵艦に突入するほど攻撃精神旺盛な帝国陸海軍も、積乱雲には突入しない。

積乱雲の中は、突風と雷の巣だ。例えＢ２９のような大型爆撃機であっても、積乱雲に突っ込んだら生きては出られない。
その時、電子音が黒間の耳を打った。

「無線封鎖解除。クロ。今のは聞こえたか？」

第１編隊を率いる中隊長の篠原が言った。
とても嬉しそうだった。
ホロンバイルの撃墜王は生粋のファイターパイロットである。久方ぶりの空戦の予感に胸をときめかせている。

「ヒ連送ですね。かなり近い」

続けて送信されてくる緯度、経度の情報を手元のフロップボードのチャートに書き込む。
ヒ連送とは、飛行機見ユの略符号だ。
送信してきたのは先行する水上偵察機らしい。現在位置から１００ｋｍほど南だ。巡航速度でも３０分足らずで到着する。
続けて、テ連送が来た。敵艦見ユの略符号。

「変針する。我に続け」

護衛の爆撃機が変針し、戦闘機隊がその後に続く。
軽爆の排気管が一際強くブラストを吐いた。
長距離飛行のために限界まで希薄燃焼させていたエンジンが加速のために濃いガソリンを与えられたためだ。
黒間もＭＣ（ミクスチャ・コントロール）のレバーを自動に切り替え、遅れないように速度を上げる。
ただし、対艦攻撃のため軽爆が高度を下げていくのに対して戦闘機隊は高度を下げない。

空対空戦闘のセオリーだった。高度と速度を維持せよ。

理想なのは、最高速度まで加速してから戦場に突入することだった。しかし、爆撃機の護衛をしなければならないので速度は上げられない。

敵機は何機だろう？

黒間は出撃前のブリーフィングの内容を思い出す。イギリス空軍がマレー半島に配備している戦闘機は２０機足らず。高性能なスピットファイアはいない。

機種はアメリカ製のブリュースターＦ２Ａ。これは前世でも対戦したことがある。感想は特にない。パイロットは優秀だったと思う。しかし、隼相手に格闘戦を挑むのは無謀だった。

駆逐艦の護衛に全部を投入することはないとして、上空に張り付いているのは５、６機か。或いはもっと少ないかもしれない。

偵察機の類を追い払うだけなら、３機１個小隊でも十分だ。

こちらは８機。数で圧倒できるならそれに越したことはない。ただし、爆撃機護衛のために、あまり自由には動けない。例え敵機を落とすことができても、爆撃機を落とされては無意味だ。

黒間は深呼吸を繰り返す。

ノモンハン以来の実戦である。

顔に嫌な感じの脂が浮くのが分かった。

スロットルから左手を離し、強く握る。そして、開く。手の表面に粘り気を感じ、航空手袋を外して、飛行服に擦りつけて落とす。

まだ動悸があるような気がして落ち着かない。

そこで黒間は酸素マスクを装着し、酸素瓶のコックを捻った。冷えた酸素を吸う。すると気分が落ち着いた。

酸素マスクは高高度飛行の際に使うものだが、気が立っている吸うと鎮静作用がある。

ただし、吸い過ぎると酔うので気をつけなくてはいけない。もう一つ注意事項があり、絶対にタバコを吸いながら酸素マスクを使っていけない。顔面を大やけどすることになる。そういう事故が戦時

中に幾つかあった。
会敵予想時刻が来る。

「敵機発見。２時方向。３機」

中隊長の篠原中尉が言った。
撃墜王は誰よりも良い目をもっていた。時々、見えないはずのものまで見えているのではないかと思う時がある。
黒間は燃料タンクを切り替え、落下増槽のレバーを引いた。
零式戦は増槽を切り離す。

「俺の小隊で敵機を叩く。クロ小隊は爆撃機を援護しろ」

篠原機が加速する。列機が後に続く。
４対３なら、負けない。ただの４機ではない。撃墜王の率いる４機だ。
戦闘は呆気無く終わった。上方からの一撃離脱で敵機は火を吹いて落ちていった。生き残りも追い回され、駆逐艦の護衛どころではない。
黒間はそれを傍観しているだけだった。
あれほど難渋して心の整理をつけたのに、戦闘の実相など、こんなものである。
軽爆６機は散開して高度を下げる。海面近くまで下げる。
既に敵機がいないので、黒間は高みの見物を決め込む。最高の見世物だ。
海面近くまで降下した軽爆は、２隊に分かれて駆逐艦を包囲した。左右からの挟撃だ。雷撃でもするのかという低空突進だったが、軽爆が抱いているのは魚雷ではなく爆弾だ。
離陸前の打ち合わせでは護衛や進撃、帰投の手順の話はあったが、具体的にどのような攻撃が行われるのかは明らかではなかった。

駆逐艦は舵を切って挟撃から逃れようとする。だが、動きは亀のように遅い。遅いといっても、速度は３０ｋｔは出ていた。軽爆の方が早すぎるのだ。

軽爆が機敏に旋回し、駆逐艦の真横を捉えた。

駆逐艦の対空砲が撃ち始める。しかし、弾幕は薄い。そもそも弾幕とは言えないような射撃だ。１９４５年の米空母機動部隊の対空砲火を見たことがある黒間には何とも言えない長閑な射撃に写る。

しかし、対空砲火に向かって突進する軽爆の後ろ姿には純粋にしびれた。

アレは勇気そのものである。

駆逐艦に肉薄した軽爆がついに爆弾を投下。

黒間は、海面にいくつも波紋が疾走るのを見た。

そうか、反跳爆撃か。

黒間はようやく軽爆部隊の意図するところを掴んだ。

前世でも、何度か見たことがある。主に、敵がそれを日本の輸送船に食らわすのを。アメリカ軍のＢ２５爆撃機が多用した手だ。

反跳爆撃とは、爆弾を石の水切りに見立てて艦船の側面を狙う対艦攻撃戦術の一つだ。２５０ｋｇ爆弾が小石のように海面を跳ぶのだ。雷撃と違って、反跳する爆弾は投下する軽爆と同等のスピードなので機動による回避は殆ど不可能である。

命中した爆弾は船舷を滑り落ちて、海面に没してから遅動信管によって爆発する。水中爆発で船の水面下を破壊するのは魚雷と同じだ。

ただし、魚雷と違って投下速度の制限は小さい。

黒間はリアルタイムで見聞きしてたフォークランド紛争ではジェット戦闘機のミラージュがイギリス海軍の駆逐艦や輸送船を反跳爆撃で攻撃していた。

精密機械の塊である航空魚雷は投下速度に制限があり、対艦ミサ

イルが一般化するまではジェット戦闘機による反跳爆撃が唯一、有効な対艦攻撃戦術だった。

帝国空軍が反跳爆撃を雷撃の代替品として採用したのも同じ理由である。

この時期に九六式陸上攻撃機が装備していた九一式魚雷は投下速度制限があり、１３０ｋｔ以上で投下することができなかった。今後、さらに高速化が見込まれる陸上攻撃機の主力兵装としては、これでは使い物にならない。

魚雷の改良で対応可能という意見もあったが、空軍化の流れの中で有耶無耶になり、その中から反跳爆撃が現れ、雷撃不要論が一般化していた。

雷撃不要論とはその名の通り航空雷撃を廃止し、対艦攻撃を爆撃のみに限定する非常にラディカルな主張である。

しかし、陸軍航空隊出身者の大半が支これを支持し、海軍航空隊も支持者は少なくなかった。

実際、一本で家が一軒立つ航空魚雷は高価、複雑で量産困難であったし、実戦で使えるように調整するのに専門の調整員が必要だった。魚雷に比べて遥かに安価で整備しやすい通常爆弾で同じことができるなら、敢て魚雷を用いる意味はなくなってしまう。

軽爆撃機が投下した２５０ｋｇ爆弾は合計で１２発。

その内の８発が船舷に直撃し、海面に落ちた後で遅延信管を作動させて水中爆発を起こしていた。発生したバブルパルスが駆逐艦の水面下を乱打し、大破口が空いた。

駆逐艦の行き足が止まる。

水中爆発でスクリューシャフトが曲がったためだ。同時に舵が破壊され、操舵不能になる。破口からの浸水も急速に拡大。浮力が急速に失われ、駆逐艦は急速に沈みつつあった。

以上がシャム湾事件と呼ばれる日英の軍事衝突の顛末である。

四国同盟の締結と日本軍の南部仏印進駐により悪化していた日英関係はこれにより完全に破局し、日本政府は1週間後に国内世論の支持受ける形でイギリスとの国交断絶を宣言した。

アメリカ合州国は日本の南下を阻止するため追加経済制裁を発動し、対日全面禁輸と在米資産凍結を発表したがこれは殆ど無意味だった。

何故ならば、三ヶ月後の１９４０年１２月８日。全ての準備を完了した日本軍は宣戦布告同時攻撃を敢行。マレー半島、ボルネオ島に奇襲上陸したからだ。

これによって欧州の戦火は全世界に広がり、文字通りの意味で第二次世界大戦が始まった。

マレー半島電撃戦

１９４０年１２月２７日　マレー半島

日本の戦史研究において、マレー半島での戦闘は多くの場合日本軍の快進撃と不甲斐ないイギリス軍が対比して語られることが多い。しかし、戦闘の実相を掘り下げると必ずしもそうとばかりは言えなかった。

イギリス軍の主力は本国兵ではなくインド歩兵だったが、士気が低く弱兵とされた彼らも陣地に籠もった場合は頑強な抵抗を示した。陣地というものは物理的な防御機能のみならず、歩兵を一箇所に密集配置させることで士気を維持するという効果があるからだ。

陣地から出て散兵になるとインド歩兵は容易に士気崩壊を起こしたが、陣地内で密集して白人の士官に監督されている限りは日本人歩兵と互角だった。

日本軍はそうした陣地に接触すると正面から攻めるのではなく迂回して背後に回りこみ包囲した。

陣地の弱点は動けないことである。

マレー半島の道路は基本的に一本道で、迂回路はないに等しい。よって、迂回する場合はゴム林やジャングルの道無き道を歩兵と戦車が走破した。

イギリス軍はジャングルやゴム林を歩兵はともかく戦車が走破できるとは考えていなかったので、背後に戦車が現れると容易にパニックを起こした。

日本軍は戦車にドーザーを装着することで道なき場所に道を啓開し、工兵が火炎放射器でジャングルを焼き払って進撃してきた。

だが、いつでも迂回ができるとは限らない。

陣地とは本来、そういう場所に設置されるべきものであった。
その場合は正面攻撃となるが、このような場合に威力を発揮する兵器を日本軍はもっていた。

「道の両脇にトーチカがある。潰してくれないか」

前線から命からがら引き上げてきた歩兵中尉が言った。
戦闘服のあちこちに泥と血が滲んでいる。
彼の率いる中隊はジャングルを抜ける道路をトラックで移動中に機関銃の十字砲火を受けた。結果は散々なもので、殆ど何にもできないままに多くの兵を失うことになった。
先行する偵察部隊を上手くやり過ごしたイギリス軍のトーチカからの攻撃だ。

「分かりました。やりましょう」

頷いた砲兵少尉は簡単な打ち合わせでトーチカの場所を確認すると操縦手に前進を命じた。
小隊長車に続いて、３両の１００式突撃砲が前進する。
突撃砲というのはドイツ陸軍の発明品で、歩兵の火力支援兵器の一種だった。よって、砲の一種であるため戦車のように見えてもそれを動かすのは砲兵である。
戦車の車体に装甲化された固定戦闘室と主砲を持ち、主に榴弾の直接照準で歩兵が単独で撃破困難なトーチカを破壊するために使用される。
他国ではこうした任務は戦車の役割とされ、イギリスでは専用の歩兵戦車が開発されていた。
ドイツで突撃砲のような兵器が生まれたのは、戦車が歩兵支援兵器ではなく、騎兵に代わる機動兵器として認識されていたためである。

しかし、第一字世界大戦の戦訓から機関銃に歩兵が対抗するには、機関銃に耐えられる程度に装甲化された自走火力支援兵器が必要なのは明らかだった。

そこで戦車の車体に砲を固定した突撃砲というアイデアが生まれ、それが日独の技術交流で日本陸軍に持ち込まれていた。

ただし、第二次世界大戦の勃発から日本陸軍が制式化する予定だった3号戦車は遂に国産化が果たせず、3号戦車よりも開発が先行していた4号戦車の車体が、日本製突撃砲の車体に使用されていた。

半ば偶然ではあったが、このことから１００式突撃砲は車体に余裕があるため、ドイツ軍の突撃砲よりも榴弾威力の大きい１０榴を主砲として採用していた。

初速の低い榴弾砲なので対戦車戦闘は不得手だが、榴弾でも上手く直撃させることができれば砲弾重量と爆圧で大抵の戦車は撃破可能だった。装甲が貫通できなくとも、走行装置を破損させたり、爆圧で乗員が死傷する場合があるからだ。

３両の突撃砲は相互支援可能な間合いを維持しつつ前進する。その背後には歩兵が続いた。

突撃砲は歩兵の盾だった。歩兵達は機動力重視で装甲の薄い中戦車よりも、８０ｍｍの前面装甲を張った突撃砲の後ろに立つことを好んだ。

ただし、突撃砲はあらゆる対戦車火器の標的にされるので、直後に立つのは危険だった。

既に歩兵中隊との戦闘で位置を暴露していた火点に１０榴が振舞われる。

低速で飛ぶ砲弾は人間の目でも十分に追うことができた。

ジャングル中に隠れたトーチカに榴弾が直撃し、丸太と土嚢が簡単にちぎれ飛ぶ。

下草と灌木が爆風と破片でなぎ倒され、次々に隠されたトーチカが顕になっていた。

仲間を散々に痛めつけたトーチカが簡単に破壊されるのを見て、

歩兵達は喝采を叫んだが、中隊長ともなると冷静だった。
攻撃開始からイギリス軍の反撃が全くないのだ。
これは明らかにおかしい。
中隊長は小隊長の車体後部に設置された車内通話機の受話器をとる。この手の装備は歩兵支援を第一義とする突撃砲独特の装備だった。

「砲撃中止！砲撃中止！」

中隊長は受話器に向かって怒鳴る。
戦場音楽に負けない程度に大声を出さないと通話機があっても話が通じない。突撃砲のエンジン音だけで耳がどうにかなるほどの騒音なのだ。
突撃砲が砲撃を中止すると歩兵が慎重にトーチカを一つ一つを探索した。
その際にもイギリス軍の反撃はなかったし、最後のトーチカの探索が終わるまで誰も発砲しなかった。

「逃げられたな」

砲兵少尉はキューポラに背を預け、うっそりとつぶやいた。
自分の小隊に損害がなかっただけに彼は冷静だった。安堵していると言ってさえいい。しかし、気のないところを歩兵中尉に見せると気分を悪くされると思ったので、見た目は緊張感を滴らせていた。
空気を読めるところが彼のいいところだった。

「どうしますか、少尉殿」

少尉ほど空気の読めない通信手は、緊張から解放された明るい声で言った。

「どうもこうもない。追撃する」

砲兵少尉は渋い声で答える。

しかし、それが不可能であることは火を見るより明らかだった。

イギリス軍は撤退する際に追撃を遅延させるためにあらゆるトラップを仕掛けているだろうし、街道にある橋はとっくの昔の爆破されているだろう。

今日もまた、イギリス軍は土地を一つ失い、日本軍は時間を失う。

お定まりのパターンだった。

「だが、手がないってわけじゃない」

砲兵少尉は、通信手に無線を後方につなげるように命じた。

空軍に航空攻撃を要請するのだ。

鋼鉄のガルーダが、楕円翼を怒らせて急降下する。

九九式軽爆撃機は高度３，０００ｍにて目標を捕捉。背面飛行からダイブブレーキを使い速度を制御しつつ、高度１，０００ｍまで降下する。精密照準はこの高度から行う。投弾高度は概ね４００ｍ程度だった。降下角度は６０度。

黒間はそれを上空援護していた。軽爆隊の突撃を見守る。そして、半ば呆れ、半ば尊敬していた。

急降下爆撃がこういうものであることは黒間も承知していたが、何度見ても頭がおかしいのではないかと思えてくる。

九九式軽爆撃機の降下速度は時速３００～４００ｋｍだ。

つまり1分間に軽爆は5～6km移動していることになる。400m移動するのに要する時間は15秒足らずだ。

少しでも引き起こしに遅滞、遅延が生じれば爆弾を抱いたまま地上に激突する。

戦闘機パイロットでは考えもよらない無茶な戦技であった。

意外なことかもしれないが、戦闘機はあのような無茶な急降下や引き起こしは滅多にしない。特に急降下からの引き起こしは速度を大幅に失うので下策である。そして、機体が保たない。

また、1機の軽爆が急降下に入った。石ころのように地上に向かって落ちて行く。

プロペラ回転圏を避けるためにスウィングアームが作動。250kg爆弾を虚空に放り出す。

急降下爆撃は、精密誘導兵器が登場する以前に正確な爆撃を行うためのテクニックである。

発明したのはアメリカ海軍航空隊で、そこからインスピレーションを得たドイツ空軍が初めて実戦で大規模に運用し、1940年春の西方戦役で大戦果を収めた。

ドイツ空軍の急降下爆撃機ユンカース87は、前線部隊に直協し、急降下爆撃による精密攻撃で前進するドイツ軍装甲師団に火力支援を与えた。これがドイツ軍の勝因の一つになった。

ドイツ軍がアンデルヌの森を突破した時、連合国軍首脳部はそれがまだ対処可能な攻撃であると考えていた。何故ならば、さらなる進撃には砲兵の展開が必要不可欠だからだ。砲兵の展開までに防衛準備を整えれば、ドイツ軍の攻勢は頓挫するはずである。そして、砲兵の展開には時間がかかる。猶予時間はまだ随分と残っているはずだった。

しかし、連合国軍の予想に反して、ドイツ軍は航空支援だけで前進を継続。結果、連合国軍はドイツ軍の展開速度に追随できず、パニックから組織崩壊を起こして自滅した。

これに触発された帝国空軍が、マレー半島に投入したのが九九式

軽爆撃機だった。
元は帝国海軍が陸上基地に配備しようとしていた陸上爆撃機だ。その前身はドイツ空軍で急降下爆撃機の開発コンペに敗れたＨｅ１１８である。
ドイツ空軍のコンペに敗れたＨｅ１１８だったが、輸出先の日本では引き込み脚や爆弾倉の採用等、設計の先進性が高く評価され、制式採用を射止めていた。
ただし、東亜重工でライセンス生産される際に、設計に幾つかの修正を受けていた。急降下爆撃時の運動性不足を解消するため、ダイブブレーキ兼用フラップをＳＢＤドーントレスを参考に穴空け式フラップに改めていた。また、エンジンをダイムラーベンツＢＤ６００Ｃ１２気筒液冷８５０馬力から、川崎のハ９?乙１２気筒液冷１，０００馬力に換装している。
もっとも、エンジン換装で得た余剰馬力の大半は、防弾装備の追加に充てているので速度の向上は思ったほどではなかった。
即ち、戦闘機の護衛なくしてはまともに運用できない。

「おーおー、当たった。当たった」

黒間は零式戦を背面飛行させ、軽爆部隊の爆撃を見ていた。
上空から見ていると着弾地点一瞬だけ半球状の閃光と衝撃波が現れるのが肉眼で見て取れる。逃げるイギリス軍の車列が吹き飛び、街道からボンネットトラックが転げ落ちるのが分かった。
今日は風が強い。爆煙がなびき、破壊の跡がすぐに顕になった。
２５０ｋｇ爆弾はトラック縦列の中央で連続して着弾していた。爆撃跡が放射状に伸び、そこから２０~３０ｍの間にトラックや装甲車、或いは正体不明の物体に成り果てた炭化水素とタンパク質の化合物が転がっていた。
なぎ倒された木々を炎が舐め、濃緑色の大地に赤い華を添える。まるで木の葉のようだ。黒間はそう思った。

マレー半島の濃緑色の大地走る街道は葉脈のように見える。そして、そこを通ってイギリス軍は南へ敗走していた。

前世よりも1年ほど早く戦争は始まったが、マレー作戦は概ね史実と似たような経過を辿っていた。

コタバル・シンゴラへの奇襲上陸から始まり、孔明の罠ではないかと勘ぐりたくなるほどの逃げ腰なイギリス軍の背中に銃弾の雨を浴びせながら、マレー半島を縦断する電撃戦である。

帝国空軍はその先駆けとして、敗走するイギリス軍の車列を連日爆撃していた。

イギリス空軍の反撃は殆ど無い。

黒間も開戦からこの方、イギリス戦闘機をほとんど見ていなかった。水雷艇の仇討ち合戦の時、一度見たきりだ。

どうやらイギリス軍はマトモな反撃を諦めているらしい。本土を失って戦力の回復も儘ならないのでは戦力温存策も仕方がないのだろう。

だが、爆撃でなぎ倒される兵士たちにとってはたまったものではないはずだ。

立ち上る黒煙を見下ろし、あの場所に立たされたはないなと黒間は思った。

前世では何度か立たされたことがある。

だから、地上で彼らが感じたものがリアルに想像することができた。

まったく、生きた心地がしない。

「卯月1より、火星1へ。集マレ。集マレ。これより帰投する」

最近になって使用を制式化された無線符牒を使って、軽爆隊を呼び出す。

この場合、卯月1が黒間機を現し、火星が軽爆隊の編隊長機を意味した。無線符牒は、概ね上から指示で割り振られる。必ずしも意

味がある言葉ではないこともある。ただし、あまり意味不明だったり日本語でない言葉は指定されない。

低空から上昇してくる軽爆と編隊を組み、戦爆連合をつくって進路を北に向ける。

コタバル飛行場まで往復で1時間。

まだ日は昇ったばかりだ。日暮れまで休憩を挟みつつ可能な限り反復攻撃する。

長い一日になりそうだった。

日が落ちると急降下爆撃機は飛ばなくなる。

精密攻撃が信条の急降下爆撃機は目視の光学照準ができなくなる夜間に飛ぶことはない。

ヘトヘトになった黒間は夕食を済ますとそそくさと寝台に入り、さっさと寝付いた。

黒間にはどこでも眠れるという便利な特技はなかったが、日中の疲労が速やかに黒間の意識に麻酔をかけて眠りへと誘った。

嫌な夢を見た。

何者かに追われる夢だ。ここではないどこかの町中だった。どのような訳か不明だが、黒間は誰かに追われていて、街辻をこそこそと逃げまわり、時には民家に押し入って追跡をかわし、時には便所に隠れたりして、必死に逃げ惑っている。

一体何から逃げているのか分からないのが不気味だった。ただ、ひたすら何かから逃げ惑っている。

これは夢だと思っても目が覚めない。

試しに思い切り自分の顔を殴ってみると痛くない。夢だ。だが、覚めそうで覚めない。

つまり、悪夢だった。かなり性質の悪いタイプの。
黒間は夢を見ている時、これを夢だと自覚することがしばしばあった。
しかし、夢の中で自由に振る舞うことは殆どできなかった。もしもそんなことができる方法があるのなら、１００万円までなら出してもいいとさえ思う。
だが、所詮夢は夢にすぎない。睡眠中に脳が見せる幻だ。いつかは覚める。
覚醒は一瞬だった。
寝台から飛び起きた黒間は決して広くない兵営の緊張した空気を感じとった。
しかし、混乱はしていない。
皆、既に実戦の洗礼をくぐり抜けた戦闘機パイロット達だ。落ち着いたものである。
警報が鳴っていた。空襲警報だ。

「退避しよう。荷物は置いておけ」

蚊帳をたくし上げ、外に出た黒間は暗闇の中を歩いた。走ったりはしない。走らなくても防空壕はすぐそこにある。
空を見ると月が出ていた。満月に近い月だ。海辺の基地だから、風が爽やかだった。なんとなく、変に今の情景には不似合いである。
防空壕は土を盛って、中を繰り抜いて作られた簡素な土饅頭だ。
爆弾や弾薬の梱包箱の板材と丸太で補強された壕内は、一坪ほどの広さだ。入り口はコの字型に曲がっている。高速で飛散する爆弾の破片が中に飛び込まないようにするための工夫だ。

「点呼をとるぞ」

簡単に点呼をとり、全員が退避したことが確認された。

これでひとまず安心だった。とりあえずは。

壕内の空気は重い。この急造品の防空壕は、爆撃に耐えることができなかった。至近弾でも危うい。衝撃波で壕が崩れた場合、生き埋めになる恐れがあった。

それでも壕に退避するのは、対空砲の破片避けには効果があるからだ。

基地は、８８ｍｍ高射砲と４０ｍｍ高射機関砲に守られている。これらの発射する砲弾の破片が空からライフル弾並の速度で降ってくるのだ。直撃すれば即死である。

８８ｍｍ高射砲は、ドイツ製のＦＬＡＫ１８がライセンス生産されたもので、制式には九八式８糎野戦高射砲といった。ノモンハンでは対戦車戦闘にも活躍した傑作砲である。日本独自の改良が施されていて、オリジナルのＦＬＡＫ１８とは全く別者とされていた。

４０ｍｍ高射機関砲は、スウェーデンのボフォース社製の傑作対空機関砲で、制式化は８８ｍｍ高射砲と同じ年だった。こちらも制式化後に日本独自の改良が施されている。

この場合、日本独自の改良とは射撃速度の改善や砲弾の破壊力の向上を意味するものではなく射撃管制装置の追加を意味していた。

即ち、日本が全世界で唯一国のみ量産化に成功しているトランジスタを使用した電子式高射算定具と同じくトランジスタ式の検波、論理回路、岡部式水冷分割陽極型マグネトロン及びパラボナアンテナから構成されるマイクロ波（ＵＨＦ帯）レーダーを組み合わせた射撃管制システムへの適合である。

この場合、マイクロ波レーダーによる精密な測距と電算機による射撃諸元の高速計算。そして、計算結果を電気的（データーリンク）に出力し、各砲座はそれに従って射撃を行う。実際、各砲座の操作要員がすることは射撃管制装置の指示どおりに仰角と方位を合わせ、指揮官の撃てという合図で引き金を引くことだけだった。大戦後半になるとそれすら機械が自動的に行うようになり、人間がやることは弾の補充と引き金を引くことだけになる。

４０ｍｍ高射機関砲の場合、砲側の光学照準で対空射撃を行ったとき1機撃墜に要する砲弾の数は平均して5，０００発だった。これがレーダー射撃管制装置を用いると僅か１５０発で1機撃墜可能となる。

これは対空戦闘の革命だった。

実際、射撃実験を行った帝国陸軍の担当将校は結果を信じることができず、不正があると考えて3回も試験をやり直したとされる。

射撃管制装置の製造元は東亜重工の電気通信部門で、同じ構成のシステムを下は２０ｍｍ級の軽高射機関砲から上は１００ｍｍ高射砲（長１０サンチ）まで製造し、日本軍に供給していた。

高射機関砲は通常４門で1個中隊として運用される。1基の射撃管制装置で４つの砲座を統制可能だった。４０ｍｍ高射機関砲の射撃速度は毎分およそ１２０発なので、４門同時攻撃の場合は１５秒足らずで1機撃墜できる計算である。およそ1分で1個小隊が全滅する数値だ。

なお、同じ４０ｍｍ高射機関砲を採用していたアメリカ軍は、光学照準の機械式射撃管制装置を用いて大戦末期に９００発で1機撃墜可能となるまで射撃精度を高めたが、大戦中に日本軍と同じ地平に到達することができなかったとされる。

８８ｍｍ高射砲も同様の射撃管制装置を装備していたが、１９４０年時点では４０ｍｍ高射機関砲ほどの精度はまだ出ていなかった。高射砲がこれと同じ精度を発揮するには、近接信管が導入される１９４２年まで待たなくてはならない。

夜間爆撃に出動したブリストル　ブレニムＭｋ?は自分が連合国軍の航空攻撃を絶望的な水準までに追い込む凶悪な対空攻撃システムに狙われていることに気付いていなかった。

もちろん、黒間もそんなことは知らない。

不安に揺れる心を抑えこみ、平気な顔を装ってタバコをふかしていた。小隊長にもなるとこういう腹芸ができないといけなくなる。

照明は電灯ではなくサイダーの瓶を利用してつくったお手製のカ

ンテラだった。
ゆらゆらと揺れる炎が防空壕に詰めた人間の横顔を照らしている。
皆起きていると思ったが、寝ている者もいた。中隊長の篠原だ。
なんて人だ。黒間は少し呆れる。
それから暫く何も起きないまま時間が過ぎていった。
真空のような静けさだ。皆、息を潜めている。
焦れてきた。しかし、できることは何もない。

「第2見張所。15度。60キロ近づく!」

入り口付近に設置された野戦電話を片手に電信兵が叫んだ。
喉に絡みつくような空気が、さらに粘度を増すようだ。
どうやら敵は海側から来るらしい。
正しい判断だ。黒間はそう思った。
コタバル飛行場はシャム湾に面した海沿の飛行場だ。コタバルに上陸した陸軍部隊が苦労して確保した飛行場で、海から近いので荷揚げに便利だった。
よって、海側から侵入すると対空砲火に撃たれる時間を極限できる。海の上に対空砲は設置できないからだ。
一応、駆潜艇の類が警戒しているのだが、海側から侵入されると発見が遅くなる。

「そういえば、そうだった」
「どうしたんだ?」

相棒の斎田が眠そうに目を擦って言った。

「いや、大したことじゃないんだが」

黒間は慌てて取り繕うように頭を振る。

同時に右手の二の腕を見た。日に焼けた赤銅色の素肌だ。それ以上でも、それ以下でもない。しかし、何故かシカシカと痛むような気がした。

幻痛だ。

黒間は傷ひとつない素肌を揉んだ。

前世にはここに一つ大きな傷跡があった。前世の緒戦のできごとだ。マレー半島のコタバル飛行場に前進してすぐにイギリス軍の夜間爆撃があった。

軽爆撃機が夜間に警戒の薄くなる海側から侵入してきたのだ。警報が鳴ったのは爆撃が終わってからで、炸裂した爆弾の破片が黒間の二の腕を掠めた。一二針も縫う羽目になったはずだ。

見張りは何をしたいたのかと怒り狂った覚えがある。

しかし、夜間爆撃には目視での見張りでは限界があったし、トランペットの化け物のような対空聴音機もあまり役に立たなかった。

「電探でもあるのかな?」

「練炭?おい、こんなところで七輪なんか炊いたら、みんな一酸化炭素中毒であの世行きだぜ?」

斎田が余計なことを言った。

「練炭じゃない。電探だ。レーダーのことだ」

「レーダー?なんだそれ?」

黒間も上手く説明できる自信がなかった。

電波を使って敵を探す機械ということぐらいしか知らない。詳しい原理など分かるわけもない。

黒間は知らないことだったが、基地から離れた丘の上には八木アンテナを数十も並べた簪の化け物のような早期警戒レーダーが設置され、四方八方に電波を放っていた。

この時期の日本軍の使用する早期警戒レーダーは概ね２００ｋｍ程度の探知距離を発揮した。実用的な探知距離は更に短くなるが、これは他国のレーダーも同様である。

探知距離２００ｋｍというのは驚異的な遠距離に聞こえるが、接近中のブレニムＭｋ？が最高速力を発揮すると３０分程度の飛び去ってしまう距離でしかない。

この頃から運動性の高い双発爆撃機は高高度から侵入して、緩降下によって時速６００ｋｍ近くまで加速して爆撃する緩降下爆撃が常識的になる。よって、レーダーによる探知から爆撃開始まで時間的猶予は概ね２０分程度だった。

防空壕に避難してタバコ吸う時間ぐらいはある。

黒間はタバコに火を点け、美味そうに吸った。

しかし、要撃戦闘をするのは如何にも少ない。

スクランブル待機中の戦闘機が離陸するまでに5分。零式戦の場合は高度5，０００ｍまで上昇するのにさらに5、6分かかる。編隊をつくって占位運動にさらに１０分程度を要するので、高速爆撃機を阻止するのは極めて困難だった。加えて戦闘効率も甚だしく悪い。

史実において、ドイツ空軍が実用化したロケット戦闘機Ｍｅ１６３は計画段階から様々な欠陥を指摘されていたにも関わらず配備が強行されたのは、その驚異的な上昇性能が要撃戦闘の効率化に資すると判断されたためである。

決して、伍長の趣味ではない。

各国の空軍関係者はこの問題を熟知しており、概ね早期警戒レーダーの前進配備で対処時間を伸ばす方向で解決を図っていた。

大陸国のドイツなどがそれに当て嵌まる。

問題は日本のような島国で、しかも大都市が沿岸部にあるような国だった。海の上にレーダーサイトを作るわけにもいかない。艦船を前方配置するという手もあるが効率は悪い。レーダーの探知距離は概ね発信源の高度に比例するからだ。レーダーサイトが概ね山岳

部や丘陵地帯であるのはそのためである。
高いところに登れば、遠くまで見渡せる。これは光波であろうと電波であろうと変りない。地球は丸いのだ。水平線までの距離は高度に比例する。
ならば、いっそレーダーサイトを空中に浮かべてしまえばいいのではないかという発想が出てくる。しかし、それはまだ形にはなっていなかった。
さらに強引な解決方法として、超高出力の短波を高空の電離層にぶつけて反射波を得ることで水平線以遠の目標を探知する技術の開発も行われていた。これもまだ形にはなっていない。
少なくとも日本以外では。

「第2見張所。15度。20キロ、さらに近づく！」

電信兵の悲鳴が聞こえたので、黒間はタバコの火を消した。
いよいよ近い。壕の中で一層、皆が息をひそめる。
やがて、降り注ぐような爆音が聞こえてきた。対空砲の射撃音だ。爆音は2種類ある。砲声と爆ぜる砲弾の爆発音だ。
何もすることがないので、黒間はじっと壕の壁を見ていた。
よく見ると壁にヤモリが張り付いていた。緑色のヤモリだ。ひょっとするとヤモリではないのかもしれない。ヤモリは漢字で家守と書く。
この壕は大丈夫だろう。全く根拠はないけれど、黒間はそう思った。
やがて、腹に響く地動がした。
天井から土がハラハラと落ちてくる。生きた心地がしない。

「落ちたな」

パイロット特有の勘で、敵機が撃墜されたのが分かった。

「ああ、落ちたな。近いのかな？」

黒間と斎田は恐る恐る壕から出た。

夜天を赤々と炎が染めてた。ガソリン火災独特の赤黒い炎だ。

「なぁ、見に行ってみないか？なんか戦利品があるかもしれないぜ」

「やめとけ」

黒間は眉を潜めて答えた。

墜落した機が抱えている不発弾が爆発したらどうするのか。

「大丈夫さ。怖いのか？」

「分かった。行けばいいんだろう」

怖いのかと問われて、怖いと答える戦闘機パイロットはあまりいない。

度胸、怖いもの知らずは戦闘機パイロットのステイタスだからだ。

黒間はどちらかと言えば慎重なタイプで、冷静さこそ戦場での生きる術と考えている男だったが、臆病と思われたいわけではない。

墜落地点は思ったほど遠くなかった。

灯火を落とした真っ暗闇の中を歩いて行くと徐々に墜落した飛行機の輪郭が見えてくる。

輪郭といっても粉々になった残骸だった。

どうやら墜落した時に抱えていた爆弾が爆発したのか、敵機は木っ端微塵になったらしい。炎上地点はまだ随分先だというのに、地面のあちこちに敵機の破片が転がっている。

黒間は前世の戦後に史上最悪とされた航空機事故を思いだす。

群馬県山中に墜落したジャンボジェット機もこんな有様だった。

黒間は破片を一つ拾ってみた。まだ熱い。強力な力で引きちぎら

れたようだった。破片をライターの火にかざしてみた。アルファベットで何かが書かれている。意味は不明だった。
そこら中に似たような残骸が落ちている。
これは片付けが大変だ。黒間はそう思った。
同時に何とも力のない風景だと感じた。無力さが投げやりなままに放り出された

「おい、こっちを見てみろよ。イギリス軍の軍帽だぜ」

斎田が道端に落ちているつば付きの軍帽を拾おうとしていた。
黒間は何故かとても嫌な予感を覚えた。

「待て！拾うな！」

黒間が声を上げる間もなく、斎田が軍帽を拾い上げていた。
そして、悲鳴を上げて飛び退いた。
布製と帽子とは思えないほど重々しい動作で軍帽が落下し、湿った音を立てる。
両手を真っ赤に染めた斎田が目を丸くして慄いていた。

「クロ、俺、今」
「言わんでいい！」

黒間は内側を見ないようにして軍帽を拾い上げ、暗がりの中に放り込んだ。
軍帽の重さはしばらく忘れられそうにない。

「もう帰ろう」
「ああ、そうだな」

やはり来るべきではなかった。黒間はそう思った。
基地に引き返すために踵を返した時、黒間は自分が何かを踏みつけにしていることに気づく。
一瞬、黒間は冷え冷えとしたものを首筋に覚えたが、それが直ぐに紙切れであることが分かった。より正確には写真だ。

「どうしたんだ？」
「写真だ。若い女だな」

黒間は拾い上げた写真を斎田に見せた。

「美人だな。ハルビンの飾り窓を思い出すぜ。白人の女ってのは、肌がいまいちなんだが・・・」
「やめろ。聞きたくもない」

友人の猥談ほど反応に困るものはない。

「その写真、ひょっとしてあの帽子の持ち主のツレなんじゃないか」
「かもしれないな」

写真の中でブロンドの女が何も知らないまま微笑んでいた。
背景は屋外で、ひょっとすると自宅の庭かもしれない。モノクロ写真だが、陰影は柔らかい。季節は春かもしれなかった。
黒間はその写真を懐に収めた。
もしも機会があるのなら、この写真の君に彼が死んだことを伝えてやろうと思ったのだ。
その日が何時来るかは全く想像もつかなかったけれど。

シンガポール航空戦

１９４１年２月７日　コタバル飛行場

夜明け前でも、マレー半島の空気は冷えない。

それでも日中よりは過ごしやすいものと観念し、黒間は夏用飛行服に袖を通す。夏用といえど、半袖ではない。保温のためにコットンが入っている。高度５，０００まで上がれば四季はなくなる。そこは常冬の世界だ。

加えて、革製の飛行服は連日の酷使により異臭を発していた。目と鼻を刺激する匂いに黒間は顔をしかめる。

それでもしばらくすると慣れて何も感じなくなるのだから不思議なものだ。

きっと人間はどんなことにでも慣れてしまう生き物なのだ。黒間はそう思った。

そうでなければ戦争なんてできないだろう。

もう２度と御免だと思ったことを、転生してもう一度繰り返している自分は何なのか？

黒間はそれを思うとどうしようもない気分になる。度を越えた愚物か、痴れ者か、狂人か、自分は人間として何か重要なものが欠けているのではないか？

こんなことを考えてしまうのは、決まって暇な時だった。

小人閑居して不善を為す。暇になると碌なことがない。実際には、出撃前の緊張を孕んだ時間の筈なのだが、黒間には相対的に余裕があった。

戦慣れした兵士の姿である。

淡々と身支度を整えていると自転車に乗って、主計の人間が来た。

大荷物を抱えている。

「曹長。今日の弁当です」

黒間は彼が去る前に尋ねた。

「今日はなんだ？」

「稲荷寿司ですよ」

自分が食べられないのに、彼は妙に嬉しそうに言った。

黒間は何故か罪悪感を覚える。

アルマイトの滑やかな感触の弁当箱を開くと、稲荷寿司がぎっしり詰め込んであった。

パイロットの食事は片手で食べられるものばかりだ。重爆なら普通の弁当も有りだが、単発単座の戦闘で両手を離すことは不可能だ。握り飯が多かったが、太巻きや稲荷寿司が出ることもあった。

中でも一番人気は稲荷寿司だ。砂糖と醤油で味付けした油揚げに詰め込めるだけ酢飯を詰め込んだデッカイ奴だ。大きさは大人の握りこぶし程度ある。スーパーの寿司コーナーでお目にかかれない代物だ。

黒間は蓋を閉じて、弁当箱を用具袋にしまった。

「また、稲荷寿司か。偶には変わったものが食いたいな」

相棒の斎田三矢が唇を尖らせた。

「贅沢言うな」

黒間の声には強い非難の響きがあった。

斎田は肩を竦めて鼻白んだ。

中隊の食料事情は悪くなかった。食料の現地調達が上手くいっているからだ。この場合の現地調達とは武力による略奪を意味しない。現地の業者から軍票などを利用した商取引による調達という意味だ。

マレー半島で味噌や醤油などの調味料の調達は不可能だったが、米は比較的安価に手に入った。隣国のタイ王国は米の輸出国だからだ。内地でも貧困層の食べる米は基本的にタイ米だった。日本人が皆、日本産の米を食べられるようになるのは、戦後も随分後になってのことだった。

黒間は前世のニューギニア戦の末期を知っている。それは悲惨の一言に尽きる。

少なくとも今は、あの絶望そのものような雑草粥は食べなくて済んでいる。苦味とえぐ味を極めたようなあの気色の悪い色のゲル状の物体を食事と呼ばなくていいのは幸いである。

「あんまりカリカリするなよ。タバコはないか?」

黒間はポケットを探ると、くしゃくしゃになったパッケージが出てきた。

「ないのか?」

「いや、あるさ」

二本だけポケットの奥から出てきた。日本から持ち込んだタバコはこれで最後だ。

「お前、自分のは?」

「あるなら、訊いたりしないよ」

だったら、もう少し済まなさそうな顔をしろよと思ったが、黒間は斎田のこのようなところを好いていた。

遠慮も気づかいも必要もない人間関係というのはとても貴重だ。

「悪いな」

タバコに火を点けながら斎田は言った。

「後で返せよ」

斎田から火を貰って黒間は答える。

一度深くを吸って、肺の奥まで紫煙を馴染ませる。甘いしびれるような、それでイガっらぽい感覚。透き通るようなニコチンの覚醒作用。

タバコとはこんなにもいいものだったのかと改めて思った。これが悪者扱いされるようになったのは何時頃からだろう。昭和の終わりごろだっただろうか。

しばし、黒間は物思いに耽る。

無言の時間になった。斎田も何も言わなかった。タバコで口がふさがっているからだ。しかし、喫煙時の沈黙は少しも気まずくはない。

黒間は斎田を見た。

部屋はまだ暗い。電灯はあるが灯火管制で深いフードを被っていた。薄暗い室内で、タバコの赤い灯りだけが斎田の尖った顎を闇から浮かび上がらせていた。

「シンガポールでタバコは買えるかな?」

「ああ、買えるよ。山ほどな」

黒間は前世の記憶を呼び戻す。

昭南市と名を変えたシンガポールで、洋モクを山ほど買い集めた覚えがある。

まだ、緒戦の頃の話だ。日本軍の軍票でもまだ買い物ができた時期だった。洋モクの味も思い出深いが、町中で食べたアイスクリームとココナッツジュースの甘さといったら極楽の味だった。

黒間の顔がニヤける。

「何でそんなこと知ってるんだ?」

首を傾げて斎田は言った。

「さて、なんとなく・・・かな」

逸らかすため宿舎を出ると東の空が白み始めていた。

暖気運転中の零式戦が列線にずらりと並んでいる。機付きの整備員がクランクでイナーシャを回していた。エンジンがかかるとガソリンの刺激的な匂いが辺りに立ち込める。水分過多な空気をペラがかき混ぜ、プロペラ後流で椰子の木が揺れる。

出撃前の日常風景だ。

これを日常だと認識している自分の感覚に黒間は軽い頭痛を覚えた。

こめかみを揉む黒間の脇を爆弾を満載した運搬車が通り過ぎる。

運搬車とはムカデのように専用貨車を引く小型の牽引車だ。爆弾以外にも様々なものを引っ張れるように作られている。重爆や輸送機を駐機スペースまで牽引するのにも使われる。

不意に運搬車が止まった。黒間は貨車に積んだ爆弾を見る。250kg爆弾である。

今、この爆弾が不意に破裂しようものなら、黒間は肉片1つ残ることなくあの世に旅立てる。

火葬の手間が省けるのはいいことか、悪いこととか。苦痛を感じることなく死ねるのは、幸か不幸か?あるいはただ虚しいだけか。

不意に、黒間は過激な冗談を思いつく。

或いは死に至る悪ふざけか。

「おい。これを見てくれ」

斎田を呼び止め、黒間はフィルターまで吸ったタバコを掲げてみせた。

まだ火が点いている。

「どうした?」

「火を消そうと思って」

黒間はそれを無造作に爆弾に押し付けてもみ消した。

斎田が目を丸くし、次に破顔し、黒間の真似をした。

運搬車を転がす整備員は笑い転げる二人に気づいたが、その理由には気付かなかった。気づいていたら激怒するだけでは済まなかっただろう。

緊張が適当に解れたところで、二人は自分の列線に向かった。

滑走路には、離陸の順番を待つ重爆が行列を作っていた。翼端灯の赤、青、緑の光が怪しく光っている。

風防から離陸の許可を待つ重爆のパイロット達が顔を出していた。皆、強張った顔をしている。対照的に黒間達は緩んだ顔をしていた。

「よくもこんなにもかき集めたもんだ」

斎田が感心したように言う。

帝国空軍は戦力を集中を終え、大攻勢に打って出ようとしていた。

黒間は排気ガスを孕んだ朝の空気を吸い込む。

「たまには変わったのものが食いたいな」

黒間にはなんとなく予感があった。
今日は特別な日になるだろうということを。

「贅沢じゃなかったのか？」

誤解であることを示すために、黒間は右手を飛行機の形にしてひらひらと振った。
斎田はああ、なるほどという顔をして頷いた。

「たしかに、ハリケーンやヴッファローの相手は飽きたな」
「ああ、そうだ」

一息切って、黒間は言った。

「スピットファイアが食いたいな」

コタバル、シンゴラに日本軍が上陸してから2ヶ月。１９４１年1月３１日、遂に日本軍はシンガポール対岸、ジョホール・バルに達した。
マレー半島1，１００ｋｍをイギリス軍と闘いつつ縦断した日本軍は、イギリス連邦の一大戦略拠点であるシンガポールを2月１１日（紀元節）までに攻略する計画を立て、ジョホール・バル対岸に大軍を集結させていた。
これまでの戦いの細い経過は割愛するが、まず日本軍の圧勝ともいうべき状況だった。
意気上がる日本軍だったが、決して楽な戦いだったわけではない。
それどころか1月３１日時点では、前線において弾薬の備蓄が殆

ど底を尽きかけていたほどだった。

理由は簡単で、進撃速度に補給が追いついていないからだ。

上陸地点であるコタバル・シンゴラは1，000km後方にある。補給線は伸びきっていた。前線に弾薬の運搬するため莫大な数のトラック、馬匹が稼働していたが、輸送手段そのものが莫大な燃料と食料を消費する。さらにコタバル・シンゴラにある物資集積所と前線の間にある道路は大半が未舗装だった。輸送効率は酷く悪い。頼みの綱は鉄道だったがイギリス軍は妨害のために尽く橋梁を破壊してから後退するので、すぐに鉄道路線が軍の補給路として機能するわけではない。

幸いにも橋梁の修復は入念な資材の準備と独立工兵隊の大量投入により事前の計画どおりに推移しており、前線への弾薬移送は計画通りに進んでいた。

しかし、前線での消費速度を上回るほど早いわけではない。

快進撃に見える日本軍の勝利は、実際のところは薄氷を踏む勝利だったと言える。

もっとも仮に弾薬の移送が事前の想定以下で推移したとしても、日本軍の勝利は変わらなかったという意見もある。

なぜならば、イギリス軍は日本軍以上に弾薬が不足していたからだ。

1月31日の時点で、シンガポールに籠城したイギリス軍は、弾薬のストックは3日分しかなかった。

そして、補充の見込みもない。

英国本土陥落の余波で国家レベルの物流が死んでいるためだ。制空権や制海権は既にないが、それが維持されていたとしても手の施しようがない状況だった。

カナダに疎開した軍需工場での新規生産も全く進んでいない。戦前に蓄えたストックは本土と共に失われていた。

つまり、この時期のイギリス軍は近代の軍隊としてはもはや死に体も同然だったと言える。

そして、さらに悪いことにこの弾薬不足は今次大戦中に回復する見込みがないということだった。

植民地帝国であった英連邦は、植民地に近代的な工業基盤を持っていない。持っていないというよりは意図して作らせなかった。そんなことをしては、本土に住む国民の職を奪うことになりかねないからだ。

植民地は工業原料と供給地と本土で生産された製品の消費地として存在し、本土に生産手段を独占することで大英帝国は繁栄してきた。

そのイギリスが本土を失ってしまったのだから、マレー半島やボルネオ島北部での戦闘は最初から敗北が決まっているようなものだった。

世界最強の王立海軍も今は動けない。大半の艦艇が本土脱出戦で傷ついていた。損傷した艦は北米の港でいつ始まるか分からない修理を待っていたし、修理中の船は間に合いそうにない。そもそも艦艇の弾薬庫はほとんど空なのだ。

近辺で援軍を出せるのはオーストラリアぐらいだったが、こちらは自国の防衛を固めるのに忙しかった。オランダはさっさと蘭印の中立を宣言し、戦争そのものから離脱を図っている最中である。

戦略レベルで、シンガポールに立て籠もったイギリス軍が勝利する可能性は完全に失われていた。

それでも、総攻撃に先立って行われた日本軍の降伏勧告が尽く跳ね除けられたのは、ジョンブルの意地に他ならない。

かつての同盟国に、戦争を教育してやるのだ。

「凄い対空砲火だな」

黒間は空を黒く染める高射砲の弾幕を見て、そう呟いた。

日本空軍はシンガポール侵攻に先立ち、７２時間の連続空爆を実施していた。

黒間が護衛してきた九七式重爆が弾幕の中を進撃していく。編隊は乱れない。雁行隊形のまま爆撃目標に向かっていく。

戦闘機隊は安全な場所からそれを見ていた。

なんという勇気だろうか。

黒間は愁眉を開く。

急降下爆撃機の曲芸じみた戦い方もある意味恐るべきものだが、重爆の戦いほど気合が入っているとは思わない。連中は根性が違う。

高射砲に一方的に滅多打ちされるのは怖い。

黒間は根っからの戦闘機パイロットなので、それがどういうものなのかは経験したことがない。想像するしかないが、それがロクでもないことは容易に想像がつく。

何しろ、空が荒れ狂うのだ。

破裂した砲弾から爆轟と共にスプリンターが飛び出し、音速の数倍のスピートで乱舞し、ありとあらゆるものを切り裂く。炸薬の生み出す衝撃波は重爆をちっぽな木の葉のように揺さぶる。人間など嵐に翻弄される鳥かごの中の小鳥でしかない。

高射砲の弾幕射撃とはそういうものだった。対空砲の直撃する確率が１０，０００分の１程度しかないといっても怖いものは怖い。

そこに正面から突っ込むクソ度胸など黒間は持ち合わせていないし、そういうのは戦闘機パイロットの仕事ではない。

戦闘機は空軍の花型だった。しかし、実戦慣れした戦闘機パイロットほど爆撃屋に一定の敬意を払う。

ただし、それでもやはり戦闘機が一番であることは言うまでもないことだった。

なぜならば・・・

「簪より、白鷺へ。簪より、白鷺へ。敵機発見、多数。８時方向」

爆撃隊から悲鳴のような通報が入る。

トランジスタ式無線通信機の感度は良好。真空管式の無線通信装

置など、全く問題にならない。前世との違いを実感する一瞬だ。

「白鷺より、簪へ。落ち着け。高射砲に撃たれている間は大丈夫だ」

中隊長の篠原がなだめるように言う。

爆撃機は強靭である。対空砲火をもともせず敵陣に突撃する。爆撃機は恐ろしい。常に破壊をばら撒くのは爆撃機だ。

だが、その爆撃機も戦闘機の前には無力だ。

だから戦闘機が一番偉いし、戦闘機パイロットは空軍の花形なのだ。

「白鷺より、小鳥達へ。まだ仕掛けるなよ」

芝居がかった口調で篠原が中隊に指示を出す。

その声は冷静そのものだった。しかし、この天才肌の撃墜王と付き合いが長い黒間はそれが仮初のものと気づく。本当は嬉しくて堪らないと言ったところだ。

ノモンハンの撃墜王はマレー半島では撃墜王になれていない。

敵がいないからだ。

イギリス軍は貴重な、というよりも絶滅寸前な戦闘機を消耗することを恐れ、温存策をとっていた。

それを最後の戦いにぶつけて来た形だ。

根っから戦闘機パイロットである篠原が喜ばないわけない。喜びを通りぬけ、歓喜してきた。

もちろん、それは黒間も同じだ。

敵機はおよそ１７，１８機。こちらは１２機。若干、数は向うの方が多い。だが、質はこちらの方が上だ。敵はいかにもトロそうな空冷のヴッファロー、それに液冷のハリケーン。その混成編隊だ。空力特性の異る機種で編隊を組むのは悪手だ。足の引っ張り合いになりかねない。普通はしない。つまり、それだけ敵が追いつめられ

ているということだ。

『さて・・・どうする?』

会敵しても空戦が直ちに始まるとは限らない。お互いを視認していても、有利な位置を確保するまで占位運動に時間を費やすことが多い。ただちに突撃するような馬鹿は長生きできない。

敵機の狙いは爆撃機なのは間違いない。だが、高射砲に撃たれている間は爆撃機に近寄れない。同士討ちに成りかねないからだ。基本、対空砲は有効射程圏内に入れば敵味方の区別なく撃つ。

よって仕掛けるポイントは、爆撃機が爆弾を投下して、高射砲の弾幕から出た直後だろう。チャンスは一度だけ。重爆は鈍重だが、爆撃を終えた後なら速度も出るし、緩降下で加速することもできる。逃げに徹する重爆を追撃するのは意外と難しい。護衛の戦闘機がいるならなおさらだ。

結果として、爆撃機を間に挟んで、日英の戦闘機が並走するという一見、奇妙な展開になった。後は仕掛けるタイミングの読み合いになる。

この場合、先に仕掛けるのはイギリス軍だ。まず彼らが爆撃機に向かう。その側背を黒間達が突く。

ただし、側背が突けるかは仕掛けのタイミング次第だ。早すぎても、遅すぎても仕損じる。早く仕掛ければ、攻撃を避けられた後、爆撃機が一撃を食らう。遅すぎても爆撃機がやられる。

戦力の少ないイギリス軍は一撃したら逃げるだろうから、チャンスは一度きりしかない。仕掛けのタイミングを決めるのは中隊長の篠原だ。黒間はその判断に絶対的な信頼が置ける。心配する方が失礼になるほどだ。

じわりと手の平に汗が滲む。

重爆はまだ対空砲の弾幕に包まれている。シンガポールの市街地

上空を通過。爆撃進路に入る。
地上の様子はどうなんだろう。
緊張のあまり、ふと益体もないことを考える。都会の喧騒を１００万倍にしたようなものか。とにかく対空砲火はやかましい。
まだどちらも仕掛けない。
じっと睨み合う。タイミングを図り合う。
重爆は爆弾を投下。編隊は弾幕の中、東に向かって旋回する。さぁ、いよいよだ。
まだ重爆は弾幕に包まれている。１機が直撃を浴びて爆散する。
あとちょっとだったのに、運がない。
そこで、黒間は胃にごろりとした違和感を覚えた。
嫌な感じだ。
なんとなく、このままではイケないと感じた。鼻の頭に浮いた汗が危機を叫んでいる。

「全機、散れ！緊急回避！」

篠原が叫んだ。
考えるよりも早く黒間の体が動いた。フットバーを蹴り、ラダーとエルロンを連動させ、零式戦は素早く身を翻した。
だが、全員がそれを出来るわけではなかった。
反応の遅れた１機が、真下からの一撃を喰らう。
ブリティッシュ３０口径弾が零式戦のジュラルミンに無数の死を穿つ。黒間は、一撃を喰らった零式戦の風防ガラスが赤く染まるのを見た。
それまで力強く大気を掴んでいたプロペラが止まる。後は重力に従って落ちるだけになる零式戦。その脇を恐ろしいスピードで抜ける機影が１つ。
黒間はそれを目で追った。
赤道直下の水色の空を切り裂く楕円形の翼。零式戦が野暮ったく

見えるほど滑らかで秀麗なフォルム。あまり視界の良くなさそうな小さな風防。力強く排気する12気筒液冷エンジン。

誰かが叫んだ。

「スピットファイア！！」

来るべきものが来たという興奮が黒間を襲った。

同時に、凄まじいまでの闘志が漲った。全身に興奮が駆け抜ける。だが、黒間は思いど止まった。

幾多の実戦経験が戦況を敏感に読み取り、打つべき手を黒間に啓示していた。

今は爆撃機の護衛が最優先だった。

スピットファイアの奇襲と同時にイギリス軍戦闘機部隊が重爆に殺到していた。

援護は間に合いそうにない。スピットファイアの奇襲はそれを狙ったものだ。

「斎田、安藤、ついて来い！」

黒間は機体を上昇横転させ、重爆隊の上空に小隊4機を占位させる。

敵戦闘機の襲撃を受けた重爆隊は防御機銃で反撃していた。しかし、既に1機がエンジンから火を吹いていた。

炎が見る間に領土を広げる。

アレは落ちるな。

黒間は苦いものが胸に広がるのを覚えた。同時に、瀕死の重爆を銃撃する敵機に怒りを滾らせる。

「これ以上させるかッ！」

上方から逆落としに零式戦は襲いかかった。４丁の九八式固定機関銃が弾雨を降らせる。牽制射撃。ヴッファローは機首を翻す。

だが、件の重爆は左主翼で小爆発を起こし、そのまま空中分解した。赤黒いガソリン特有の炎に混ざって、ジェラルミンの銀が煌めく。

黒間は報復の対象を求めてヴッファローに迫る。

零式戦の追撃を受けたヴッファローは降下して離脱を図った。しかし、少し遅い。加速は軽量の零式戦が圧倒的に勝る。これに逆落としの降下速度を加えて、零式戦は既にトップスピードに達していた。光学照準器の円環にヴッファローの後背を捉えるのに、３０秒も要らない。

黒間は操縦桿の発射レバーを２０ｍｍ機関砲に切り替える。

だが、少し遠い。

「後方にスピットファイア！」

斎田から警報が飛んできた。

振り返ると後方上空にあの楕円翼があった。

その時、黒間はスピットファイアが単機であることに気がつく。

コンマ数秒の後、そのパイロットの勇気に舌を巻いた。

そも、あのスピットファイアは最初から単機だった。１２機の零式戦の編隊に単機で突入するなど、正気の沙汰ではない。あるいは、自機の性能と腕前によほど自信があるのか。

この場合は、後者だ。

黒間は即座に決断した。このままでは自分が狩られる。

「斎田。後方のスピットを頼む！」

「承知した！」

黒間は小隊に２つに割った。４機編隊制はこういう時に便利だ。

斎田は僚機を引き連れ、加速で得た速度を高度に替えて急上昇。スピットファイアの進路を塞ぎかかる。黒間は後方の安全を確保。

だが、後方に気を配る内にヴッファローが離脱に成功しつつあった。

殆ど全ての性能において零式戦に劣るヴッファローも1つだけ零式戦に勝るものがあった。それは急降下性能だ。零式戦は時速６４０ｋｍを超えると機体が保たない。軽量化で同世代機より頭1つ抜けた加速、上昇性能を得た代償の1つだ。

だが、それでもやりようはある。

黒間は発射レバーを機銃に切り替える。まだ、遠い。４００ｍはある。有効射程距離外。それでも、撃った。当たらなくても問題ない。

撃たれたヴッファローは回避のために機体を滑らせる。

ヒヨッ子のやり方だ。黒間はそう思った。

プロはそんなことをしない。プロはこの距離なら機銃弾が当たらないことを知っている。あるいは、喰らっても問題ないと割り切れる。この距離では、３０口径では防弾板を抜けない。

機体を滑らせるとはどういうことか。それは単純に時間あたりの移動量が増えることだ。同時に余計な機動で速度を失う。後方に敵機が迫っているときにこれをやると致命傷になる。

黒間は照準器の円環の理にヴッファローを捉える。

発射レバーを同時発射に切り替える。レバーに握った。５丁の機関砲、機銃が火を噴く。

最も破壊的なのはイスパノ・スイザ２０ｍｍモーターカノンだ。薬室に込められた機関砲弾が２．５ｍの砲身から秒速８８０ｍで撃ち出された。同時発射の７．９２ｍｍ弾と初速は殆ど変わらない。だが、弾頭重量は一桁違う。そして、３０口径では使用不能な炸裂弾が使える。単発機なら、1、2発で落ちる。

ヴッファローの最後は悲惨だった。彼が直撃したのは炸裂弾だったからだ。

一撃で、機体構造が吹き飛ぶ。モノコック構造が破綻し、風圧を支えられなくなる。ヴッファローは空中分解。

黒間は慌てて破片を避ける。

スコアを1つ伸ばした余韻に浸る余裕はない。

黒間は操縦桿を引いて自機を上昇させる。零式戦は速度を高度に代えて急上昇。

高所から戦場を俯瞰し、黒間は戦いが既に終わっていることを知る。重爆は対空砲を回避するため海上に離脱。イギリス軍の戦闘機は殆どが一撃離脱に徹していた。

黒間が喰ったのは命令違反を犯して重爆に貼りついていたバカだけだ。

損失は重爆1、戦闘機1。重爆は被弾多数、死傷者多数といった所か。いいようにしてやられた。

「クソッ！」

あのスピットファイアはエースだ。

腕もいいが、戦上手だ。これだけの状況をあのスピットファイアはたった1機で作り上げた。きっと、遠くのものがよく見えるいい目をしているのだろう。

「斎田、どこだ？俺が見えるか？」

「10時方向だ」

頭を右に振ると斎田の零式戦が寄せて来るところだった。僚機もいる。

黒間は胸をなでおろす。

「スピットファイアは？」

「すまん。逃げられた」

予想した回答。あるいは予想された回答。

「やっこさん。いい腕だったよ。ちょっと舐めてかかっていた。ヤバかったな」

黒間は斎田の殊勝な発言に肝を冷やす。

余程のことがあったのだろう。

「ま、次に俺と会った時が赤鼻の最後だけどよ」

「赤鼻？」

斎田から聞き慣れたない単語が飛び出す。

「ああ、やっこさん。プロペラスピナーを真っ赤に塗ってやがった。なんのつもりか知らんが、よく目立つ。次は逃がさねぇよ」

「そうだな」

黒間は暗く嘯いた。

それは次があればの話だった。あのスピットファイアがどれだけ奮戦し、奇策を用いて日本軍を翻弄したところで、もはや彼らには後がない。

最後には追い立てられ、狩られるだけだ。

重爆が投下した爆弾で月面のようになりつつあるシンガポールを見て、黒間はそう思った。

７２時間に渡る連続砲爆撃の後、日本軍はジョホール海峡を渡り、

遂にシンガポールに上陸した。
イギリス軍は水際で激しく抵抗したものの、砲爆撃で防御陣地の大半が機能を喪失していたこと、さらに絶えまない砲爆撃で士気が低下していたことが致命傷になった。イギリス軍は数時間の戦闘で海岸線を放棄し、日本軍は橋頭堡を拡大した。
拡大した橋頭堡に仮設橋が敷設され、日本軍の突撃砲と戦車が展開すると対戦車火器が絶望的に欠乏していたイギリス軍は総崩れになり、後は一方的な展開となった。
１９４１年2月１１日。イギリス軍が降伏。日本軍は紀元節までにシンガポールを攻略した。
イギリスのアジア植民地支配の中枢にして、インド洋と太平洋をつなぐ結節点であるシンガポールが陥落したことは一瞬にして世界を駆け巡った。
それはイギリスの終わりを告げる弔鐘となった。
翌日、カナダのオタワにてイギリス亡命政権の首相チャーチルは改めて枢軸国との徹底抗戦を表明した。このラジオ演説でチャーチルは自身の健在と強気の姿勢を示したが、それはイギリスの窮状を示す背理でもあった。
その証拠に同日に予定されていたイギリス戦時国債の入札は延期された。札割れが起きるようなことになれば、信用崩壊に繋がりかねないと懸念されたためである。
日程を変更した上で実施された国債入札は無事に落札されたものの、ニューヨーク債権市場でのイギリス戦時国債の利回りが急騰した。
イギリスの債務返済能力に世界中の投資家達が疑問符をつけたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8835bk/

紺碧の空戦録

2013年9月18日18時34分発行